

島津家歴代制度卷之拾九 天明 享保

御賄料

他国人数定

(本文より補)
御役々他国人数定

御国旅人数定

御賄料

一一〇三

(一〇四号行間朱書)
一大身分ニテ江戸勤ノ節ハ御賦先例究テノ格式無之候、

御家老ヨリ段々ニ御賦ノ格式被相定^①候得ヘトモ大身

分御城代ノ御賦格式此内不被仰出候、此節右ノ格式被

相定候、

一高ノ不依多少、当分兵庫殿・周防殿・玄蕃殿ノ格式ノ人ハ七十人・乗馬二匹、

但、右格ノ嫡子ハ次之ケ条之通、

一当分島津左衛門・島津筑後杯ノ格式ハ、一万石以上六十人、一万石以下ハ五十人、両様トモニ乗馬二匹、

但、右之部屋栖ハ三十人・乗馬一匹、

一御城代、高^②ノ不依多少、六十人・乗馬二匹、

右之通被相定候、以前ノ例ヲ以不足ノ様ニ存儀モ可有之候ヘトモ、御賦ノ多少ハ段々時々相替候事モ有之、

御賦ノ多少家々格式ニ構無之事情、若ケ様ノ儀願事杯申上人有之候ハ、無調法ニ可罷成候、此旨可奉其意候、

以上、

享保^(マ)五丑五月朔日、於江戸被仰渡、

一一〇四

一御賦ノ儀、以来ハ賄料ト可申候、依之、幾人賦ト可相

心得候、

一右ニ付、是迄御賦重等ノ節、六人賦被仰付候ト申渡有

之候^⑩ヨリハ、新番ニ被仰付候ト申渡、御賦ハ自六人賦可相渡候、尤、依人体、六人賦被仰付候テモ新番ニハ不相成向モ有之候、夫ハ格式ニハ不相掛事故、六人賄料被下置候ト可申渡候、左候ヘハ、六人ノ賄料被下置候ト計有之候付、新番ニハ不相成候、

一 右同断、十人賦被仰付候ト申渡来候分ハ、是レハ小番被仰付候ト申渡、御賦ハ渡来ノ通十人賦可相渡候、尤、十人賦ニ被仰付候テモ身分小番ニ不相成格式ノ者ハ、十人ノ賄料被下置候ト可申渡候、

一 四人賦・五人賦・七人賦・八人賦等、其外右已上ニテモ格式ニ不相掛分ハ幾人ノ賄料被下置候ト可申渡候、依之、御役人無役等ニ迄迄其格式ニ不相掛分ハ自右通可有之候、

一 小番家柄ノ者、五人賦以下之御役相勤居、依年功ニ、其役ニテ御賦ハ六人賦被下置候儀有之節ハ、新番被仰付候ト申渡候テハ家柄ニ相違ノ事候間、ケ様ノ節ハ六人ノ賄料被下置候ト可申渡事ニ候、大番家筋ノ者同断ノ節ハ、其賦高ニテ新番ニ被召入事候故、是ハ賄料ノ

不及沙汰、自新番被仰付候旨申渡筋ニテ可有之、右通、同役ニテモ依家格、其節々申渡振相替事ニ候、其外ハ右ヲ以可相調候、

右^⑪通、向後被相改旨被仰出候、

天明五巳六月八日

(島津久金)
伊賀

一一〇五

一 御心附高ノ事、御合力高

一同様ノ事、御合力銀

一支度料銀ノ事、御心付銀

御宿坊料ノ事、御宿坊御手当銀

右之通、唱被相替、

天明六巳六月

一一〇六

一 是迄十人賄料被下来面々、御広敷番之頭^⑫被仰付候得ハ六人賄料被下来候得共、以来八十人賄料可被下候、尤、当分相勤居候面々ハ是迄之通可相心得旨被仰渡、

天明八申三月

(島津久邦)
和泉

一一〇七

一 四人賦已上ノ諸奉行御国行ノ節、上下ノ無差別、①一日に真米六合ツ、被下ノ旨、先年申渡為有之事候へ共、御賦銀等モ古賦之通被仰付事候故、都テ以前ノ如ク上一升三合、下六合ツ、被下之候条、被得其意、如例可被申渡也、

享保七寅四月

御勝手方

一一〇八

一 御一門・大身分、遠方 御鷹野 御光儀先へ拜見又ハ御供ニテ被差越候節、御賦飯料・送人馬等不被下候、
一 大御目付以上ノ儀、同断ノ拜見ニ罷越候節ハ御賦飯料・送人馬不被下候、勤方ニ付被差越候節ハ御規模之通可被下候、

一 大番頭以下御役々、同断被差越候節ハ随分人数手細ニ有之候様相心得可差越候、現人数ノ分ハ飯料被成下、

送人馬入用分可被下候、勤方ニ付被差越候節ハ御規模之通可被下旨被仰渡、

天明三卯十月

(島津久金)
左中
(島津久起)
大進

一一〇九

一 御使并間之交代へ宰領物持夫賃一人五貫目持ニテ相渡、間交代へハ持夫六人以上ヨリ受負賃六貫目持ノ積ヲ以渡来、尤、不急御用物ノ外、御使・間交代共宰領被仰付間敷趣、去ル子年以来追々申渡有之候処、兎角急静共才領物及太分、②率別テ御出方ニモ相掛、御不益ノ事候、此節格別御儉約ヲモ被仰出、少事迎モ御費筋無之様、鎖細ノ取シラベ等被仰付事故、持夫賃ヲモ夫々減少可申渡候得共、当時東海道・木曾路共ニ近年凶年勝ニテ、人馬継立等不自由ノ趣ニ付、一往御使ノ儀ハ有来通ニテ、間之交代才領へハ、持夫五人以下ハ輕尻賃不被成下、応貫目五貫目持ノ割ヲ以賃錢可相渡候、六人已上ヨリハ受負賃并輕尻賃是迄ノ通ニ候、右次第ノ儀故、

御使ハ勿論、間ノ交代ニモ格別急成御用物ハ大坂迄早

天明八申七月七日

大炊

駄ニテ差廻、御国元へ船便届申付候、御国元ヨリモ右
振合ヲ以、大坂迄船便被差越、早駄ニテ御当地へ積廻

一一一

候様ニ申付候、尤、全体廻船便ヨリ被積越候御用品ノ
儀ハ是迄ノ通可相心得候、右旁心得ヲ以於向々取計、

一薩摩守参勤致供候諸士給分ノ儀御尋候ハ、家老持高
一万石以上ハ上下六十人余、一万石以下ハ五十人程ノ

可及御差支程ノ御用物迄、其訳合・品立ヲ以、前広御
趣法方へ申出、吟味ノ上才領可申渡候条、引請ノ於御
役場細密氣ヲ付、心得違無之様取扱可仕候、

賦ニテ、其下ノ役目段々ノ人数御座候、諸士持高模合
銀ヲ以、江戸詰中不依上下、一ヶ月一人ニ付銀二十三
匁ヅ、相渡、船中道中ノ賦、駄賃・旅籠銀等相応ノ賦

右之通、於江戸申渡有之候段申来、於爰元モ先達テ申
渡置候条、猶又委曲遂吟味、御出方不相掛様可致取扱
旨、可承向々へ可申渡候、

ヲ以相渡申候、船并小屋ノ疊仕道具等ハ檀那方ヨリ相
渡申候、

天明八申七月八日

(兼別乗祐)
大炊

上使御答書

一一二

一一〇
御参勤御下国ノ節、御先荷御跡荷トモ五貫目持ニテ御

一道ノ嶋渡海ノ代官并付役、御扶持米・故実銀、真米一
斗五升ツ、

定之通持夫賃相渡候様、先年申渡有之候へトモ、以来
六人持以上ヨリ受負賃六貫目持ノ積ヲ以可相渡候、
右之通申来候条、可承向々へ可申渡候、

但、上下共一ヶ月一人分銀五匁ツ、
但、右同断右之賦ニテ、米ハ十ヶ月分、銀ハ二十五
ヶ月分渡海ノ節被相渡、代官主従六人賄、附役主従

三人賄、

一道ノ嶋へ渡海代官并付役、於島元相果候節者、上一人相除、下人ハ其主人ノ賦ニ応シ、積間一人ニ付五石ツ、可被下候、

一於琉球諸島^①相果候人、五人賦以上ハ一人ノ御賦御扶

持米無差引払切ニ申付、参着迄ノ差引ニ申付候、且又、

四人賦以下ノ人ハ上一人無差引払切申付、残り人数賦

ノ分ハ現人数ノ不及沙汰、御当地へ参着迄ノ差引ニ申付候条、家来下人共罷登候節夫々ノ坐々へ送状相付、

一番船ヨリ乗付可申付候、若自分ノ支ニテ一番船へ乗

付難成候ハ、其節ヨリ重テ跡船へ致乗船候上ハ、御

賦御扶持米不申付候条、右之通ヲ以御賦方差引可申付

候、尤、已後右之通相心得、御規帳ニ張紙ヲ以記置、

此旨琉球諸島へ高奉行・物奉行ヨリ申越置、差引方可

申渡旨、卯二月二十八日鎌田太郎右衛門取次御証文ヲ

以被仰渡、

一一三

一真米一升九合 与人

同一升六合 横目

同一升

但、与人・横目役外ニ不被差越候テ不叶者有之節給

分、

右之通、道ノ嶋へ唐船漂着、琉球へ差越候節、右之通

被成下候旨、享保十九年寅三月四日御証文ヲ以被仰渡、

一一四

一真米三升七合先

右、十人賦御役ニテ諸外城へ行キ候節一日分御扶持米、

一真米二升五合同

右、三人賦ノ人右同断ニ付一日分、

一真米一升三合 上一人分

真米六合 下一人分

右、御兵具所付士・奥付士・御納戸付士・御厩付士、

御分国中行ノ節、主従二人御扶持米トシテ可相渡候、

一真米五合 上一人一日分

別テ急御用ノ時ハ旅込チン主従無構銀一匁ツ、可相渡

所中ニテモ日戻リノ時ハ一身扶持、

候、

一真米七合五勺 右同断

一真米一升三合 上一人分

所中ニテモ夜泊ノ時ハ如此故実銀込ル、

赤米六合 下一人分

一赤米六合 下一人卷日分

右者、諸所郷土年寄御用ニ付鹿兒嶋并諸外城行ノ節、

故実銀込ル、

主従二人御扶持米右之通被下候、

一真米七合五勺・赤米六合

一右同、所中ニテ泊リノ時ハ、主従御扶持米一日ニ上真

右、櫻嶋垂蠟所門番人一日分、

米七合五勺・下赤米六合ツ、取納究ノ節御扶持米ハ

一本琉球一詰二十八ヶ月トシテ、

高奉行方ヨリ可相渡候、

古銀百枚 在番奉行

一右同、日戻リノ時ハ、主従御扶持米一日真米五合・赤

同五百目ツ、 附役

米五合ツ、被下候、

同四百三十目ツ、 横目役

一真米七合五勺 泊リ一日分

同四百目

真米五合 日戻リ一日分

但、五割増込ル、

右、郡見廻御用ニ付行キノ節、他所并所中共、泊リノ

同五枚

時ハ七合五勺、日戻リノ時ハ五合ツ、被下候、

輕使被仰付候節、御心付トシテ被成下、

一外城衆中御奉公ノ時御扶持米方、日戻リハ所中ニテモ

一真米五合

一身扶持、所中ニテモ夜泊ノ所ハ主従扶持被下候、

右、足輕・御小者・奥付足輕・御中間、鹿兒嶋中御奉

公相勤候節、右之通被成下、

一真米二升五合泊リ 同一升五合日戻リ

右ハ、鹿兒嶋諸名御普請檢者、郡奉行ヨリ差紙ニテ御

扶持米被成下候、

一真米一升三合 赤米六合

右、噯一日分御扶持米、

一真米一升三合

右、郡見廻一日分右同、

一真米七合五勺

溝見廻庄屋右同、

右ハ、諸所郷士年寄・郡見廻・庄屋、溝下見掛へ相勤候節、日戻リ泊リ無構、右之通被成下候、

一御普請方藏 進物藏

右役人、次渡勘定日限五十日限相仕廻、若押物有之、

引付相渡候ハ、引付申渡候日ヨリ十日限上納申付候、

右日限相過候ハ、御賦方ハ不被下候、

一御台所藏

右同断三十日相仕廻、若押物有之候ハ、右同断、

右ノ外藏役人并致取払候役人ハ都テ二十日限相仕廻、押物有之候ハ、右同断、

右ハ、江戸詰諸藏役人次渡日限ハ被定置候通ニテ、次

渡勘定日限右之通申付候、若押物有之、上納方右日限

相過候ハ、御賦方ハ不被下候、此旨同役へモ申越、

御勘定方小頭へモ可申渡也、

巳四月十八日

御勝手方印
取次
皆吉九平太

一一五

一真米一升三合 赤米六合

右、筆算・蒔見・竿取一人一日分、

一御供立并間之上下ノ節、大目付以上陸尺六人、御側役

已上四人被下来候得共、以来御供立ノ節ハ勿論、間之

上下ノ節逆モ、大目付已上陸尺八人、御側役已上六人

被成下候、尤、御供立ノ節御行列乗ノ面々御納戸奉行

以下有来通四人被下候旨申来候条、可承向々へ可申渡

候、

寛政七卯五月

(川上久致)
久馬

一一二六

寛政元年上使御答書ノ内

一 太守様御参勤ノ節、致御供候諸士給分ノ儀御尋候ハ、

一 門并家老已下平士迄依役格賄料段々相定置、一人賄

料一ヶ月銀三十目・米一斗五升ツ、相渡外、船中道中

賄料・駄賃・旅込銀等相応ニ相渡候由可申上候、以上、

一一二七

帖佐与私

一 御検地門割并諸所上見ニ付、

所噺一人一日真米一升三合・赤米六合ツ、

右同郡見廻右同ニ付、真米一升三合ツ、

庄屋右同ニ付、真米七合五勺ツ、

功才二人、一人一日ニ赤米五合ツ、

一一二八

右同

一 御新田諸普請ニ付、

噺一人、日戻リ真米赤米五合ツ、泊リ真米七合五勺

ツ、

溝見廻一人、日戻リ真米五合ツ、泊リ真米七合五勺

ツ、

一一二九

右同

一 溝下見掛検者付役ニ付、

噺一人、一日真米一升三合・赤米六合ツ、泊リ日戻

リ無構被下候、

溝見廻右同ニ付、真米七合五勺ツ、溝見廻無之場所

ハ郡見廻相勤候、其節ハ郡見廻一人一日ニ真米一升三

合ツ、

庄屋右同ニ付、真米七合五勺ツ、

一一二〇

右同

一大山野見掛二付、

郡見廻一人二付一日ニ真米一升三合ツ、

右、島津左衛門・島津筑後格、

但、右格ノ部屋栖ハ三十人・乗馬一匹、

高不依大小

一主従六十人・乗馬二匹

御城代、

一主従六十人・乗馬二匹

御家老万石已上、

一主従五十人

右、万石已下御家老、

一主従三十五人・乗馬一匹

若年寄万石已上、

一主従三十人・乗馬一匹

若年寄万石已下、

高不依大小

一主従二十五人・乗馬一匹

大御目付・大御目付格、

高不依大小

一主従二十三人・乗馬一匹

寺社奉行・御勘定奉行、

一一二一

高奉行所御規

他国人数定

高(依脱カ)
不多少

一主従七十人・乗馬二匹

右、兵庫殿・周防殿格式ノ人、

但、右格ノ嫡子ハ島津左衛門・島津筑後格同前、

高一万石以上

一主従六十人・乗馬二匹

高一万石以下

一主従五十人・乗馬二匹

右同
一主従二十五人・乗馬一匹

御子方与頭・番頭、

右同

一主従二十五人・乗馬一匹

与頭御番頭・御番頭格、

一主従二十五人

無役ノ御子方御礼使等ノ節、

高不依大小

一主従十八人・乗馬一匹

御用人・御用人格、

右同

一主従七十人・乗馬二匹

右、御一門列、

右同

一主従六十人・乗馬二匹

右、御一門列ノ部屋栖、

右同

一主従六十人・乗馬二匹

右、大身分、

一主従五十人・乗馬二匹

右、大身分部屋栖、

一一二二(の1)

御船手御証文ノ内

一乍恐口上書ヲ以申上候、親庄之丞脇船頭役被仰付候節、

私事外城衆中ニ被召成難有奉存、小船頭役相動居候、

然処ニ、先比定船頭役ニ被召仕、今度江戸行八幡丸船

頭トシテ被差遣候付、御賦方・御手形被仰付候処、一

身ノ御賦被成下候、依之、乍憚訴申上候ハ、外城衆中

座付士一身ノ場所へ被召仕候へハ片付名字ニ被仰付候、

尤、御船手ノ儀モ小船頭役相動候へハ一身並ノ御賦方

申請候、脇船頭衆外城衆中ニテ主従三人ノ御賦被仰付

事ニ御座候、定船頭役ヨリハ名字被仰付儀ニ御座候へ

ハ、主従ノ御賦被仰付被下度奉願候、御赦免士定船頭

役ニ被召仕候へハ前々ヨリ主従ノ御賦被成下事ニ御座

候間、近比恐多申上事ニ御座候へトモ、何卒奉願筋ニ

被仰付被下候様ニ宜御申上可被下儀奉願上候、以上、

享保五子五月二十六日
定船頭 右
平山仁左衛門

(一一二二の2)

右ハ、御船奉行次書ヲ以被申出候処、申出ノ通被仰付候段、子六月三日宮之原甚太夫取次御証文ヲ以被仰渡、

一一三三

一御供立并間ノ上下ノ節、大目付以上六尺六人、御側役已上四人被下来候ヘトモ、以来御供立ノ節ハ勿論、間ノ上下ノ節迎モ、大目付已上六尺八人、御側役已上六人被成下候、尤、御供立ノ節、御行列乗ノ面々御納戸奉行以下有来通四人被下候旨申来候条、可承向ヘ可申渡候、

寛政七卯五月

(川上久致)
久馬

一一三四

享保二十年卯閏三月、長崎御屋敷御修補トシテ御普請方役々被差越候ニ付、御普請奉行シラヘノ内、
一去ル享保二酉年御修補ノ節、大工一人滞在中銀三匁三分四リ、中途往来一人ニ二匁七分ツ、被下、後例ニ不

成様被仰渡候、此節ノ儀、滞在中江戸詰賃取大工同前

一日一人二匁四分、往来ハ二匁、人足ハ其節赤米一升重ニテ、^{⑧候}多人數ノ節ハ賄方致能候筈候ヘトモ、此節

ハ主取一人ニ付赤米一升五合重申付候ヘトモ、定番トモ段々断申出候間、押テ申付候ニ付、右通一升五合重被仰付度、閏三月廿八日伺出、同二十九日御証文ヲ以申出候通被仰付候事、

一江戸護摩所八人賦ニテ候処、此節ヨリ七人賦被仰付候旨被仰渡、享保五年子二月二十八日、^(島津久實)内記殿ヨリ、

一一三五

一享保二十年卯十一月 公義御用ニ付、砂糖黍五百斤且又黒砂糖煉調候者御用ニ付、櫻嶋小池村ノ作之丞・^{⑨兵衛}赤水村ノ源之丞・吉右衛門^⑩三人、足輕才領ニテ長崎ヘ被遣候間、右△三人ノ者ヘ賦飯米ノ儀ハ船中一ヶ月米一斗五升・銀七匁、於長崎滞在中一日一匁八分ツ、被成下候旨被仰渡、

享保二十年卯十一月二十八日 御証文

一 諸郷へ^①差越候御奉公人御扶持米、真米ヲ以相渡来候

ヘトモ、真米不足イタシ候ニ付、向々吟味ノ趣申出、

一 往真米^(赤カ)半分ツ、被成下、赤米ノ分ハ当分勤掛ノ面々

ハ諸所下代方へ御代官ヨリ右之趣申渡、米受取ニ差遣候節下代ヨリ相達、^①渡過無之、委曲可申渡候、

一 屋久嶋在番其外詰役々、七嶋三嶋へ被差越候役々、前条同断、

一 櫛代米当秋ヨリ赤米ヲ以、前条同断、

一 琉球・道ノ嶋勤ノ役々

一 当所郡見廻

一 郷役々諸勤方

一 倉岡助用米

右四行、惣テ真赤半分、無部重可相渡候、

一 赤米弘方相重候付テハ、外場クリ入米無滞様積船可申渡候、

右之通申付候条、諸事如例可被申渡候、

文化元子八月七日

御勝手方印

一一二七

一 此節格外之御儉約ニ付テハ、江戸・京・大坂へ相詰候六人賄料已上者御賄料五ワリ引方被仰付候条、於向々不洩様取扱可致候、

右申渡、奥掛・表方へモ可相達候、

享和元酉九月

(川田佐賢) 伊織

一一二八

一 御役人ノ内江戸詰ニ付被成下候御合力銀ノ儀ハ、三ツ

割ニシテ御国許・大坂・江戸ニテ被相渡候御規ニ候処、

間ニハ御国元・大坂ニテ申受、後江戸ニ於テ依願被相

渡儀モ有之候ヘトモ、其通ニテハ御規ニモ相掛事候間、

以来^①、^②所ニ於テ申受後候向へハ何様無抛願出候テモ一切取揚無之段、江戸ヨリ申来候条、此旨可承御役々

へ可申渡候、

享和三亥五月

(高橋權次) 縫殿

一一二九

川元市左衛門、就御用種子嶋へ急ニテ被差越候付、左之通、

通事

森山権九郎

一 右、種子嶋へ御用ニ付、川元市左衛門へ来ル十七日急ニテ被付遣候、通事ノ儀ハ一身旅込賃被下候御法候得トモ、遠島へ差越候御取訳ヲ以、主従二人ノ旅込賃被下候、以下略、

享保十七子十一月十五日 異国座印

一一三〇

一 郷土ノ儀、其所中致勤方候節、泊日戻リノ差別ヲ以御扶持米相渡事候へトモ、此節御省略年限中、持高二十石已上致所持候者ニハ御扶持米不相渡様申付候条、年中何ソニ付相渡候節、御扶持米申受候日数差出ノ表へ持高ノ員数書記、向々へ可差出候、
右、諸地頭へ申渡、其外可承向々へ可申渡候、

享和元年酉七月六日

(川田佐實) 伊織

(高橋權次) 縫殿

一一三一

一 諸所郷土共郷役相勤候節、持高二十石以上致所持候者へハ御省略年限中御扶持米不被成下旨申渡置候処、部屋栖ノ者郷役相勤候節ハ、親持高四十石以下ノ者へハ御扶持米可相渡候、尤、四十石已上ノ部屋栖ノ者へハ右年限中御扶持米不相渡様ニ申付候条、部屋栖ノ者申受候節ハ親持高書記、向々へ差出候様申付候、
右、諸地頭へ申渡、其外可承向々へモ可申渡候、

享和元年酉七月

伊織 縫殿

一一三二

西目船中
一 一身御賄、船中一日ニ銀六分五リ・米五合ツ、
一 右同、働勉銀二匁七分、滞在ハ一匁八分ツ、
右之通被成下候御規ニテ候、上下人数幾人賦ニテモ右

ヲ掛候へハ被下方相知候旨、高奉行所ヨリ承候、

一一三三三(の1)

一文化二年丑正月、豊前小倉へ御用有之、御兵具方肝煎
勤森山庄右衛門・足輕中村覚左衛門中急ニテ被差越候
ニ付、御船手水手ノ伊右衛門被召付被遣候ニ付、御船
奉行ヨリ高奉行問合ノ内、

久ミ崎御船手水手ノ 伊右衛門

一右ハ、小倉表へ御用有之、肝煎森山庄右衛門并足輕一
人被差越候故、右之伊右衛門ニモ召付被遣候処、中急
静ニテ水手九州表へ被遣被下方ノ先例不知候故、何
程共ニテ可有之哉、差引方難申渡候間、先日御尋申越
置候間、早々御知セ給度、此旨又々申達候、已上、
丑三月八日
久ミ崎詰御船奉行
高奉行衆

(一一三三三の2)

張紙ニテ、本文ニ付
一銀百三十五匁九リ八毛

内、

三十六匁二分七リ九毛

他領水俣ヨリ小倉マテ、六十九里半、九州路中急

料、上リ、旅込并船中除、ワリ一里ニ五分二リ二

毛ツ、

十五匁一分四リ三毛

小倉ヨリ御領内山野マテ、六十八里、下リ、右同

静料、ワリ一里ニ二分二リ二毛七弗ツ、

八十一匁

丑正月十五日ヨリ同二月十五日マテ、日数三十日、

但、一日二匁七分ツ、

足輕一人分

本文、御問合相達候、水手被下方当座へハ相知不申候

ヘトモ、一身者ノ儀ハ右之通相渡申候間、相渡候成行

書写遣^申候、已上、

丑三月十日

高奉行

久ミ崎御船奉行衆

(一一三三の三)

別紙ノ通、高奉行ヨリ返答相達候、其元ヨリ右式ノ先例ハ有之間敷哉、且一身ノ差引イタシ候方ニモ可有之哉、此方ニテ決シ難ク候間、被吟味致何分被申越度、

三月十四日

久ミ崎御船奉行

御船奉行

(一一三三の四)

本文、爰元ニテモ相糺候処、跡々右式被下方差引等ノ儀不糺付、然トモ、去ル巳年御船改喜丸難船、高鍋領へ漂着ニ付、小船頭ノ八右衛門彼地へ被差越候儀有之、静急ノ儀ハ分明ニ不相知候ヘトモ、其節ノ被下方一身ノ賦ニテ被成下候旨申出、左候へハ此節ノ儀モ右八右衛門被下方ニ被引当候ハ、高奉行返答之通足輕被下方同様ニテ、何モ相当ノ方相見へ候間、右之例ヲ以差引被申渡ニテ可有之、此旨及御報候、以上、

丑四月五日

御船奉行

久ミ崎御船奉行

(一一三三の五)

右ニ付、猶又高奉行へ及問合候処、左之通、

本文ニ御掛合相達、当座帳留見合候処、水手被下方ノ儀ハ見当不申候得トモ、小船頭坂元八右衛門高鍋領へ

御船破船ニ付、巳五月十七日寛政九年ヨリ同六月二十四日

マテ相勤候段、御方差紙見届、他領勤ハ一日二匁七分、

御当地往来一日一匁八分ツ、一身御賄料、巳七月二

十一日相渡候帳留相見へ申候、此旨御報ニ及ヒ候、以

上、

丑七月九日

高奉行

御船手

(一一三三の六)

久ミ崎御船奉行ヨリ御船奉行へ問合書ニ張紙、

一 上略、高奉行方へ其節ノ成行承合候処、八右衛門

被下方ニ付テハ当座差紙ニ任セ、御国往来并他領御賦

銘々取分ケ御法ノ一身賦被成下候筋、御帳面相見へ候

段、別紙ノ通返答相達候間、左様御取計有之度、中略、

何ソ御証文沙汰等ノ儀相見へ不申候、末略、

丑七月十五日

御船奉行

久ミ崎詰御船奉行

一一三四

一 御上下ノ節、江戸ヨリ備後尾之道通馬料被成下候、枚方御通行ノ節モ同断被下事候処、此節分テ御取締ニ付、江戸ヨリ大坂マテ通馬料ハ是迄ノ通ニテ、大坂ヨリ尾之道マテ枚方筋通馬料ハ已来不被下候、且又、御道中ニテ昼飯等ノ直段ニ付、重旅込跡達テ被下事候へ共、是又同断不被下候旨、於江戸申渡有之候段申来候条、此旨可承向へ可申渡候、

文化五年辰十月

(島津久泰)
将監

一一三五

一 琉球・道之嶋へ^{⑨被}差越候人并付足輕、御心付銀又ハ故実代被成下事候へトモ、当御時節柄ニ付、一往右被下方無之、御扶持米マテ被下置候、左候テ、当詰ノ人ハ最早渡方為有之筈ニ付、已後代合ノ節ヨリ右通ニ候、

一 諸藏役人ノ内、御心付銀被下^{⑩末}候分ハ、前条同断ニ付、

一 往不被下候、左候テ、以来蔵相仕廻候上、御損失無之様御為筋ノミ心掛、骨折相勤候者へハ、諸所下代・

出物藏役人又ハ垂蠟所取締役人等ノ間被仰付答候、

右之通被仰付候条、可承向々へ可申渡候、

文化六年巳三月四日

(頼桂久壽)
信濃

一一三六

一 是迄十人賄料被下来候面々、御広敷番之頭へ被仰付候ハ、六人ノ賄料被下候へトモ、以来ハ十人賄料可被下候、尤、当分相勤居候面々ハ是迄ノ通可相心得旨被仰出候段申来候条、可承向々へ可申渡候、

天明八申三月

(島津久邦)
和泉

(一一〇六号文書に同じ)

一一三七(の1)

文化元子十月

一 御カリ船掛藏方目付宮内弁助ヨリ相付候高岡町人清水

利右衛門外ニ二人、他領勤ニ付被下方申出趣有之、御代官シラへ、

高田猛大夫

本文承知仕候、高岡町人甲斐清兵衛外一人、大坂御仕

一三三八(の1)

^②兵衛

登米積船借受方トシテ他領中村へ安永十年比為差越由、其節一人前一匁八分ツ、被成下候旨、小笠原郷左衛門

一文化四年卯、松嶋表唐物締横目肥後十之丞・蔵方目付梅北次助ヨリ、松浦肥前守様御領内彦岐國へ琉球船漂着ニ付平戸マテ船受取方ノ儀、松嶋ヨリ同越、右飛脚

取次御証文ヲ以被仰渡置候由、高奉行吟味ノ趣相見へ、

付足輕永井才之丞ニ雇水手向田町ノ三之助差越候処、

中略、然処、先年日州表御仕上方御借船御 治定

又々急飛脚右之者共^⑤右^⑥兩人詰先平戸マテ被遣候処、足

ノ節^④賢見分横目召列候町人一日一人二百四十八

輕被下方ハ相知、高奉行方ヨリ相渡候へハ、浦水手三

文ツ、被成下候旨、去戌九月朔日松崎次左衛門取次御

之助被下方不相知、不相渡候ニ付、右兩人ヨリ申出趣

証文ヲ以被仰渡置候、右ニ被準、此節召仕候町人共右

有之、高奉行シラへ、

同様被成下方ニモ可有之御座哉、 末略、

本文承知仕候、久ミ崎御船手御雇水手三之助、肥前松

一御借船一件ニ付、他領へ急事等ニテ飛脚差遣候節ハ一

嶋ヨリ急飛脚差越、又々平戸マテ急ニテ差越候処、被

人ニ錢五百文宛被成下候旨、是又前文同様御証文ヲ以

下方ノ儀吟味被仰渡相糺候へトモ、右体之者被下方当

被仰渡置候間、右同様被仰付度、 末略、

座ヨリ相渡候儀無之、勿論類例等モ見当不申候、御船

丑八月三日 表方御代官

奉行方へモ委儀相知不申由御座候ニ付吟味仕候処、御

(一三三七の2)

此表、御代官シラへ之通申付候条、如例可申渡也、

当地ヨリ大坂マテ人足急料、上ノ節六十二匁四分一リ

御勝手方印

五毛、下ノ節八十五匁七分三リ被成下御規ニ御座候

②三付

間、右ヲ以、松嶋ヨリ御当地、夫ヨリ平戸マテ往来里数小割仕候処、上リ一里一人ニ二分九リ九弗、下リ右同三分三毛六弗ツ、被成下方御座候間、右被下方ヲ以、本文三之助ヘモ被成下方ニモ可有之哉、末略、

辰十月五日

高奉行

(一一三八の2)

(行間朱書)

本文ニ付、往来日数十一日分ハ六分ニ七合五勺ツ、ノ賃飯米ハ差引相成候事、委細文化四年卯八月久ミ崎形状留ニ有之候、

(一一三八の3)

此表、高奉行シラヘノ通申付候条、右之趣横目ヘ申越候儀トモ如例可申渡也、

辰十月五日

御勝手方印

取次

高田猛太夫

一一三九

一御上下御供并間上下ノ節、伏見大坂滞在中宿賃ノ儀、

現人数ノ分ハ御物払、影人数ハ諸人ヨリ相払来候ヘト

モ、向後ハ於大坂御賦銀ノ内ヨリ差引被仰付、都テ御物ヨリ宿主ヘ一所ニ相渡候様被仰付候段江戸ヨリ申来候条、可承面々ヘ可申渡候、

安永十年丑三月

(島津久起)
大進

一一四〇

一高岡横目トモ仕上セ御米船赤江津ヘ差越、繩張封ノ印相勤候儀ニ付、依願往来日数ハ上下三人一日一人ニ文銀三匁六リ、滞在日数ハ一日一人ニ文銀二匁四リツ、被下、高岡ヨリ赤江マテ送人馬ノ儀ハ不被仰付、船頭ヨリ送迎相勤候様ニ被仰付候旨、寛保三亥正月七日大野清右衛門取次御証文、高奉行・御船奉行ヘ御当リ、

御役々他国人数定

一一四一

一高不依多少、主従七十人・乗馬二匹

右、兵庫殿・周防殿・玄番殿格式三人、

但、右格之嫡子ハ島津左衛門・島津筑後格同前、^⑧杯

一高万石以上、主従六十人・乗馬二匹

一高一万石以下、主従五十人・乗馬二匹

右、島津左衛門・島津筑後杯格、

但、右格之部屋栖ハ三十人・乗馬一匹、

一高不依多少、主従六十人・乗馬二匹

右、御城代、

一高万石以上、主従六十人・乗馬二匹

万石以下、同五十人・乗馬二匹

右、御家老、

一高万石以上、主従三十五人・乗馬一匹

万石以下、同三十人・乗馬同

右、若年寄、

一高不依多少、主従二十五人・乗馬一匹

大御目付・大御目附格、

一高不依多少、主従二十三人・乗馬一匹

寺社奉行・御勘定奉行、

一高不依多少、主従二十一人・乗馬一匹^⑨

御子様・与頭・御番頭、

一高不依多少、主従十八人・乗馬一匹

御用人・御用人並、

一高不依多少、主従十七人・乗馬一匹

町奉行、

一高不依多少、主従十五人・乗馬一匹

御近習役、

一高不依多少、主従十五人・乗馬一匹

江戸御留守居、

但、江戸ニテ勤ノ節ハ乗馬二匹、其節ハ中間二人分

江戸詰中計被下候、

一高不依多少、主従十五人・乗馬一匹

京都・大坂御留主居、

一高不依多少、主従十五人

琉球在番、

一高不依多少、主従十四人・乗馬一匹

御納戸奉行・物頭、

一高不依多少、主從十三人・乗馬一匹

御守殿添御用達、

右一行、前方ハ無之、享保十五年戊七月十六日江戸送
状ニテ書記也、

一高不依多少、主從十二人

久ミ崎御船奉行・御船奉行、

一高不依多少、主從十一人・乗馬一匹

御近習役並、

一高不依多少、主從十人・乗馬一匹

納殿役人、

但、跡々ヨリ十一人賦ニテ勤来候人ハ以前之通、

一主從十人・乗馬一匹

但、五百石已上、一人御賦米、

御普請奉行・御記録奉行・長崎御附人・高奉行・物奉

行・御馬方、

但、長崎御付人長崎へ差越候節一人重ニテ格別ニ候、

一主從六人

但、五百石以上、一人御賦米、

御小納戸役・御小納戸役並・中通御目付・御目付・御

祐筆・納殿・山奉行・郡奉行・金山奉行・御細工奉行・

御祈念方・屋久嶋奉行・宗門改役・磯奉行・尾畔奉行・

御茶道頭・御記録方添役、

但、此御役ノ内ニモ十人御賦ニ被仰付者モ可有之、

且又、御役不被仰付ヨリ十人御賦ニテ江戸詰イタシ

候者ハ、右之御役ニ被仰付^{①候}トモ其身計八十人御賦

可被下候、

一納殿役ノ儀ハ本十人御賦ノ人ニテモ納殿役々被仰付候

へハ六人賦ニ被仰付候事、

一主從五人

但、五百石以上、一人御賦重、

唐船方受込・寺社方取次・御勘定方小頭・御勘定吟味

役、

但、此御役ノ内ニモ十人御賦ニ被仰付者モ可有之候、

且又、御役不被仰付内ヨリ十人御賦ニテ致江戸詰候

者ハ、右ノ御役被仰付候へトモ其身計八十人御賦可

被下候、

一主従四人

但、五百石已上、一人御賦重、

代官・御台所頭・御春屋役、

但書同断、

一主従四人

但、五百石已上、一人御賦重、

御側御小姓・御側御同朋、

但書同断、

一主従四人

但、五百石以上、一人御賦重、

表御同朋、

但書同断、

一主従四人

但、五百石以上ヨリ六人御賦、

表御小姓、

一主従三人

但、五百石以上、一人御賦重、

奥御小姓・御側医師、

右、御側医師人数賦ノ儀ハ段々依人被仰付候、時々証

文ヲ以可相極事、

一主従五人

但、五百石以上、一人御賦重、

御書院役人、

一主従七人

江戸詰護摩所、

一主従五人

御医師、

但、御雇医師人数賦ノ儀ハ時々証文ヲ以可相極候事、

一主従十人

但、五百石以上、一人御賦重・乗馬一匹、

御馬廻、

一主従六人

但、五百石以上、一人御賦重、

新御小番、

一主従五人

但、五百石以上、一人御賦重、

御包丁人頭、

一主従三人

但、五百石以上、一人御賦重、

御步行、

但、徒目付御用ニ付京都へ罷登候時^①上下四人賦

可相渡事、

一主従三人

伏見御飯屋守、

但、伏見御飯屋相勤候内ハ五人賦、

一高ノ多少ニ付、段々高賦有之候トイヘトモ、五百石ト

万石ニテ賦ノ重被仰付事候間、其間ノ高賦不被仰付候

事、

一家督ニテ候ハ、依高御賦重可被仰付候、部屋栖ニテ候

ハ、御賦重被仰付間敷候、且又、同役ノ内御取分ニテ

御賦重被仰付人モ可有之候、是モ御規ニハ仕間敷候、

一御勝手方算用役ハ京・大坂詰ノ節ハ五人賦、江戸詰ノ

節ハ可為四人賦候、

一主従四人

御家老座筆者・御勝手方筆者・御側詰座筆者・御家老座筆者与力・若御年寄筆者与力、

但、御家老座・御勝手方寄筆者、江戸上下御賦方ハ

時々証文ヲ以可申渡候事、

一主従三人

御能方、

但、於江戸公界参^①ノ時ハ御物方ヨリ人足可相付候、

一主従三人

御側御茶道・小坊主・御料理役・御茶道・表坊主、

一主従二人

諸座付士、

但、座付ヲ離、表方御奉公相勤候ハ、主従三人可

為賦、右之子トモ座付ニテ御目見仕、御奉公相勤候

節ハ、主従二人可為賦候、御目見不仕候内ハ一身賦

可遣候、^①

一一身賦

足輕・御小者・御中間・奥付足輕・仕坊主、

但、右之外ニモ座付士ニテ無之者ハ可為一身賦候、

夫ノ賦ハ格別ノ事、

一 御部屋栖様御方へ相勤候人ハ、御賦方ノ儀ハ表方へ準
シ御賦可出事、

一一四二

(一四一)号行間朱書
一 御請奉行ヨリ御厩別当マテ十人ノ御賦

一 御小納戸役ヨリ御茶道頭マテハ六人御賦

一 唐船方受込ヨリ御勘定方吟味役マテ五人御賦

一 表方御代官ヨリ御同朋マテ四人御賦

但、右四行、此御役ノ内ニモ十人賦ニ被仰付候時ハ

一代小番可被召載候、御役不被仰付候内ヨリ十人賦

ニテ致江戸旅候者ハ、仮六人賦ノ御役被仰付候トモ

其身計八十人賦可被下候、

右之通、江戸旅ノ節ハ御賦被成下候、右御役人ニ入り

候者ハ江戸旅致サス候テモ十人ノ御賦被下候、御役々

大番ヨリ被仰付候時ハ一代小番帳ニ可書載、六人賦被

下候御役々大番ヨリ被仰付候節ハ新番帳ニ可書載候、^{⑧時}

五人御賦ヨリ以下ノ内ニモ六人御賦被下候者ハ右ニ可

準、

一 京・大坂・長崎・御当地・琉球ナドへ、十人或六人御
賦被下参候へトモ、右之御格式ニハ不被仰付候、

一 納殿役ノ儀ハ、本十人賦ノ人ニテモ納殿役へ被仰付候
へハ六人賦被仰付事候、此儀ハ不宜方ニテ、御賦相減

儀ニテ無之故、最前十人賦ノ時ニ一代小番ニ入候者ハ
其通可差置^{⑨候}、勿論大番ヨリ納殿役へ被仰付候時ハ新

番帳可書載候、

享保三年戊八月三日

一一四三

御供立ノ節、小倉・播摩路人数定^(應)

一 主従三十九人 万石已上御家老

一 同三十三人 御家老

一 同二十六人 若御年寄

一 同二十人 大御目付

一 同十八人 御番頭

一 同十三人 御用人

一同十二人 御近習役

一同九人 御使番

一同七人 御近習役・御記録奉行

一同五人 御小納戸役・御小納戸役並・中通

御目付・御祐筆・御茶道頭

但、御役ノ内ニテモ十人御賦被仰付置候者ハ主従七人御賦可出候、

一同主従七人 御馬廻

一同五人 御祈念方

外ニ具足箱持一人・弓台持一人、

一同五人 新御番

一同四人 御側御小姓

但、六人賦ニ被仰付候者ハ主従五人御賦可出候、外

ニ挟箱持一人、

一同五人 御側医師

一同四人 御側御同朋

外ニ挟箱持一人、

一上下三人ノ御賦已下召列候、依之者可為心次第事、
本ノママ

一上下五人御賦以上ノ人ハ本賦ノ通可申付候事、

一一四四

寺院社家

一上下二十人 内、六人駕籠昇 南泉院

右、大僧都成ニ付致上京参内ノ節、供廻リ乗物廻リトモ二十三人ノ手廻御取立被下、江戸へ罷下、僧正成相濟参内ノ節ハ、願王院僧正参内ノ例ヲ以、供廻二十五人ノ手廻ニ御取立被下候、右ニ付テ参内ノ外脇ノ勤有之節モ右之通御取立被下候、

一上下二十二人 外ニ駕籠人足六人 福昌寺

一上下十七人 内、六人駕籠昇

大乘院・浄光明寺・一乘院・弥勒院・大龍寺

一上下十三人 内、駕籠昇四人 大慈寺

右、紫衣ノ僧住職ノ節ハ着座被仰付事候ユへ、大乘院

以下五ヶ寺同前十七人御賄料被下候、

一上下十五人 内、駕籠昇六人 蓮光院

右、出世着座ノ節ハ右同断十七人御賄料被下候、

一上下九人 外ニ四人駕籠昇

不断光院・正建寺・神徳院・山内寺・廣濟寺・寶満寺・

感應寺・正興寺・幸善寺・般若院

一上下八人 外ニ駕籠昇四人

本永寺・遠寿寺・願成寺・正国寺

一上下七人 外ニ駕籠昇四人

右、虎之間ニテ住職被仰付候寺院御賦料、

一上下六人

右、御目見地ノ諸寺院且一所一ヶ寺出世ノ僧住職ノ節、

御賄料ハ出世僧ニテ無之節ハ上下三人御賄料、

一上下九人 外ニ駕籠昇四人

右、諏訪社大宮司職本田李御賄料、

一上下七人 外ニカゴ昇四人

右、福ヶ迫諏訪神主井上大和守・花尾山神主井上駿河

守御賄料、

一一四五(の一)

宝曆十三申年琉使者江戸参府ニ付御手当書之内

一主從二十人 読谷山王子

一同十人 湧川親方

一同七人 譜久山親雲上

一同六人 小録(標)親雲上

一同四人 兼ヶ段親雲上

一同四人 牧士親雲上

一同四人 真喜屋親雲上

一同四人 亀嶋親雲上

一同四人 多賀山親雲上

一同四人 幸地親雲上

一同四人 久志親雲上

一同四人 徳源(原)親雲上

一同四人 森山親雲上

一同四人 高宮城親雲上

一同四人 前川親雲上

一同三人 翁長親雲上

一同三人 田嶋里之子

一同三人 源川里之子

一同三人 徳村里之子

高奉行

一同三人 羽地里之子

郡奉行

一同三人 神村里之子

代官

一同三人 佐久間里之子

琉飯屋守

一身路次乗人二十一人

一身琉中間四人

一一四六

右ハ、此節江戸へ罷登候人数ニテ御座候間、御賦方先

覚

例之通被仰付被下度奉存候、以上、

一上下三人賦ハ京都マテ御中老女中一人

申七月六日

旅方琉飯屋守

久留助左衛門

上下二人賦若女中一人

(一一四五の2)

上下二人①賦御次女中五人

此表、来月二十三日御当地被差立、西目筋被遣、大坂

右、信證院様 於菟様御方女中、御暇被下、京都又ハ

へ中三日、伏見へ中兩日滞在、伏見川登兩日、美濃路・

江戸へ被召返候旨、御書付ノ内、

東海道日数二十日通路ニテ御伝馬被仰付候、依之、御

享保五子五月十八日 御証文

国道中ノ儀モ御伝馬同前、人馬数飯屋守ヨリ申出次第

御規ニ無構被相渡候間、御賦方諸事如例可被申渡旨、

伊織殿①御差図ニテ候、以上、

一一四七

申七月八日

岩下佐次右衛門

享保七年寅四月

御当地久見崎御船奉行

大龍寺

一南泉院・福昌寺・大乘院・浄光明寺・一乘院・弥勒院・

右七ヶ寺、門首着座ヲモ被仰付寺格故、十七人御賦、
内、カゴ昇六人、

一大慈寺

右、紫衣ノ僧住職ノ節ハ着座被仰付事ニ候故、右七ヶ
寺同前十七人御賦、内、駕籠昇六人、

門首ニテハ候ヘトモ紫衣僧ニテ無之住持ノ節ハ十四人

御賦、

一蓮光院

右、出世着座ノ節ハ右七ヶ寺同前、着座無之内ハ十六

人御賦、

一不断光院・正建寺・神徳院・山内寺・廣濟寺・寶満寺・

感應寺・正興寺・般若院

右八ヶ寺并般若院事、十四人、

一本永寺・遠寿寺・願成寺・正国寺・幸善寺

右五ヶ寺、十三人御賦、内、カゴ昇四人、

一南林寺・興国寺・妙谷寺

右三ヶ寺、十二人御賦、内、四人カゴ昇、

右之外、差立候寺院他国へ差越有之候節ハ、右御賦之

格ヲ以、時々之吟味次第、寺院相応御賦方可被仰付旨
被仰渡、

寅四月

一一四八

落穂集

一昔ハ御家老三人・五人、御番頭十八人、御用人十五人、

御南戸奉行・納戸役人御南戸奉行ノ字御納戸奉行ト被改、

(戸カ)納殿役人ノ字納殿役人改ル、十三人ニテ候処、寛陽院

様御代ニ御家老五十人、御番頭二十二人、御用人十八

人、吟味役十五人、御納戸奉行十四人ノ御賦ニ罷成候、

物頭ノ儀ハ十一人御賦ニテ平騎馬同前ニ江戸着脇御取

次番被仰付、其後御刀番被仰付候節ヨリ十二人賦ニ被

仰付、御取次番ハ御免被成候、昔ハ重ミト申候テ、十

人賦ノ役人ハ十一人賦、六人賦ノ役人ハ七人賦被下候、

乍然納殿役ニハ重ミ無之候、十人賦ノ人ニ被仰付候テ

モ則六人賦ニ被成候、是ハ奥勤ニテ左マテノ公界モ無

之、右之由候、物頭十四人賦ニテ御納戸奉行同格ニ被

成候時節覺不申候、

一前方ハ初旅ヨリ小番ノ面々ハ十人賦ニテ為被遣様ニ承
候、弥其通ニテ候哉、答曰、太玄院様御代マテハ
其通ニ有之、予從弟伊集院弥七杯モ祖父主水京都御留
守居相務居、弥七親多宮早世已後、部屋栖ニテ初旅ヨ
リ十人賦ニテ罷登候、其外伊集院善太夫殿・桂ハ右衛
門殿杯モ初旅ヨリ十人賦ニ被仰付候、其外ニモ段々有
之候、乍然町田七郎左衛門殿・松崎藏右衛門殿杯ハ初
十六人賦ニテ候、然ハ小番ノ内ニテモ御太刀進上以上
トモ右通被仰付候哉、右之外、頭ヨリ十人賦ニテ参候
人ハ過分ニ有之候、 末略、

一前方ハ、江戸詰ノ面々十人賦ノ人ハ、御供立ノ道中馬
立ニテ無之衆、若党三人・鍮持・草り取以上主從六人
ニテ、具足箱・挟箱・合羽箱持三人ツ、通人足ニテ持
遣、於江戸ハ中間二人召抱、上下八人ツ、ニテ相勤候
儀通例ニテ、夫ヨリ上減候事無之、新御番ハ若党二人・
鍮持・草り取現五人ニテ、挟箱持・合羽箱持二人ツ、
通人足ニテ被罷通、依人ハ具足箱持七候人モ有之候、

御步行衆モ不殘草履取召列被罷通候、駕籠ニ乗候人ハ
馬立ノ騎ヲ始一人モ無之、皆々通馬被下乗掛ニテ候故、
半弓杯ヲ指、カサリハ結構有之候、其外新御番・御小
姓衆・御步行衆マテ不殘乗掛ニテ被罷通、步行杯ニテ
通人一人モ無之、加籠ニテ通候面々ハ、御小納戸以上
又ハ御行列乗ノ衆、御右筆・御医師、皆々加籠ノ者被
下、乗組ニテ候、

但、御医師ノ内、於江戸山口友與十一人賦、田村寿
孝九人賦被下候、右駕籠ノ者不被下候故、右兩人ハ
自分雇ニテ通カゴノ者四人宛召抱被罷通候、医師ハ
右式ノ御賦ニテモ江戸長屋之宿札ハ五人賦ノ場ニテ
三人賦同札ニテ候訳ハ、十一人ハ六人六尺、九人賦
ハ四人六尺ノ賦ニテ、江戸モ定カゴノ筋故、道中駕
籠ノ者不被下、本賦ハ五人賦ノ姿ニテ候、 淨國院
様御隠居前ニ山田玄哲・大迫伯榮六人賦ニ被仰付、
宿札新御番ノ格被仰付候、其以後ハ御側医師衆六人
賦ニ被仰付候ヘトモ新御番ノ格ニ罷成候、且又、十
一人・九人ト申御賦被下御医師ハ其後ハ無之候、

一表方御馬廻ハ持高五百石以上ニ候、一人宛重賦被下、

十一人賦ニテ候、松崎藏右衛門殿・中村早大殿杯十一

人賦ニテ詰中現十一人ツ、ニテ被相詰候、相良権太夫

殿ハ、後ハ御勘定奉行ト被仰付候ヘトモ、若キ時分ハ

千五百石ノ高故、十三人賦ニテ御馬廻為被相勤由候、

但、六人賦ニテモ五百石以上ハ一人重有之、五代助

太夫殿御目付ノ節、予ト一詰江戸ヘ勤候節、七人賦

被下候、其已後於江戸右ノ御番ノ節、十人御賦ニ被

仰付、寄物頭被仰付候ヘトモ、為何訳ニテ候哉、重

御賦無之、寄物頭被務申候、

一往昔ハ十人賦ノ人ハ三百石以上ニテ無之候ヘハ不罷成、

於江戸ハ年頭持参太刀ノ御礼為被仰付由、名ハ致失念

候、登候節マテハ三百石以上ニテ十人賦ニテ被参候処

ニ、留主ニ高被相払、三百石以下ニ被罷成、則六人賦

ニ被仰付候、然トモ年頭ノ持参太刀ハ被仰付、至テ悦

ニテ有之候由、亡父詰合存罷在由申聞、能覚罷在候ヘ

トモ、手前老衰ノ故、名ヲ失念候ヘトモ、不及是非候、

一納戸役人・物奉行十人賦ノ故、役重ニテ十一人賦被下

候ハ、御右筆六人賦ニテ役重七人賦被下候、

一大身家ノ御賦方不定ニ有之候、太玄院様御舍弟ノ兵

庫様ハ百五人、役ハ百十人ノ御賦ニテ候、淨国院様

御舍弟ノ玄蕃様ハ百人又ハ百五人ノ御賦ニテ候、左衛

門殿・筑後殿ハ八十人、万石以上ハ六十人御賦ノ故、

種子嶋家ハ御家老ニテモ六十人賦被下候、大御目付ト

御子様ノ御番頭ハ二十五人賦、若御年寄三十人賦ニテ

候処ニ、近キ頃ヨリ若御年寄三十五人、大御目付三十

人賦ニ相重^①申候、

御国行人数賦

一一四九

一主従三十二人・乗馬一匹

高一万石以上、遠方、

一同二十二入・乗馬一匹

右同、近所、

一同三十二人・乗馬一匹

万石以上、御城代・御家老、遠方、

一同二十二二人・乗馬一匹

右同、近所、

一同二十二二人・乗馬一匹

御家老、遠方、

一同十八人・乗馬一匹

右同、近所、

一同二十一人・乗馬一匹

若御年寄、遠方、

一同十三人・乗馬一匹

右同、近所、

一同十八人・乗馬一匹

大御目付、遠方、

一同十一人・乗馬一匹

右同、近所、

一同十五人・乗馬一匹

寺社奉行・御勘定奉行、遠方、

一同十人・乗馬一匹

右同、近所、

一同十八人・乗馬一匹

独礼御番頭、遠方、

一同十一人・乗馬一匹

右同、近所、

一同十四人・乗馬一匹

与頭・御番頭、遠方、

一同八人・乗馬一匹

右同、近所、

一同十二人・乗馬一匹

寄合、遠方、

一同八人・乗馬一匹

右同、近所、

一御一門・御城代・御家老・若^①年寄・大御目付・与頭

右面々ノ嫡子、与頭・御番頭ノ格式ニテ行ノ節ハ、与

頭・番頭ノ人数賦可相渡事、

但、寄合之人右同断、

一 右面々之嫡子并寄合ノ人、御馬追ニ付差越候節ハ、与頭・番頭、遠方行ノ人数ヨリ一人可相減事、

但、無役ノ寄合ノ儀モ遠方十二人、近方八人賦ニ、享保十九年寅七月晦日被仰渡、

一 島津左衛門・島津大学・島津筑後

右面々部屋栖御国行御賦定、不依高多少、

一 遠方ハ、二十一人・乗馬一匹、

一 近所ハ、十三人・乗馬一匹、

右面々御国行之御賦定無之ニ付テ此節右之通相定候、

福山御馬追ニ差越候節ハ、近方ノ儀ニハ候ヘトモ、遠

方ノ御賦可申渡候、先年島津石見福山御馬追ニ差越候

節ハ二十八人ノ御賦申渡候ヘトモ、向後ハ今度相定候

通可申渡候、

一一五〇

元文元年辰八月二十六日御証文

一 主従十人・乗馬一匹

御側御用人・御用人、遠方、

一同八人・乗馬一匹

右同、近所、

一同九人・乗馬一匹

町奉行、遠方、

一同七人・乗馬一匹

右同、近所、

一同八人・乗馬一匹

御近習役、遠方、

一同七人・乗馬一匹

右同、近所、

一同七人・乗馬一匹

御納戸奉行・物頭・無役之地頭、遠方、

一同六人・乗馬一匹

右同、近所、

一 御近習役並之御役へ地頭職被下候人モ右同前勉之節、

遠方主従七人・乗馬一匹、是又近所ハ主従六人・乗馬

一匹御賦方可被下候事、

一 主従六人

御船奉行・御使番、遠方、

但、御船奉行久見崎行同断、

一主従五人

右同、近所、

一同五人

御近習役並・御普請奉行・御記録奉行・物奉行・長崎

御付人・高奉行・御厩御馬方、

一江戸ヲ主従十一人ニテ相勉候奉行ニテモ遠方⑧陸共五人、

一主従五人

納戸役人、遠近共、

一同六人

諸⑧新地頭代、

但、江戸へ⑧御馬廻ニテ相勉候者ハ此通、新御番之者

ハ可為五人賦、

一同四人

御小納戸役・御小納戸並・御目付・中通御目付・御右

筆・納殿・山奉行・郡奉行・金山奉行・御細工奉行・

御祈念方・屋久嶋奉行・宗門改方・御記録⑧方添役・磯

奉行・尾畔奉行・御茶道頭・梶山在番・唐船方受込・

寺社方取次・御勘定方小頭・御勘定方吟味役・代官・

御台所頭・御春屋役・御医師・御書院役人・御包丁人

頭、

但、右御役ノ内ニテモ十人御賦ニテ致江戸詰候人ハ、

御国行遠方共主従五人、日州外行主従七人ノ御賦可

被下候、納殿ノ儀モ内外共可為四人賦候事、

一主従三人

御側御小姓・御側御同朋・表御小姓、

但書右同断、

一同三人

諸所津口番、

一同三人

御步行、

一同三人

御同朋、

一同三人

御書院御茶道、

一同三人

表坊主、

一一五二

日州番所外四ヶ所行

一主従三十五人・乗馬一匹

一万石以上、

一同三十五人・乗馬一匹

御城代御家老、

一同三十一人・乗馬一匹

御家老、

一同二十四人・乗馬一匹

若御年寄、

一同二十一人・乗馬一匹

大御目附、

一同十八人・乗馬一匹

寺社奉行・御勘定奉行、

一同二十一人・乗馬一匹

独礼之御番頭、

一同十七人・乗馬一匹

組頭・御番頭、

一同十五人・乗馬一匹

寄合、

一御一門・御城代・御家老・若御年寄・大御目附・御番

頭・与頭、

右之面々ノ嫡子、御番頭・与頭ノ格式ニテ行ノ節ハ、

与頭・番頭人数賦可相渡事、

但、寄合ノ人同断、

一主従十三人・乗馬一匹

御側御用人・御用人、

一同十二人・乗馬一匹

町奉行、

一同十一人・乗馬一匹

御近習役、

一同九人・乗馬一匹

御納戸奉行・物頭・無役ノ地頭、

一 御近習役並ノ御役々地頭職被下候人モ右同前勤ノ節ハ
九人ノ御賦・乗馬一匹可被下候、

一 主従八人

御船奉行、

一同七人

御使番・御近習役並・御普請奉行・御記録奉行・長崎

御付人・高奉行・物奉行・御厩屋方、

一同七人

納戸役人、

一同六人

小番、

但、三百石以下ニテモ十人賦ニテ相勤候人、

一 御馬廻ニテ致江戸詰候小番、御当地ニテ御番マテヲ相

勤候人、日州御番所外行之節十人賦、無役ノ小番ハ六

人賦可相渡旨、鎌田六郎太夫御取次ヲ以被仰渡、

一 主従四人 内外トモ

御小納戸役・御小納戸役並・中通御目附・御目附・御

右筆・納殿・山奉行・郡奉行・御細工奉行・御祈念方、

屋久嶋奉行・宗門改方・磯奉行・尾畔奉行・御茶道頭・

金山奉行・唐船方受込・寺社方取次・御勘定方小頭・

同吟味役・御医師・御包丁人頭・御書院役人・代官・

御台所頭・御春屋役、

但、右御役ノ内十人賦ニテ江戸詰イタシ候節ハ、御

国行遠近トモ主従五人御賦、且又、日州御番所外行

主従七人御賦可被下候、納殿ノ儀ハ内外トモニ四人

賦ノ事、

一 主従三人 内外トモ

御側御小姓・御側御同朋・表御小姓、

但書同断、

一同三人

津口番、

一同三人

御步行、

一同三人

御同朋、

一同三人

御書院御茶道、

一同三人

表坊主、

一一五二

寺社家御国行

一上下十四人 外ニカゴ昇三人

南泉院

一上下二十二人 外ニカゴ昇六人

但、御儉約ニ付四人被相減候、

福昌寺

一上下十二人 外ニ駕籠昇三人

大乘院・浄光明寺・一乘院・弥勒院・大龍寺

一上下十老人 外ニ駕籠昇三人

蓮光院

右、出世着座ノ節ハ大乘院以下五ヶ寺同前、着座無之

内如此、

一上下十人 外ニ駕籠昇三人

大慈寺

右、紫衣ノ僧住職ノ節ハ着座被仰付事候故、大乘院以下五ヶ寺同前、紫衣ニテ無之僧住職ノ節ハ如此、

一上下七人 外ニ駕籠昇三人

不断光院・正建寺・神徳院・山内寺・廣濟寺・寶満寺・

感應寺・正興寺・幸善寺・般若院

一上下六人 外ニ駕籠昇三人

本永寺・遠寿寺・願成寺・正国寺

一上下五人 外ニ駕籠昇三人

右、虎之間ニテ住職被仰付候寺院、

一上下四人

右、御当地并諸郷 御目見地ノ諸寺院、出世之僧住職

ノ節ハ如此、且又一所一ヶ寺ニテモ出世ノ僧ハ同断、

一上下三人

右、諸郷一所一ヶ寺ノ僧如此、

一上下七人 外ニ駕籠昇三人

右、諏訪社大宮司職本田左、

一上下六人 外ニ駕籠昇三人

右、福ヶ迫諏方神主井上大和守・花尾^{⑧山}神主井上駿河守、

一上下三人 極官社人

一上下二人 上官社人

一同一身半 中官社人

一同一身 無官社人

右四行、鹿兒嶋士・郷^{⑨土}・社人無差別右之通被成下候、

一一五三(の1)

一文化元年子八月、横目吉井藤兵衛・大山源之進兩人

公義流人才領ニテ屋久嶋并種子嶋へ被差越候ニ付、兩人ヨリ申出左之通、

一上略、警固役ノ儀ニモ御座候間、現三人可差越段

御届申上置、兩人召列差越申候、中略、御扶持米

差引被仰付候様ニ被仰上可被下儀奉憑候、以上、

子十月十日

大山源之進

吉井藤兵衛

(一一五三の2)

此表、一日一人ニ付銀六分五リ・米五合ツ、被成下候条、差引如例可被申渡旨御差図ニテ候、以上、

子十二月十日

相良此右衛門 印

御勘定奉行衆

御船奉行

高奉行

(一一五三の3)

一右同断ニ付、御兵具方足輕十人、右兩人へ相付、下才

領トシテ被差越、諸所御藏々ヨリ銀米取入差引願上、^{⑩出}

右兩人次書申出候処、此表、一日一人ニ銀一匁ツ、被

下候賦ヲ以差引被仰付候条、如例可被申渡旨御差図ニ

テ候、已上、

子十二月十日

相良此右衛門 印

御勘定奉行衆

御船奉行

高奉行

物奉行

屋久嶋奉行

島津家歴代制度卷之二拾

苦勞米

諸島賦附島人

江戸中急

式日御使

道中駕籠

輕尻

(本文より補)
人馬御賦

上乘賦

御船手物定

苦勞米

一五四

一真米一升三合

上一人、一日分、

一同六合

下一人、一日分、

右之通、応人数賦可出事、

一乘馬一疋一日大豆一升、

一御馬追之節、頭取之奉行御国賦可出事、

但、吉野御馬追ニハ御扶持米出間敷候、

一御馬追ニテ御目付罷上候節、江戸十人賦ニテ相勤候者

ハ五人御賦方可相渡候、左様無之者ハ可為四人賦事、

一小番相勤候者トモ御馬追串目下知相勤候節ハ、上下七

人之賦可出事、

一諸所御馬追為串目下知、御用人已下地頭職被仰付置候

人之嫡子名代差越候、右面々御国行御賦方ニ準シ主従

十人ヨリ七人之御賦並乘馬一疋可出事、

一谷山・春山両所ニテ隔年御関狩被仰付候付而者、御名

代ヲ勤、御役人小役人段々差越事候へ共、人役之狩立

衆御扶持米送人馬不被下候事、

一山奉行二人・山見廻二人・山奉行所筆者二人ハ御関狩
前以差越、御関狩相濟候而モ首尾方ニ付而令滞在事候、
然共御関狩正日ハ是又人役勤候故、御扶持米之不及沙
汰、正日之外其前後相勤候日數之分者御扶持米可被下
候事、

但、主從三人ヨリ五人賦迄者野菜・薪可出候事、
但、三人ニ而モ諸所同御番其外諸所番所等之儀ハ野
菜・薪出間敷候事、

一同六人賦以上ハ野菜・薪出間敷候事、
右人数賦之多少、諸外城役人存間敷候間、高奉行所・
郡方・代官方ヨリ出候免手形等ニ人数賦幾人ト書記可
出候事、

但、右之諸奉公人往来通路迄ニテ、一宿之節ハ野菜・
薪出間敷候事、

一荒田村・郡元村・中村・田上村・武村・西田村・原良
村・草牟田村・小野村・下伊敷村・永吉村・坂元村
右、鹿兒嶋廿四ヶ村之内右十二ヶ所者可為近名、右近

名諸御奉公人差越候節、御扶持米被下間敷候事、

一大迫村・上伊敷村・比志嶋村・花棚村・皆房村・岡之
原村・下田村・吉野村・川上村・花野村・西別府村・
小山田村

右、鹿兒嶋廿四ヶ名之内十二ヶ名者可為遠名、右遠名
十二ヶ名諸役人行之節者主從御扶持米可相渡候事、

但、雖為近名、殿様被遊 御光儀 御滞在之砌ハ、
御供其外無拠儀ニ付差越滞在候ハ、御勝手方証文
ヲ以遠近同前主從御扶持米可被下候事、

一役料米並定御扶持米被下候諸役人・筆者、鹿兒嶋名之
内遠名へ差越滞在候ハ、定御扶持差引、主從御扶持
可出候、尤、外城へ差越候砌者定御扶持米差引、主從
三人御扶持米可出候、差引候定御扶持極月限員數相窮、
互引合、模合方ヨリ御物方へ堅固ニ可致返納候事、
一役料米不被下、定御扶持ハカリ被下候人、外城並鹿兒
嶋名へ差越滞在候ハ、遠近無構定御扶持差引、主從
三人御扶持米可出事、

一諸所へ為地頭代十人賦之小番差越候砌、不依高之多少

可為主從五人、

一 奥並内又者、^①人数之儀ハ、都而夫々之、^②賦人数之半分

タルヘキ事、

寛政七卯二月

一 諸郷勤方ニ付被差越候人罷帰候届、其当日八ツヨリ内
有之候者ヘハ其日之御扶持米ハ被下間敷旨被仰渡、

一 外城噯取納窮検者ニ相付御奉公相勤候砌者、上一人一日ニ真米七合五勺、下者赤米六合ツ、泊之時者主從

御扶持米、日戻リ之時ハ上一身扶持米、高奉行方ヨリ

諸島賦定

可出之、郡見廻御扶持米之儀ハ始終百姓中ヨリ可出之

事、

一一五五

一 諸所ヘ行候人、十里ヨリ内ハ近所、此外ハ遠方ニ相窮、

一 七嶋番人六人、主從三人賦、

右考ヲ以、苦勞米可出候事、

一 口之永良部嶋番人二人、主從三人賦、

一 諸所出物蔵定番拵取夫婦真赤米可為半分事、

一 硫黄嶋番人硫黄取検者迄一人、主從三人賦、

一 銀一匁

一 本琉球在番奉行一人、

伏見ヨリ大坂迄下リ川船賃一人分、士ハ模合方、一身

但、御役ニ無構、高不依多少、主從十五人賦、

者帖佐与方、左候而、御物ヨリ御借船ニテ相渡候人ハ

一 右同附役四人、

出間敷事、

内、二人主從五人賦、二人主從四人賦、筆者並与力、

一 阿久根衆中河南權左衛門、屋久嶋ヘ唐通事ニテ被遣候

一新銀拾匁並御扶持米尅斗五升、

御賦之儀、道之嶋ヘ御検地門割ニ筆^①、^②役差越候節、主

但、本琉球御賦三十日尅人分、

從二人賦被下候、午九月十五日御証文ニテ被仰渡候事、

一 船中三ヶ月御扶持米・御賦銀、先キ月廿ヶ月分御当地

ニテ相渡筈也、

一本琉球冠船着船之砌、足輕差越候砌ハ、一身半之御賦御扶持米可出事、

但、半人者水夫代也、

一道之嶋へ御用ニ付足輕差遣候ハ、可為⑨故賦事、

一新銀四匁五分並御扶持米壹斗五升、

但、七嶋御賦三十日一人分、

一同二匁六分並右同壹斗五升、

但、硫黃・竹嶋御賦卅日一人分、

一同三匁五分並右同壹斗五升、

但、屋久嶋・黒嶋・種子嶋御賦三十日一人分、

一一五六

鬼界嶋御帳留之内

覚

一琉球並諸島ニテ相果候人、御扶持米・故実銀差引方之

儀、此跡之先例不相知候付、此節被仰渡候者、於琉球

諸島相果候人、五人賦以上ハ上一人之御賦御扶持米無

差引払切ニ申付、残り人数賦者現人計御当地へ参着迄

之差引申付⑨候、且又、四人賦以下之人者上一人無差引

払切ニ申付、残り人数賦之分ハ現人不及沙汰、御当地

へ参着迄之差引ニ申付候条、家来下人迄相上候節ハ夫々

之座へ送状相付、一番船ヨリ乗船可申付候、若自分之

支ニテ一番船へ乗船難成候ハ、其節ヨリ重而跡船ニ

致乗船候迄者御賦御扶持米不申付候条、右之趣ヲ以、

琉球諸島へ高奉行・物奉行ヨリ申越置、差引方可申渡

旨、卯二月廿八日鎌田太郎兵衛殿御取次御証文ヲ以被

仰渡候間、此段申遣置候、以上、

卯二月廿八日 物奉行連名

(享保二十年カ)

喜界嶋代官

木脇六左衛門殿

一一五七(の1)

鬼界嶋物定帳之内

一御切米二百二拾五俵先、無出米、代官一人分、

但、一俵二斗入之積、

一御切米百俵先、無出来、附役一人分、

但、右同、

右者、代官並附役人一人ニ付、如右①飯米之内ヨリ被

下之候間、下島之四月朔日ヨリ翌々年之三月迄一詰中

之御切米如此①、代り代官二三月之間ニ下島候共、四

月朔日之可為代合候、且又不意之任合有之、右定之代

合無之候ハ、日数之割ヲ以可申受候事、

附、御切米渡①ハ下島時分前代官ヨリ半分可受取、

半分ハ翌年夏中ニ可申受事、

一大麦拾①斛先、与人一人分、

右年中ニ為御扶持可被下之事、

一大麦二石①斗七升ツ、先、筆子①、卷人分、

右、鬼界嶋中筆子①一人ニ付年中ニ為御扶持米被下之

事、

一御扶持米五合、横目卷人一日分、

但、宗門改・用夫改・牛馬改其外横目不罷出候而不

叶儀、代官以下知、相勤候日数御扶持米可申付事、

一御扶持米壹升三合、与人一日分、

一同壹升五合、供夫卷人壹日分、

但、日用賃飯米、

右、与人上国之節、主従一人罷登候、詰往来御扶持百

姓出来ヲ以可申付事、以上、

(一一五七の二)

右同

一銀五匁、人数賦之内一人分、

右ハ、喜界嶋在島中並往来応日数、代官・附役人一ヶ

月一人分之賦也、於鹿兒嶋相渡事、

一米五合ツ、先、人数賦之内一人、

右同断、一日一人分御扶持米、鹿兒嶋又ハ鬼界嶋ニテ

可相渡事、

(一一五七の三)

右同張紙

一米壹升九合

但、壹日分、与人、

一同壹升六合

但、右同、横目、

一同老升

但、与人・横目外ニ不差越候而不叶者有之候節給分、
右ハ、道之嶋へ唐船漂着、琉球へ送越候節之被下方、

此節ヨリ右之通被定置候条、御規模帳張紙ニテ記置、

諸事如例可申渡旨、享保十九年寅三月十三日谷山角太

夫殿御取次ニテ川上平右衛門・木脇六右衛門へ被仰渡

候間、仰渡之御書付ヲ以致張紙置候事、

(一一五七の4)

張紙
一 琉米老升九合 与人老升日分

一同老升三合五勺 横目其外役々老升日一人分

一同七合五勺 船頭水主一日一人分

右者、道之嶋へ唐船漂着、本琉球へ差送候付、宰領之

面々往来応日数飯米被下事候処ニ、於島々飯米渡方不

相並モ有之候ニ付、此節右之通被相窮候間、御規模帳

ニ致張紙置、向後右之通可被相渡候、此段可申越旨御

差図ニテ候、以上、

(寛延三年カ)

午十二月廿一日

肥後平左衛門

喜界嶋詰横目

岩下與兵衛殿

伊地知七左衛門殿

一一五八

右同物定帳

一 与人一人一日分、米五合

右者、与人算用方ニ付代官居所へ罷越候時分、応日数
百姓共ヨリ与人方へ御扶持米トシテ可相渡事、

一一五九

御船手御規模帳朱書

一 上下十五人賦

内、二人中間賦引、残而十三人賦被下候、

右者、琉球在番奉行御賦、御役之不依高下、向後右之

通被相定候間、御規模帳被載置、可承座々へモ可申渡置

旨、表方ヨリ被相達候条、御規模帳ニモ張紙ヲ以記置候

様、諸事如例可被申渡也、

未正月十一日

御勝手方印

取次
木脇賀左衛門

御勘定奉行

御船奉行

高奉行

物奉行

江戸御国早御使・中急御使日数定

一一六〇

一早追、細嶋筋

但、東目筋者御使不被差遣旨、丑正月申渡置候付而
者、東目筋之定者無用ニ候へ共、後年為見合記置候、

一鹿兒嶋ヨリ細嶋之間、日数二日半

一船中日数八日

一東海道日数六日

合日数十六日半、

一中急、細嶋筋

一鹿兒嶋ヨリ細嶋之間、日数三日半

一舟中十二日

一東海道日数八日

合日数廿三日半、

一早追、小倉筋

一鹿兒嶋ヨリ小倉之間、日数五日

一船中六日

一東海道六日

合日数十七日、

但、東海道日数六日ニ相定リ候へ共、御賦ハ先規之
通日数七日分可相渡候、

一中急、小倉筋

一鹿兒嶋ヨリ小倉迄、日数七日

一船中七日

但、七日半ニ被窮置候へ共、半日減、

一東海道八日

合日数廿二日、

但、廿二日半ニ被定置候へ共、此節ヨリ船中日数^④之減右之通相定候、

一 早追、三道中

一 鹿兒嶋ヨリ小倉迄、四日半

但、五日ニテ候へ共、半日相減、

一 中国路七日半

但、八日ニテ候へトモ、半日減、

一 東海道六日

合日数十八日、

但、日数十九日ニ被定置候へ共、此節ヨリ小倉・中国路之内ヨリ半日ツ、被相減、右之通被相定^④候、

右者、御賦之内応日数为被定置儀有之候へトモ、御賦

者此内之通被下置候旨、丑三月廿八日島津右平太殿取

次御証文ヲ以被仰渡候、

一一六一

一 御勘定奉行 高奉行へ

一 江戸御使中途滞ニ付而ハ、証拠等不被相立御定日数相

過、御賦銀取込上納之訴訟モ一切不被取揚候旨被仰渡置候へトモ、向後、為差知故障又者慥成証拠ヲ以訴出候者、吟味之上御賦銀差引被仰付モ可有之候、右外滞ニ付訴者差引被仰付間敷候、御賦銀取込返上急ニ難相調、年府等之願申出^④候者、時々吟味之上何分ニモ可被仰付候、

右之通、御勝手方へ相達、御用人中ニモ可承置、

寅十月廿八日

(樺山久初)
主計
取次
北郷助太夫

延享三年寅十月廿八日

一一六二

一 江戸・京・大坂へ急・中急之御使飛脚、道中川支又者

人馬之支有之、滞証文取来候共、証文不相立筋ニ被定

置、右ニ付而者御銀其外御用物才領申渡被遣候節者、

右ニ準シ中途之支証文不被相立筈之儀候へトモ、幸領

ニテ急・中急ニ被遣候節者馬数多候付、依所人馬差支、

且又、雨天之節川水可相増ト存候節モ存之儘ニ難急、

其上重荷之儀候へ者荷物付直シニ付而モ馬数多所ヨリ相滞、何様ニ相働候而モ御使飛脚之様ニ者難通、訳モ相替候付、其御取分ヲ以、此節左之通相定候、

一 荷物付用之馬並宰領人乗下取合馬数四疋迄者滞証文不被相立候、馬数五疋以上、急・中急ニテ被遣候砌、三道中之内ニテ川支又者人馬之支ニ付相滞、御定日数ヨリ遅罷通、無紛証文取来候ハ、証文滞迄ヲ御賦銀割ヲ以不及返上、証文外之滞者被定置候通返上可申渡候、
一 御定日数ヨリ早ク罷通候ハ、御使同前ニ御賦銀割ヲ以増銀可被下候、尤、下才領・足輕へモ右ニ準可申付候、其外有来通申付置候、

右之通、得其意、座々御規模帳紙(兼脱カ)ニテ記置、諸事如例可申渡候、

但、京・大坂御留守居へハ高奉行ヨリ写ヲ以可申越候、

元文二巳六月五日

御勝手方印

一一六三

(行間朱書)
一 遅速之被下方上納共、当時中急料之割ヲ以差引イタシ候事、

一 京・大坂ヨリ江戸・御国元へ往反之御使飛脚、且又御供立之時分御中途ヨリ之御使飛脚者、被差立候場所ヨリ江戸・御国元へ参着之刻割ヲ以相糺、定之日数ヨリ遅参之者ハ「(朱書)朱書之通」拾奴ツ、返上銀三道中道程ニ割付、被差立候場所ヨリ到着之所迄、応道程候銀高ヲ滞①之日数之分返上可申付候、

一 右御中途ヨリ之御使飛脚日数窮様之儀ハ、小倉路・中国筋・東海道夫々ニ定置候日数ニ道程ヲワリ、一日ニ道程何十里ト当リ候里数ヲ一日之積ニイタシ置、其積ヲ以、被差立候場所ヨリ到着之所迄、道程之割日数幾日①とニ相窮、遅速之可致沙汰候、

但、右体之御使飛脚ハ雖為中急無其差別、返上銀者三道中道程之割ニ定置候、

(朱書)
「①當時用之、」

一刻割算用之事、

一被差立候刻限・到着之刻限ヲ凡日数幾日ト相窮、時ヲ

掛候而何十何時ト相窮、道程ヲ以割、一里ニ付時何時

何合ト相窮、三道中ニ懸レハ、江戸ヨリ御国元迄幾日

目ニ参着之積ト相知候ニ付、定日数ヲ以、差引遲速之

致沙汰候事、

一御褒美銀並中急返上銀被下方上納方ハ、三道中道ノリ

三百五十四里半ヲ以銀ヲワリ、一里ニ付何程ト相窮、

被差立候場所ヨリ到着之所迄、道ノリニ掛候事、

一一六四

一御褒美定

一錢五貫文 日数十三日

一同四貫文 日数十四日

一同三貫文 日数十五日

一同貳貫文 日数十六日

一同一貫文 日数十七日

右者、三道中急飛脚御定日数ヨリ致早着候ハ、向後

依日数右之通御褒美可被下候、自然日数十三日ヨリ内

ニ致着候ハ、吟味之上御褒美可被下候、

丑十二月

一一六五

一御褒美日限小割、十二日七時ヨリ十三日六時迄者着候

者ハ十三日之御褒美申付、十三日七時ヨリ十四日六時

迄ニ到着候ハ、十四日之御褒美可被下候条、已後往反

之御使飛脚参着之程遲速右之格ヲ以可致沙汰候、江戸

往返早御使並早飛脚御定日数ヨリ内日^付ヲ限被差通候節

御賦銀之外増銀被下候事、

(行間朱書)「當時不用之、御褒美銀者一身者迄ニ限被下候、急・中

急御使ハ、イツレモ急・中急之御賦割ヲ以、遲速ニシ

タカヒ被下方上納方差引候事、」

一銀四拾五匁

小倉・中国・東海道、日数十五日・十六日・十七日極

急キ御使増銀、

右、上下二人賦ヨリ五人賦迄之人、右日数御使ニ者御

賦之重右員数可相渡、京・大坂御用滯者御留守居証文

ヲ以可有差引、其外中途何様之滯有之、証文取来候共、
十八日ニ参着候ハ、返上銀拾五匁、十九日ニ着之者ハ
重ミ分惣様返上可申渡候、

但、上下六人賦ヨリ以上之人へ右式之御使差上候節
ハ、時宜次第重賦可申付候、

〔朱書〕
「當時用ユ、」

一銀四拾五匁

文銀ニシテ六拾七匁五分、三道中三百五十四里半之ワ
リ、一里ニ付文銀一分九厘ヒ四、早飛脚一人、

右、別而御急用ニテ日限ニモ不及、小倉・中国海(東海道カ)道極々

急キ、片時モ早々罷通候様被仰付候節者、御賦之重右
之通可被下候、京・大坂御用滯其外中途之滯者可為右

同断、日数十四日過候而令到着候ハ、十五日・十六
日迄ハ銀八匁三分、十七日・十八日迄ハ銀廿二匁五分、

十九日重候分惣様返上可申渡候、

但、京・大坂ヨリ右同断之早飛脚被仰付候節ハ、右

三道中道程日数之並ヲ以差引可申付候事、

〔朱書〕
「當時極急之飛脚不被遣候事、」

一右式極急・極々急之儀ハ、別而肝要之御用之節社被仰

付事ニ候へハ、別而之御奉公候条、飛脚出精可罷通儀

ニ候へハ、右定置候通返上ニ罷成候様ニ候ハ遅参無之筈

候へトモ、万一自分働ニモ不能故障有之事モ可有之哉、

夫ユへ返銀右之通被相定置候、乍然至極無抛訛不相立

於遅参者、返上銀之上、屹ト御沙汰可被仰付候事、

一右式御賦之重被相渡事候間、用心銀曾而相渡間敷候事、

一日限又者極々急ニテ重御賦何程ニテ被差越候段ハ、江

戸・京・大坂・御当地ヨリ時付同前書付可相渡候条、

重ミ分返上有無之沙汰可有之候事、

一江戸ヨリ大坂迄道程百三十三里半

一早追日数六日、時ニシテ七十二時、一里ニ付時数五

合三勺九才三二五、時数一時ニ付道程一里八合五勺

四才一六、

一中急日数八日、時ニシテ九十六時、一里ニ付時数七

合一勺九才一、時数一時ニ付道法一里三合九勺〇六

二五、

一大坂ヨリ下之関迄道程百二十九里半

一早追日数七日、時ニシテ九十時、一里ニ付時数六合

九勺四才九八、時数一時ニ付道法一里四合三勺八才

八々、

一中急日数十日(時腕カ)ニシテ百二十時、一里ニ付時数九合二

勺六才六四、時数一時ニ付道程一里七勺九才一六、

一小倉ヨリ鹿兒嶋迄道程九十一里半

一早追日数四日半、時ニシテ五十四時、道程一里ニ付

時数五合九勺〇一六、時数一時ニ付道法一里六合九

勺四才、

一中急日数七日、時ニシテ八十四時、道程一里ニ付時

数九合一勺八才、時数一時ニ付道程一里八勺九才二、

一三道中道程三百五十四里半

一日数十七日、時ニシテ二百四時、一里ニ付時数五合

七勺五才四五、

一日数二十二日、時ニシテ二百六十四時、一里ニ付時

数七合四勺四才七一、

一一六六

正徳二年辰

一江戸・上方其外、他所へ御用ニ付而被差越候御使飛脚

往来之節、御領内ニテ人馬滯又者何ソニ付滯有之候ハ、

其訳所役人ヨリ証文取可差出之候、尤、江戸へ被差越

候人者江戸着之節右証文差出、京・大坂へ被差越候節

ハ兩御留守居へ可差出旨被仰渡、

正徳二年辰十一月

一一六七

一御急用ニ付、江戸並御国元ヨリ日限ニモ不及、東海道・

船中・小倉路極々急、片時モ早々罷通候様被仰付候飛

脚定、

一日数十三日六時

内、五日二時東海道、四日九時半船中、三日六時半

小倉ヨリ鹿兒嶋迄、

右之通被仰渡、

享保三戌四月

一六八

享保十八年丑十二月

一中急御使飛脚日数定

一鹿兒島ヨリ小倉迄、日数七日

一船中、日数七日

但、日数七日半ニ被定置候へトモ、半日被相減候、

一東海道日数(以下次)

合日数廿二日、

但、日数廿二日半ニ被定置候へトモ、此節ヨリ船

中日数被相減、右之通被相定候、

一三道中、急御使飛脚日数定

一鹿兒島ヨリ小倉迄、日数四日半

但、日数五日被定置候へトモ、半日被相減候、

一中国路日数七日半

但、日数八日被定置候へトモ、半日被相減候、

一東海道日数六日

合日数十八日、

但、日数十九日ニ被定置候へトモ、此節ヨリ小倉・

中国路日数之内半日ツ、被相減、右之通被相定候、

右者、急・中急御使飛脚之日数定、此節ヨリ右之通被

相替候、道中・船中御賦方之内、応日数为被定置モ有

之候へトモ、御使飛脚御賦方者此内之通被下置候間、

此旨致承知候①、与中・支配中エ可被致通達旨被仰渡、

丑十二月三日

一六九

一五人賦以上之人エ御使被仰付候節、御定日数相過候ハ、

御賦銀之内割ヲ以上納可被仰付候、尤、御定ヨリ早ク

致着候而モ被下切ニ不及、御言葉之御褒美可被仰付候、

且又、五人賦以上之人エ依託而ハ与力并足輕②トモ被召

附事ニ候、右与力・足輕ニモ右同前御褒美不及、遅ク

致着候節ハ割ヲ以御賦銀上納可被仰付候、

一御側廻之人急御使被仰付、御定日数ヨリ早ク致着節者、

御言葉之御褒美モ有之事候間、表立而之御褒美被下候

ニ不及候条、御側廻之人御使ニ到着之節者、其訳承届

可申出候、尤、遅致着候ハ、御賦銀差引上納可被仰付

候、

右之通、此節ヨリ被相改候旨、本殿ヨリ被仰渡、

享保廿一年辰三月廿五日

一七〇

一江戸・御国元御使御賦、三人ヨリ五人賦迄ハ都而急料被下、六人賦ヨリ以上者現人数迄急料被下事候処、此節左之通被相改候、

一三人賦、二人者急被下候、三人ニテ罷通候ハ、三人共急料可被下候、

一四人賦、二人者急・中急ニ応^④候急料被下、二人者静料被下候、二人ヨリ以上ニテ罷通候ハ、召列候人数之通急料可被下候、

一五人賦、二人者急・中急ニ応シ急料被下、三人者静料被下候、二人ヨリ以上ニテ罷通候ハ、右同断急料可被下候、

〔行間朱書〕
一本行ニ付、寺社奉行以下ハ江戸又ハ京都ナトへ御使又ハ御礼使等之勤有之節モ、時付ヲ以被差越候節、宝曆

四年戌三月末、川上式部事、大納言様御婚姻被為濟

候御礼使御下屋敷ヨリ被差越候節、典膳殿ヨリ時付為致持参候筋、已来共被仰渡候事、

料可被下候、

一急御使御定日数十八日参着候ハ、御賦無差引、十九日ヨリ者御賦銀割ヲ以、応日数返上可申付候、十八日ヨリ内参着仕候者エ者御褒美被下来候へトモ、右御褒美引替、応日数御賦銀割可被下候、

一急御使日数廿二日被相定、廿二日参着候ハ、御賦無差引、廿三日ヨリハ御賦銀割ヲ以、応日数返上可申付候、廿二日ヨリ内参着候ハ、応日数御賦銀割可被下候、

一急・中急共、右之通被相定候間、三道中御賦銀相渡、海陸心次第可罷通候、船中参候而モ船賃料者不被下候、右者、以前者三人賦之者御使被差越候節者、下人不召列事之様相成候間、一人者静料被下、御儉約ニ付、御賦之内静料被下事ニテハ無之候、此旨表方エ致通達候

様被仰渡、

元文元年辰十二月

(島津久實)
主殿

一二七

一急・中急御使、御定日數遅速有之候節、返上銀並被下方御賦銀割ヲ以可致差引旨、去辰十二月被定置候へトモ、六人賦以上之人又者御側廻之人、与力・足輕被召附候節之儀ニ付而ハ、其節分而不相見得候、向後急・中急共、御賦人数不依多少、御側方・表方共ニ、被召付候与力・足輕迄モ都而去十二月被定置候通、返上銀並被下方共御賦銀割ヲ以可致差引候、右之通被仰渡、

元文二年巳五月三日

(島津久實)
主殿

式日御使

一二七

一式日御使之儀ハ、毎月兩度ツ、被差立来候へトモ、一往被相止、右式日通、兩度ツ、飛脚可被差立候、一右通飛脚ニ相成候ニ付而者、御用物通一切無之^①尤、不被差越候而難成御用物ハ間之使ヨリ可被差越候、左候而、才領申付候節ハ、受持之何ヨリ何御用ニ付何品何某エ才領申付候段、前以時々可得差図候、

但、用立仲間ニ持夫二人之外ハ繼馬質割可被下候、一向々御用之儀ハ飛脚使^①可遣候、尤、カサ高二不及様可取計候、

但、御家老座エ差出来候御役場之御用封之儀ハ是迄之通、

一諸人書状之儀モ無抛儀迄大封ニ不及様致勸弁、飛脚使^①差遣品物ハ間使^①ヨリ可遣候、

但、金銀相頼候儀ハ可為勝手次第候、

一諸座御用封並諸人書状請取方之儀者、飛脚之者驚之間エ出張^②使^①同様之仕向エ申付候、

一飛脚兩人間ニ輕尻一疋可被下候条、御用封之儀ハ貫目

掛占等ニ不及候、乍然、依事輕尻ニテ難通節ハ吟味之上持夫可為取也、

一 飛脚人柄之儀者、慥成者時々吟味之上可申付候、

右之通、物頭エ申渡、可承面々エモ可申渡候、

享和元年酉五月

(山田有儀)
伯耆

一一七三

一 江戸エ御使之節、諸人状一通錢三文ツ、相付候様ニト

ノ儀ハ、延享元子年申渡有之候処、此節御使被相止、

飛脚相成候付而者可及迷惑候間、向後状一通ニ錢拾文

已上、書状之程ニ応シ、時々見合ヲ以可相付候、勿論

書状モ細字ニ相認、不及大封様可致勘弁候、

西六月

伯耆

諸座御用封之内エ私用之書状入付差越候儀有之由、薄々

相聞エ候、此節ヨリ御使被相止、飛脚ニ相成候付而ハ

尚以右体之儀共有之候而ハ不可然事候間、取違無之様

可承向々エ可申渡事、

一一七四

一 江戸・京・大坂エ御国元ヨリ、年頭・歳暮・暑寒其外

不時安否尋等ニ付而、互ニ書状ヲ以申入儀有之候、御

一門方・大御目付已上エハ人々心入ヲ以申越候儀、勝

手次第可有之候、右之外ハ安否問又者祝等ニ付、文通

無用被仰付候、乍然親類並傍輩中、無拋用事等之節者、

互之文通只今迄之通可有之御候、右外都而文通無用被仰

付候、近年江戸・御国元共式日御使被相減、諸人書状

多、荷高ニモ有之、御時節柄旁ニ付、右之通被仰付候

旨、末略ス、

安永六年酉正月

(小松清著)
帯刀

一一七五

一 江戸ヨリ毎月、九日御使、廿三日飛脚、

一 御国元ヨリ右同、十日御使、廿四日飛脚、

右者、江戸・御国元共毎月以使両度ツ、被差立来候へ

トモ向後式日被相替、右之通被仰付候、飛脚之儀ハ御

用無之節者不被差立、可成程江戸・御国元共御使一度

ニテ、急成御用之節者右外ニモ飛脚可被差立候、左候
而御使被仰付候節、飛脚者一所ニ不申渡、式日差掛リ
御用之程見合時々可申渡候、此旨可承向々エ可申渡、^⑨候

但、当八月ヨリ右之通被仰付候、

安永三年午六月

帶刀

一一七六

一江戸エ之式日御使、一ヶ月ニ二度一度ト隔月被仰付候、
二度被差立候節、末之式日者廿四日ニ被仰付候、

安永四未六月

一一七七

一江戸・御国元御使御賦、三人ヨリ五人賦迄者都而急料
被下、六人賦ヨリ以上者現人数迄急料被下事候処ニ、
此節左之通被相改候、

一三人賦、二人賦者急・中急ニ応シ急料被下、一人靜料
被下、三人ニ罷通候ハ、三人共ニ急料可被下候、
一四人賦、二人者急中急・ニ応シ急料被下、二人者靜料

被下候、二人ヨリ已上ニテ罷通候ハ、召列候人数之
通急料被下候、

一五人賦、二人者急・中急ニ応シ急料被下、三人者靜料
被下候、二人ヨリ已上ニテ罷通候ハ、右同断急料可
被下候、

一六人賦已上ハ被定置候通、現人数迄急料被下、其外者
靜料被下候、

一急御使御定日数、十八日参着候ハ、御賦無差引、十九
日ヨリ^⑩御賦割ヲ以、応日数返上可申付候、十八日ヨ
リ内参着仕候者エハ御褒美被下来候ヘトモ、右御褒美
引替ニ応日数御賦銀割可被下候、

一中急御使日数、廿二日被相定、廿二日参着候ハ、御賦
無差引、廿三日ヨリハ御賦割ヲ以、応日数返上可申付
候、廿二日ヨリ内参着候ハ、応日数御賦銀割可被下
候、

一急・中急共ニ右之通被相定候間、三道中御賦銀相渡、
海陸心次第可罷通候、船中参候而モ船賃料者不被下候、
右者、以前ハ一人賦之者御使被差越候節ハ下人不召列

者無之候へトモ、近年ハ三人賦之者御使ニハ下人不召

列事之様ニ相成候付、一人ハ静料被下候、御儉約ニテ

御賦之内静料被下事ニテ無之候、此旨表方エ致通達、

御側方・御勝手方エハ写ヲ以可相達候、已上、

元文元年辰十二月十日

(島津久實)
主殿

郷原金太夫

(一一七〇号文書に同じ)

一一七八

享和元酉年、御儉約ニ付、

一江戸表 上様エ、奥向並御近習通之面々、年頭・暑寒

其外御祝儀伺 御機嫌等、定式以書状申上来候儀、此

節御使被相止、飛脚相成候付而ハ、一往不及其儀候、

尤、御役替其外之御礼事ハ是迄^{④之通}可相心得候、江戸詰

右面々ヨリ御当地エモ右同断、

但、御一門方・御女中方・島津左衛門一列ヨリモ其

身之御礼事ハ是迄之通書状又ハ文ヲ以被申上、其外

之儀ハ先達而申渡置候通被仰付候、

一江戸詰御家老其外御役々支配頭等之儀、諸御役人等之

内ヨリ年頭・暑寒其外定式書状差越来候へトモ、一往

不及其儀候、尤、御役替其外其身之御礼等之儀ハ有来

通可相心得候、

一御当地御家老其外御役々支配頭等エ江戸詰御役々等ヨ

リモ同断可相心得候、

右之通被仰付候条、向々エ可申渡候、

酉八月九日

(川上久致)
久馬

(山田有儀)
伯耆

一一七九

一式日御使之儀、江戸・御国元共両度又者一度、隔月ニ

被差立来候へトモ、十二月之儀ハ、以来一度前ニテモ

両度被差立筈候条、此旨可承向エ可申渡候、

寛政元酉十二月

(島津久利)
求馬

一一八〇

一江戸御使之儀、諸人頼物多、致迷惑由候、已前ニハ書

状・頼物等ニ錢相付事候処、到比日無其儀相聞へ候、
向後状一通ニ錢三分ツ、可相付候、其外之頼物ハ右ニ
準シ銀錢可相附旨被仰渡、

延享元子五月七日

一一八一

一江戸御使之儀、急・中急共海陸勝手次第罷通候様被仰
付置、滞ニ付而ハ証拠不被相立段、先年被定置候通、

御定之日数不致着、御賦銀取込、年府上納等之願申出
候者モ有之候、右通被仰付置候付而ハ、向後滞ニ付訴
訟等申出候共不被取揚、取込銀皆返上被仰付候旨被仰
渡、

延享二丑六月十三日

(島津久重)
本

一一八二

一江戸中途滞ニ付而ハ、証拠等不被相立、御定日数罷通、
御賦銀取込上納之訴訟一切不被取揚旨、被仰渡置候へ
トモ、向後為差知故障人ハ、慥成証拠ヲ以訴出候者ハ、

吟味之上御賦銀差引被仰付モ可有之候、右外滞ニ付訴
ハ差引被仰付間敷候、御賦銀取込返上急ニ難相調、年
府等之願申出候節者、時々吟味之上、何分ニモ可被仰
渡旨被仰渡、

延享三亥十月廿八日

(二一六一号文書に同じ)

一一八三

一式日御使滞ニ付、御賦銀取込相成、年府等之訴訟之願
書者、御勘定所エ相付申出候様被仰渡、

宝曆二申九月十二日

道中駕籠定

一一八四

(一八五号行間朱書)
一御留守詰川上五後右衛門、中途駕籠被仰付度旨申出、
御留守居詰之儀、江戸上下之節ハ三人之駕籠可被下旨、

御規模帳ニモ記置候様被仰渡、

正徳三年巳五月廿八日

其外ハ被下間敷候、

一一八五

一間之上下、御用人以下之御役人ヨリ駕籠不被下候、為

一乗物昇六人

之差知病人且又六十以上之人ハ、御役無構、御供立・間

御一門・御城代・御家老・若御年寄・大御目附

之上下共ニ駕籠可被下候、先例又ハ輕キ病体之者エハ

一駕籠昇

曾テ被下間敷候、

但、御供ニハ六人、間之上下ニ者四人、

一御納戸奉行・御記録奉行・御小納戸・御右筆

寺社奉行・御勘定奉行・組頭・御番頭・御用人

右者、御行列致御供候節計駕籠昇四人可被下候、川越

一駕籠昇四人

役・宿割等ニ参候節ハ駕籠被下間敷候、

町奉行・御留守居・御納戸奉行・物頭・御船奉行・御

但、御役外ニテモ右御役格ヲ以御行列ニ参候節ハ駕

使番・御近習役・納殿役人・御茶道頭

籠可被下候、

右者、御供立御備参候人並御中途御用ニ付而其役ニテ

一六十以上之人並為差知病人エ駕籠被下候時ハ、御供立

御供仕候ハ、右之通駕(籠脱カ)可被下候、御先御跡役係ニ参

ニ被下候程之人エハ小倉・中国・東海道三人次駕籠(料脱)相

候人ニハ被下間敷候、

渡、其外ハ東海道二人次駕籠料可相渡候、

一駕籠昇四人

但、六十以上之人ニテモ自分依本ノ、ニテ旅之御奉公仕候

御医師

者エハ駕籠被下間敷候、

右者、御備又者御跡サラヘ御供仕候節、駕籠可被下候、

一護摩所並諸出家江戸エ被差登候時ハ、五十才ヨリ三道

安養院

但、御供立之節ハ四人、間之上下三人、

右、江戸護摩所詰被仰付候節、右之通可被下候、

一 駕籠昇三人

右、安養院外之僧護摩所詰之節、御供立並間之上下共

ニ右之通可被下候、

一 駕籠昇三人

但、小倉・中国御供立ニ参候節ハ、カコカキ四人可

被下候、

一 御側御小姓・表御小姓・奥御小姓・小坊主

右、御供立之節、十四才迄者右之通駕籠可被下候、及

拾五才候ハ、被下間敷候、

但、間之上下之節、東海道・小倉・中国共ニ三人次

駕籠可被下候、

一 駕籠昇三人

御厩御馬方

但、小倉・中国筋罷通候節ハ、駕籠カキ四人可出候、

代銀ニテ顯出候人有之候ハ、駕籠昇料可相渡候、

右者、御馬宰領之節、右之通被下候、御馬才領ニテ無
之節ハ被下間敷候、

一 駕籠昇三人

納殿役

右ハ、女中才領ニテ上下之節、右同断、

一 右同三人

右者、女中才領奥火番並御馬才領小役人六十以上之人

ハ道中通駕籠不被下候ヘトモ、差支候ニ付、右之通被

下候、

一 御近習役、間之上下ニテ駕籠不被下候旨被仰渡置候ヘ

トモ、間之上下ニモ四人カコ被下候旨、寛延二年戊八

月十七日義岡左平太殿取次御証文ヲ以被仰渡候、

一 御行列放レ参候人之内ニモ四人駕籠不被仰付候而不叶

詔有之人ハ、時々吟味之上四人駕籠可被下候、

右、享保十二未九月廿六日伊集院十藏殿御取次ニテ御

勝手方エ被相達、同年十月廿六日向井十郎太夫殿取次

証文ヲ以被仰渡候、

一一八六

一 東海道次駕籠料

一 銀二百十匁

東海道急次駕籠六人賃

一同百四十目

右同、中急次駕籠四人賃

一同百二十目

右同、静次駕籠三人賃

一同八十目

右同、静次駕籠二人賃

但、両渡除百十五里半、割一里ニ付文銀一分三厘^{④反}

八毛九、

一 中国次駕籠料

一 銀百五十目

急次駕籠六人賃

一同百目

中急次駕籠四人賃

一同七十五匁

静次駕籠三人賃

一 小倉筋上り駕籠

一 銀六十三匁

急次駕籠六人賃

一同四十二匁

中急次駕籠四人賃

一同三十一匁五分

静次駕籠三人賃

一 小倉筋下り駕籠料

一 銀六十六匁

急次駕籠六人賃

一同四十四匁

中急次駕籠四人賃

一同三十三匁

静次駕籠三人賃

右者、六十已上之御使之人エ被下候次駕籠、右之通相

改候条、時々証文ヲ以可相渡也、

輕尻

一一八七

御供立之節、輕尻一疋被下候人数

一 御包丁人頭・御家老座筆者・御側詰座筆者・御徒目付

但、御徒目付、御供立之時ハ輕尻一疋可被下候、間

之上下ニハ被下間敷候、乍然御留守詰又者御供立之

節、御先御跡ニ大勢被差越、主取有程之時ハ、間之

上下ニテモ輕尻可被下候、

一 御近習番所筆者

但、御供立之時ハ輕尻一疋可被下候、間之上下ニハ

不被下候、

一道中横目

右同断、

一横目・御徒目付

間之上下ニテモ同立人数五七人ヨリ已上被差遣候節ハ

輕尻⑨實被下候事、

一川越附役

一宿割方附役

一道中外廻

一道中小荷駄備下知人

一御同朋・御書院御茶道

一御庭見廻

一御目付座筆者

一御包丁人並御料理役

一御馬乘

一馬医

一御旅御台所役

一御納戸筆者

一御腰物方

一御使番所筆者

一御書院方筆者

一御厩筆者

一御兵具所筆者

一時計師

一摩師(磨カ)

一彫物師

一小細工人

一御柄卷

一御家老与力

但、御供立之時ハ輕尻可被下候、間之上下ニハ筆者

与力計輕尻可被下候、

一若御年寄与力

但書同断、

一御用人与力

但、御供立之時ハ輕尻一疋可被下候、間之上下ニハ

半輕尻可被下候、

一表坊主

一 御兵具所肝煎

但、間之上下ニテモ足輕多人數召列候時ハ輕尻可被

下候、

一 御厩肝煎

一 御料器役

一 御酒部屋役

一 御長持八竿才領

一 御本尊才領

一 御納戸肝煎

一 御旅箱才領

一 御鎧箱才領

一 御太刀箱才領

一 御用箱才領

一 御具足才領

是迄主從賦、

一 護摩所エハ二疋可出候、

但、駕籠給候へトモ二疋可出候、
⑨

一 御祈念方

一 御本亭番

一 御行列直付

一 中通御目付附

一 御書院仕坊主

一 御道中役掛御中間三人

内、二人鞍所役、一人カリ肝煎、

一 表走番足輕

一 御旅御台所附

一 宿割方エ相付足輕

一 川越方エ相付足輕

一 御本亭井戸番

一 御先役掛之御中間三人

内、二人鞍所役、一人カリ肝煎、

一 御食焚

一 御関札打

一 次馬受取

一 御跡サラへ

一 御草履取

御供立半輕尻被下候人数

一御長持八竿下才領足輕

一御兵具寄才領

一御家中荷物才領

一御道中飼見廻御中間

一御納戸御荷物才領之小者

一御先荷物才領之足輕

一御旅方寄才領

一又者押

一御犬牽足輕

一問之上下輕尻定

一御家老与力

但、筆者与力計輕尻被下候、

一若御年寄与力

但書同断、

一御使何ソ才領物被仰付、静ニテ被遣候節ハ輕尻一疋、

中急之節ハ可為半輕尻事、

一此節、南泉院権僧正上京ニ付、被罷下候道中足輕被召

附候処、輕尻之願申出、願之通一疋賃被仰付候由、亥

十二月御証文ヲ以被仰渡候事、

一御用人与力半輕尻可被下候事、

一御兵具所肝煎多人数之主取イタシ諸事差引相勤候節ハ

輕尻可被下候事、

一問之上下之人、出水筋參候節ハ三リ分増銀トシテ駄賃

銀・糞地銀小倉賦之割可被下候、才領物有之節ハ輕尻

賃之割三日分可被下候事、

一主従三人ニテモ上下之人少年之人エ輕尻一疋被下候事、

但、十五才已下、

人馬御賦

一一八八(の1)

一寛政十二年申四月、長崎御屋代服部源左衛門長崎エ家

内引越ニ付人馬之儀申出趣有、郡奉行吟味之内、

本文シラへ被仰渡承知仕候、先年伏見御屋敷付長谷川

藤兵衛御元エ家内引越被仰付候節ハ、其身エハ馬一疋・家内之者共エハ依願自分雇人馬御免被仰付、其外右様之節、自分雇人馬御免被仰付候儀、多々相見エ申候間、此節源左衛門願ニ付而ハ右ニ被準、源左衛門エハ馬一疋、其外ハ荷物応員数自分雇人馬被仰付方ニモ可有御座哉、未略、

申四月八日

郡奉行

(一一八八の2)

此表、郡奉行シラヘ之通申付候条、如例可申渡也、

申四月八日

御勝手方印

川上九戸

但、真赤半分、一ヶ月一人ニ壱斗五升、

右、江戸大廻船上乗主従二人ニテ五十月之船中為給分可相渡事、

一下リ 銀三十六匁 文銀ニシテ

一御扶持米六斗

但、真赤半分、

右同為給分主従二人ニテ二ヶ月分可出事、

一上リ 三ヶ月分、米九斗

但、真赤半分、

一上リ 三ヶ月分、文銀八十匁

一下リ 廿五日分、米二斗五升

但、真赤半分、

一下リ 廿五日分、文銀二十二匁五分

右、大坂上乘之士往来之御賦、右之通被仰付旨被仰渡、

寛保二年戊八月十九日 御証文

一一八九

一上リ 新銀九拾目 文銀ニシテ

一御扶持米壱石五斗

一一九〇(の1)

一上乘賦御扶持米、大坂賦之半分ニシテ三十日分可出候、

若三十日之内罷帰候ハ、細嶋ヨリ陸地之駄賃出間敷候、
尤、三十日余罷帰候ハ、駄賃並御扶持米可出事、

(一一九〇の二)

一江戸・大坂行船破損之節、上乘御賦方差引之次第、跡々
不相並候儀モ候故、此節左之通申付候、

一江戸行船上乗御賦方上リ五ケ月下リ二ケ月分、大坂行
ハ上リ二ケ月下リ廿五日分御賦御扶持米相渡、船中日
数過不足有之候共、御賦御扶持米出入有之候間敷旨、
御規模帳ニ相見へ、渡切之被下方ニ候故、本船破船候
而モ御賦御扶持米ニ付而ハ御構無之事情ヘトモ、被下
置候御賦御扶持米等皆同相捨候時ハ早速致難儀管候故、
船ニテ差越候諸奉公人乗船破損之節、被安置候御規模
帳之旨ヲ以、中途ヨリ罷帰候ハ、上乘船中賦割ヲ以応
現人数被下、御国中者苦勞米定之通可被下候、乍破損
御賦等捨於無之ハ、直ニ上乘相勤候而モ、又々其所ヨ
リ罷帰候而モ、御賦御扶持米不及差引之沙汰、尤、破
船場ニテ致陸宿、旅込ニテ罷在候而モ、別立而旅込賃
相渡ニ不及、最初被下置候御賦方之分ニテ出入差引有

間敷候、乍然災殃之記ニ依テハ其節之時宜次第可申付
候、

右之通向後相定候条、得其意、御規模帳ニハ張紙ヲ以
記置、江戸・大坂エモ使之趣高奉行ヨリ可申越候、
右ニ付而ハ諸事如例可被申渡也、

卯六月廿一日

御勝手方印

取次
大野清右衛門

一一九一

寛政四年子

- 一 大坂行穀物船上乗一人被下方、
- 一 銀六十疋匁、外ニ二十目於積場相渡、
- 一 真米三斗三升六合先、
- 一 赤米三斗三升六合先、外ニ真米老斗老升四合、赤米老
斗老升四合於積場相渡、
- 右之通、高奉行ヨリ返答有之、
- 子八月三日

御船手物定

一一九二

一主從十二人

御船奉行

但、高不依多少、

一右附役三人 主從三人賦

一檢者一人 主從四人賦

一御船頭一人 主從四人賦

一脇船頭三人 主從三人賦

但、御船手座付士赦免之者ニテ候間、右脇船頭役御

免之節ハ主從賦本之通可被下候、

一御參勤之節、御船立御船手附士ニテ無之、脇船頭可被

召上^{⑨セ}刻ハ、主從二人賦御扶持米帖佐与方ヨリ可出候、

主從三人之脇船頭同前ニ於大坂相勤儀候付、苦勞分ト

シテ一人分賦御扶持米上下分模合方ヨリ銀子ヲ以可相

渡事、

一脇船頭御上国之節、下町^(石カ)下灯籠之下エ相詰候ハ、主

從御扶持米可相渡候事、

一定船頭江戸其外近国御国行、主從可為御賦事、

一無御赦免脇船頭・仮脇船頭御分国中エ御奉公差越候節

ハ御物方ヨリ被下候事、

一新銀十四匁、定船頭一人三十日賦、海上御扶持米一日

真米壹升ツ、大坂地賦御扶持米右同斷、

一新銀七匁、定水手一人三十日賦、海上御扶持米赤米壹

升ツ、大坂地賦御扶持米右同斷、

一定船頭・定水手御扶持米並^{⑩備}水手御扶持米模合方ヨリ

御船手エ渡置可相払候、勿論返上可有之時ハ御船手模

合方之本可相重事、^{本ノ}

但、定水手賦銀並浦水手賃銀ハ何^{⑪ル}モ御物方ヨリ出

ル、

一御供立江戸詰之人或ハ間之上リ或ハ他国エ御使之人乘

船之船頭水手、海上御扶持米模合方ヨリ御船手エ渡置

可相払、勿論帰帆之時分殘御扶持米於有之ハ御船手模

合方之本可相重候事、

一御船頭

右、五人賄料被下候、

一 脇船頭

右、勤場ニ付、向後四人賄料被下候、乍然鐘之儀ハ為

持候ニ不及候、

一 仮脇船頭

右、向後三人賄料被下候、

右之通被仰付候条、此旨申渡、可承向エモ可申渡候、

天明七年未七月廿四日

(二權奉行目)
主計

一一九三

明曆三年御船手物定

一 御船奉行一人

但、高賦之外二人重、

一 右付衆三人

一 御船頭一人

但、高賦之外一人重、

一 浦船頭一人

但、主従三人可為賦候、

一 御添御座船頭一人

但、主従三人賦タルヘク、

一一九四

万治二年正月廿八日^① 直

一 銀十四匁

打ヲロシ定船頭一人三十日賦、海上飯米者一日ニ壹升

宛、大坂地飯米者一日ニ壹升ツ、

一 銀七匁

定カ子一人三十日賦、海上飯米者一日ニ壹升ツ、大

坂地飯米ハ壹日ニ壹升ツ、

右同断

一定船頭・定カ子賦銀飯米並浦カ子飯米、公役方ヨリ船

手エ受取置可相払候、勿論返上有之時ハ船手公役方之

本ニ可被相立事、

一 御兩殿様御替合ニテ其年中ニ御下向被遊候ハ、諸定

船頭打ヲロシ賦タルヘク、若 御兩殿様共ニ御在江戸

被遊候而大坂エ詰定船頭於有之ハ一身賦可出事、一身

賦ヨリハ船手ニ払被仕間敷候、御国ハ高所、大坂ハ御藏本ヨリ可被出候、

但、一身賦出候共、海上飯米ハ一日ニ卷升ツ、大坂地飯米ハ如常可為五合事、

一御供立在江戸衆或ハ間之上洛或ハ他国エ御使之衆乗船之船頭カ子、海上飯米ハ出物方ヨリ船手エ受取置可相払候、勿論帰帆之時分残飯米於有之ハ船手公役方之本ニ可被相立事、

一御上洛立カ子、諸浦ヨリ御船手エ相揃候日ヨリ出物米一日一人ニ付飯米卷升ツ、可被下候、

一浦カ子、一上下九十日ニ相定、詰重之日数ハ一人一日ニ賃飯米ニ六分ツ、被下候、六分之内海上飯米七合五勺之代曳除、残銀御物方ヨリ可出候、勿論残飯米有之候共賃銀ニ差引有間敷候、残飯米ハ船手公役方之本ニ可被相立事、

一御使船並間之上洛衆乗船御船不在合候而、細嶋其外他国ヨリ借船之時ハ、船得銀・カ子賃飯米公役方ヨリ可出候、併御供立在江戸之時分御船不足ニ付、他国ヨリ

借被調候ハ、船得銀・カ子賃御物方ヨリ可出事、

一御女房衆細嶋ヨリ大坂之間借船ニテ上洛之時分モ船得銀・カ子賃飯米ハ公役方ヨリ可出候、船中・道中・江戸賦方ハ御物方ヨリ可出事、

一御船ニテ出物米仕上セ之時ハ、カ子賃銀・飯米出物方ヨリ可出候、御物方之米仕登之時ハ、カ子賃銀・飯米御物方ヨリ可出事、
一米五斗起

右ハ、出物米御船ニテ江戸大廻之時、出物方ヨリ船頭エ可被下、

但、下田・鳴渡其外宿賃・日和祭入目也、江戸ヨリ帰帆之時ハ出間敷事、

一米卷斗 駄倉崎宿賃

一麻苧五斤 関苧

一銀六匁 タテ草代

一油三盃 アンシ油

一ワラ二束 ハシ船手繩

右ハ、出物米江戸大廻之御船帰帆之時、於江戸船頭エ

可相渡候、商買船ニハ被下間敷事、

一四枚帆一艘六人カ子

一五枚帆一艘八人カ子

一六反帆一艘十人カ子

右ハ、大坂・細嶋之間⑨使早便船之時ハ如右之賦也、間之

上落之時ハカ子可為帆当候、右之外、大船之時ハ右之

見合ヲ以カ子可被召乗セ事、

右ハ、公役方規模帳之内ニ船手諸物取払之分書抜候間、

向後此旨可被相守者也、

明曆三年酉四月十五日

公役所印

一一九五

天明八年申八月三日

一御船奉行ヨリ、仮船頭之儀、御上下之節御家老衆船

船頭相勤、兼而ハ江戸・大坂穀物船頭同前差越申候処、

此節御船頭五人賄料・脇船頭四人賄料・仮脇船頭三人

賄料被仰付候付而ハ、右物積上候節三人賄被下候儀如

何可有之哉、郷士御船手船頭之儀ハ主従二人賄被下事

ニ付、元文五年、脇船頭平山仁右衛門差廻候訳ニテ、

御船手船頭之場ニテ、御春屋仕出江戸御用物積上候節

モ其通被仰付候旨、同年十二月廿九日之御証文ヲ以被

仰渡候、尤、御船手附与力ニテ御船手船頭相勤候者ハ、

江戸其外近国行ニハ主従二人賄被下候御規ニテ候段、

申出趣有之、

此表、二人賄料被成下候条、如例可被申渡也、

天明七未八月十六日

御勝手方印

大野隼人

一一九六(の1)

御規帳朱書

一久見崎御船手定水手楫取之儀、⑩浦雇拵取之賃銀四分一

可被相渡旨、去ル午五月廿一日向井十郎太夫取次御証

文ヲ以被仰渡候、左候ヘトモ故実銀之儀者為相定通是

又相渡答候、然者御当地御船手定水手楫取之儀モ右同

前可相渡事、

但、楫取賃銀モ雇水手賃銀モ同前之事候、

一上下九十日貨銀五十五匁之四部一可相渡事、外ニ故実銀可相渡事、

右、御船立御上下共右之通、

一上下九十日貨銀四部一可相渡事、

外、故実銀右同、

右、御船エ御米並諸物積入大坂上リニ如此、

一右同四十三匁七分五厘之四部一可相渡事、

外、故実銀同、

右、間之中乗船之節ニ如此、

右者、御船差上セ候節、右之通相渡筈ニ候、

右之外、近国行ニテ候ハ、雇水手貨銀之四部一可相渡

候、外、故実銀右同、右之外、御領中島々諸所行、雇

水手貨銀四部一相渡、故実銀之儀ハ御規帳見合、相渡

所ニテ候ハ、可相渡事、其外御領内御用物積入津廻ニ

テ候ハ、雇水手一人一日ニ六分ツ、之四部一、応日

數可相渡事ニ候、此楨取御証文之儀、当正徳二年辰年

ヨリ同四年午十二月迄久見崎御用帳ニ有之候、其上右

御証文写享保十八年丑五月之大貫ニ有之、

(一一九六の?)

一仮脇船頭之儀ハ、御船手船頭定數之内ニテ、御上下之

節ハ御家老衆船之船頭相勤、江戸・大坂御仕登物等之

節ハ御船手船頭クリ廻ヲ以申付来候処、仮脇船頭向後

御賄料被下、一代御船手付与力被仰付候段、去年被仰

渡候付、御仕上物等之船頭相勤候付而ハ仮脇船頭持前

之勤方ニハ相替候付、主從之御賄料被下筋ニモ可被仰

付哉之旨吟味之趣申上候処、二人御賄料被成下候旨、

未八月十六日大野隼人取次御証文ヲ以被仰渡置候処、

此節、御船頭・脇船頭御国旅被下方、並仮脇船頭荷方

船頭ニテ江戸・大坂エ差越又ハ御国旅之節ハ、真米沓

升九合ツツ被下候旨、当月十七日御証文ヲ以被仰渡候、

依之申上候、御国旅之節ハ其通被成下、江戸・大坂エ

荷方船頭ニテ被差遣候節、真米沓升九合ツ、被成下ニ

而ハ迷惑仕筈御座候間、先達而被仰付置候通、二人御

賄料銀米被成下筋被仰付度奉存候、 末略、

申八月廿九日

御船奉行連名

(一一九六の3)

張紙
一銀七分

但、一日分故実銀、

真米壹升

但、一日分御扶持米、

右ハ、江戸・大坂行キ御船取仕立之節、右之通被成下

候御規ニテ候、

申八月

御船奉行

(一一九六の4)

右ニ付、高奉行シラへ、

一銀一匁三分 米壹升

右、仮脇船頭主従二人御賄料一日分、

本文、仮脇船頭被下方之儀ニ付シラへ被仰渡相糺申候

処、御国旅・他国出共同様、真米壹升九合ツ、被成下

候旨、去月十七日御証文ヲ以被仰渡候付而ハ、自他国

之無差別同様被成下候而ハ御船奉行申出之通迷惑仕等

御座候間、先達而被仰付置候通、中乗等之節ハ他国出

主従之御賄料被下、御国旅之節ハ真米壹升九合ツ、被

成下度儀ト吟味仕、此段申上候、已上、

申九月十七日

高奉行

(一一九六の5)

此表、仮脇船頭荷方船頭ニテ江戸・大坂エ被差越又ハ

御国旅之節ハ、真米壹升九合ツ、被下候旨被仰渡置候

へトモ、申出趣有之、江戸・大坂エ被差越候節ハ主従

之賄料被下、御国旅ニハ先達而被仰渡置候通被仰付候

条、如例可被仰渡旨御差函ニテ候、以上、

申十月二日

北郷八右衛門

御勝手方

(一一九六の6)

右表書之通、如例可被申渡也、

天明八年申十月五日

御勝手方印

大野隼人

一一九七(の1)

一御船大工頭添役御国行御扶持米、御規帳其外先例等段々

相糺候へトモ不相知候間、被相糺、何分可被申越候、

御船大工頭樗木七郎右衛門御国行之節ハ、真米弐升五

合ツ、被成下候帳面モ相見ヘ候ヘトモ、添役御国行相

知不申、末略、

卯二月十七日

久見崎御船手

御船手

(一一九七の?)

張紙

本文相達候、爰元御船大工頭福崎嘉兵衛工相礼候処、

御船大工頭添役御国行御扶持米之儀ハ、真米壹升三合・

赤米六合ツ、被成下候旨申出候間、此旨申遣候、已上、

寛政七年卯二月廿三日

御船手

久見崎御船手

一一九八(の1)

天明八申八月

一五人御賄料、御船頭

一四人御賄料、脇船頭

一御船立並下之関(日奈久)奈久御渡海方 御召船乗被仰付候節ハ、

右之御賄料被仰付置候、

一御領内ニテ御賄重被仰付候已後、御召船乗相動不申

候間、何程被下方相知不申候、

一御賦重不被仰付内、御船頭・脇船頭御領内ニテハ弐升

五合ツ、被成下候、

一三人御賄料、仮脇船頭

一御船立之節、御家老衆御乗船之船頭相動来申候処、御

賦重被仰付候已後他国動方未仕候、

一無御赦免内御国差越候節ハ、主從御扶持米被仰付来候

処、去未七月御船手附一代与力被召出、三人御賄料被

仰付⑨付、御領内ニテモ弐升五合被成下候、

右之通御座候間、此段申上候、已上、

申七月廿八日、諸船頭右之通申出候間、此段申上候、

已上、

申七月廿八日

御船奉行

(一一九八の?)

此表、三船頭共 御船立之節計被窮置候通被下之、御

船頭・脇船頭御国旅之節ハ、真米弐升五合ツ、仮脇船

頭荷方船頭ニ付江戸・大坂エ差越又ハ御国旅之節ハ真米老升九合ツ、被下候条、如例可被仰渡旨御差図ニテ候、己上、

申八月十六日

北郷八右衛門 印

御勝手方

傳右衛門エ此節 御迎立迄寄脇船頭被仰付、三人御賦被下、役料米脇船頭同前ニ被仰付、重之分割ヲ以被下候、
右之通被仰付候条、諸事如例可申渡也、
宝曆三年酉正月廿一日 御勝手方印

(一一九八の3)

右表書之通、如例可被申渡也、

天明八年申八月十七日

御勝手方印

山田弥九郎

一一九九

脇船頭郡山衆中 山元藏右衛門

一右ハ、御船頭松元仁兵衛病氣ニ有之、 御迎御船立罷

上候儀御断申出候付、此節 御迎立迄右藏右衛門寄御

船頭被仰付、四人御賄被下、旅中役料米御船頭同前ニ

被仰付、重之分割ヲ以被下候、

仮脇船頭久見崎御船手付 土屋傳右衛門

一右者、脇船頭山元藏右衛門寄御船頭被仰付候ニ付、右

二〇〇(の1)

一銀百拾式匁

備前下津井村名主七左衛門

右者、去ル戌年御船立之節、下津井村湊へ繫船仕居、
 出帆之砌、関小早船乗セ付碇綱摺切り碇七頭相捨リ候
 処、風波強ク其上御船之出帆之折柄故取揚方不相調、
 船頭計ヲ以下津井村名主相對ニ相頼、御船之内小早使
 船残置尋方仕候処、右之内五頭其節尋得、残式頭急ニ
 尋出不申候付、残居候御船々モ出帆仕、右二頭揚リ候
 ハ、便宜ヲ以知セ候様、小早船頭ヨリ猶又名主方へ頼
 置候処、此節碇一頭尋得、名主方へ預リ置、船人相雇
 候賃錢等之儀共書状ヲ以御船頭方へ問合申越候旨申出
 候付、先例相シラへ候処ニ、前文同年、琉球人立方関
 一柳丸大村領通船之節、松嶋浦へ繫船仕候砌、碇綱摺
 切、碇一頭相捨リ候処、御船々出帆之事ニテ急ニ取揚
 方難成、所役内談ヲ以取揚方相頼置候処、尋得候旨大
 村領役目之者ヨリ久見崎船頭方へ受取方之儀申越候旨
 申出候付、中略、近々赤間ヶ関 御渡海方御船ニ

御附届御挨拶

- 御附届
- 船法度
- 浦寄物
- 他所船中
- 浦賀印鑑
- 同御番所
- 大坂御番所
- 同川内定

被差越候御船頭ニモ被遣事候間、右御船々通船之節、

(一一〇〇の二)

書状遣候役人へ御船頭ヨリ引合為相受取候様可仕、尤、

此表、申出之通如例可被仰渡旨御差図ニ而候、以上、

表方候儀候ハ、挨拶等相当可被仰付儀候得共、船頭相

寅六月廿九日

倉山藤寛

対ニ相頼、取揚方仕候付而者右之御沙汰ニ不及、且又、

御勝手方

其節者船人差出候賃銀等之儀モ不申越候付、御船頭前

(一一〇〇の三)

ヨリ一礼申述、相中へ金子三百疋相送候筋被仰付方ニ

右表書之通、如例可申渡也、

モ可有御座哉之旨奉得御差図候処、申出之通被仰付候

寅七月九日

御勝手方印

旨、亥四月十八日之御証文ヲ以申出之通被仰渡、此節

松崎次左衛門

之儀モ前文同様船頭相對之事ニテ、殊ニ尋方ニ付、賃

銀等右之通相払置候旨申越候付而ハ、外ニ品物等被差

一一〇一

船頭礼書案文 料紙杉原

越ニ不及、御船頭前ヨリ挨拶之書状相添、賃銀一所ニ

一去々十二月之御札相届致披見候、弥御堅固可被成御勤

差遣方ニモ可有御座哉、

珍重存候、去ル戌年船々致上候節、其本繫船之砌、碇

外ヶ条略ス、

七頭相捨リ、其節御世話ヲ以五頭ハ取揚、残二頭取揚

右之通吟味仕候、申出之通於被仰付者、 中略、 久

方不相調候付、以後碇揚候ハ、便宜ヲ以御知セ給度御

見崎藏有物之内ヨリ船頭へ相渡、書状一所ニ持越右名

頼申置候処、一頭尋出格護被致置、船人雇料等被申越

主へ相渡候上、受取々置引替碇相受取候様被仰付度、

候、 中略、 別紙之通遣申候間、銘々御配当頼存候、

末略ス、

尤、被預置候揚碇之儀ハ、右船頭何某へ御渡可給候、

寛政六年六月

御船奉行連名

中略、此旨為可得御意如此御座候、恐惶謹言、

及旨被仰渡候先例御座候、此段申上候、以上、

月日

薩州大船頭

竹之内平助 判

備前下津井村

庄屋
七左衛門様

一一〇三(六一)

一 銀拾二匁、錢ニシテ拾壹貫二百文 但、丁錢

文化七年午

右之通遣申候、以上、

薩州大船頭

竹之内平助

一 松平出羽守様御預所隱岐国へ去年琉球致漂着、此御方

七左衛門様

ヨリ受取方トシテ野元嘉三次其外被差越、御引渡相濟、

御国元之様廻船之節、致通船候於諸所世話方相成候面々
へ御挨拶向調^①被仰渡、吟味之趣左ニ申上候、

一一〇二

一 御附届品書略ス、

明和九年辰

一 松平周防守様・水野左近將監様御内へ御付届物之儀者

一 三百石積船主御料下別府之孝兵衛、御借リ船ニテ安養^②

物奉行取仕立ニテ中急又者飛脚使ヨリ差遣、金銀錢之

寺ヨリ大坂御仕登米被遣候処、於硫黄灘致難船候付、

儀ハ大坂御留守居仕出ニテ、彼御方御屋敷へ届方之儀

御船奉行シラへ之内、

共御留守居取計候様被仰渡度御座候、

一 宝曆五亥年、船頭柏原之仲藏他国借リ船ヲ以商物積入

一 松平主殿頭殿御内之儀者品物者前条同断ニテ、外之儀

罷上候節、於洋中逢難船、日向之内御料江田村新別府

者長嶋其外最寄御藏ヨリ長嶋郷士年寄方へ相受取、於

ト申所ニテ致破船、出役之面々へ船頭ヨリ夫々謝礼相

長嶋青サシ取仕立、郷士才領ニテ被差越、於先方旅人

送罷帰候付、分達而被下物且私共ヨリ礼状等遣申ニ不

問屋へ相付、彼御方御役場へ差出候儀共、右才領ヨリ

取計候様被仰渡度御座候、尤、右青サシ之儀者物奉行方ヨリ相渡候様被仰渡度御座候、

一琉球船諸所へ致漂着、御付届物被差遣候節者、以後館内返銀被仰付候先例御座候間、此節モ其通被仰付度御座候、

右之通、先例之向ヲ以吟味仕差上申候間、御使番へ吟味被仰渡度奉存候、以上、

未二月廿五日

御船奉行

其外諸向吟味略ス、

(1101152)

右表書之通、如例可申渡也、

未閏二月十四日

御勝手方印
取次
相良此右衛門

御船奉行

御使番

物奉行

御代官

一一〇四(の1)

写

一御船奉行ヨリ、御船松丸崎之津ニテ逢風雨、綱碇相捨候処ニ、崎之津之善藏致世話取揚候ニ付、被下方之儀申出趣有之、

本文、御船奉行申出通、諸雜用共ニ錢拾二貫四百四拾八文差遣、外ニ青銅百疋久見崎船頭中ヨリ謝礼之筋ニテ相送候様可致首尾旨、如例可申渡候、

明和九年辰十月

(善入久福)
主馬

(110452)

右之通、村橋左膳殿御取次ヲ以被仰渡候間、此旨申渡候、左候而、其元船頭共内誰者見合被申付、一礼申達可被差送候、此段申越候、以上、

辰十月十四日

御船手

久見崎詰御船奉行

一一〇五(の1)

文化八未

一 琉球楫船一艘、当七月大村様御領内福田浦へ漂着、御付届シラへ被仰渡、左ニ申上候、

御勝手方

(一一〇五の三)

一 芭蕉布三反 馬廻 森勇右衛門

右表書之通、如例可申渡也、

其外已下役々被下品略ス、

未十二月十四日

御勝手方印

一 礼状之儀、別紙案文通当座ニテ相認、金子・反物ハ物

取次 伊集院平

奉行方、青銅者長崎御付人ヨリ取仕立ニテ、物奉行方

御船奉行 物奉行

ヨリ右反物等長崎へ差越候上、御付人取計ニテ跡々之

(一一〇五の四)

通彼御方へ相届候様被仰渡度奉存候、

右之通吟味仕候、尤、琉球船他領へ漂着、御付届有之

候節者、已後琉球方ヨリ返銀被仰付候先例ニ御座候間、

此節之儀モ右通可被仰付哉、

但、礼状案文ニ通並被相下置候書付四通相添差上申

候、 未十一月廿六日

御船奉行

(一一〇五の二)

此表、吟味之通被仰付候条、書状案文直シ之通相認可

船法度

差越旨、如例可被仰渡旨御差図ニテ候、以上、

十二月十一日

西恰之助

別紙ニテ御付紙 御船奉行ヨリ琉球楫船一艘、当七月大村様御領内福田浦へ漂着ニ付、御付届之儀取シラへ申出趣有之、御付紙吟味之通申付候条、書状案文直シ之通相認可差越候、

十二月

(島津久備) 安房

二〇六

一 寄船・流船者其在所之神社仏寺可為修理事、若其船ニ於有乗物者船主シシテイタルヘキ事、

一 於湊繫キ船損タル時ハ、從其所ヌレ物ヲホシ、船頭ニ可渡也、為其帆前碇役ヲ仕、ミナトヲ買タル上ハ、国主トシテ不可有違乱之事、

一 繫船余多有之、大風ナラハ、其村ヨリ加勢ヲセハ、先風上之船ニ加勢可仕事尤也、イカニ風下之船綱イカリ有トイフトモ、風上之船流カ、ラハ諸ノ船繫留ヘカラス、若風上之船ヲノレト綱ヲ切、風下之船ニ流懸、二艘共ニ損スナラハ、風下之船ヨリ風上之船可為存分事、一 沖ハシル時、風下ニ乗掛沈ル時ハ、風上之船ニ一人成共損タル船ヨリ乗移リタラハ、風上之船ノケカタルヘキ事、

一 本船エタ舟之時、本船之荷物捨、エタ船之荷物無恙時者、船ニ配当有之間敷事、右者親之ヲツカハ子ニ懸リ、子ノヲツカハ親ニ懸事無之故也、

但、最前エタ舟本船積入之時、互ニ乗衆約束之上ヲ

以可有沙汰事、

一 船ヲヌスマレ或ハ賊船ニトラレ、北国之船者西国ニアリ、西国之船ハ北国ニ有之、(離脱カ)此船ヲ買取廻船不可仕事、

若荷物ヲ積、廻船於有之者、船主見合ニ此船ヲ取返シ、船頭モ可為迷惑事、カワラニ付タル沙汰者縦親子之間ニテモフカクタルヘキ事、

(内閣文庫本、此条なし)
一 橋船ナトナカシ、何方之浦ニ可有之トモ、其所ニ理リ可請取事、其故者橋船ニ綱碇無之物也、

但、本船之道具綱碇ニ不依、其橋船ニ於有之者、其所ヨリ相添可致ナリ、親之道具ハ子カ請取ト云沙汰在之、若ソシタル時ハ借船ナラハ借手弁タルヘキ事、

但、船ト陸トノ道タル故ニ借手可存事、

一 借船ヲシテ若其船損タルト云共、借手弁サルヘキ事、

但、船床ヲ不濟船主ノ無分別所ヲヲサヘ出船、其船損タル時ハ、カリテ可為弁事、

但、最前之約束次第タルヘキ事、

一 借り船ヲシテ其船虫食タル時ハカリテ可為緩事、

但、船付於有之者借手不及氣遣事、船付之者種々理

候処ニ借手於油断者可為弁候事、

(横カ)
一 帆柱損タル時ハ借手可為弁事、

但、借請時楫柱ニ疵有之由船主ニ理タル時ハ不及弁

候事、

一 綱ヲキラシタル時ハ不及弁事、

但、取ハツシヲトシタラハ可弁事、碇モヲトシタラ

ハ可弁事、

一 諸道具船請取タル時ハ注文ニ引合可渡事、

一 湊ニテ乗衆出船ヲ進ムルト云共、船頭進ヘカラス候、

(内閣文庫本、以下二行別条とす)
乗衆水主思案之処ニ船頭進出船ヲシテ、若其船氣遣仕

時者、船頭之ケカ不可有之事、
(過カ)

一 荷物濡タル時者船頭之可為弁事、

但、沖ニテ大風ニ逢、大波大雨之時ヌレタル物ハ、

緩ニ不可有之、湊之内ニテ雨アカニスレタルモノハ

船頭弁タルヘキ事、

一 船中ニテ大小ニヨラスネスミ切タル物於有之ハ配当タ

ルヘキ事、

一 船中過分ニ荷物ヲ捨タル時ハ水主私之物ニモ配当カク
ルヘキ也、當時ハ水主可相除事、

(内閣文庫本、此条なし)
一 荷物捨タル時者其船ニモ配当可掛事、右者荷ヲ捨タル

故ニ船助時ハ船ハ配当ニ入ヘキ事、

一 荷物積合時、荷ヲ捨、行サキニテ配当有之時者、先ニ

テ積物之売直ニテ配当スヘキ事、

一 荷ヲ捨、行所ニ不行、乗戻配当有之時ハ、在所之買所

之直ヲ引可配当事、

一 荷ヲ捨、行所ニモ不行、跡ニモ不戻、中途ニテ配当セ

ハ、其所之売直タルヘキ事、

一 船ニ荷ヲ積、船頭ニ積日記ヲ以不渡物ハ、タトイ金銀

ヲ捨タルト云共惣配当ニ不可入事、

一 積日記船頭ニ渡時者乗衆何モ加判有之事、是ニ迦タル

物ハ聊モ配当ニ不入也、

但、船中テンケンノ上ヲ以残りタル時者、積日記ニ

不入ト云共配当ニ可入事、捨タル時ハ曾而不可入事、

一 船ヲ借リテ、戻リニモ運賃ヲ取タル時ハ、三ヶ一ハ船

頭之シンタイタルヘク候事、借請時戻リ之荷物迄モ可

積由理タラハ、三ヶ一ニ不及事、

一 船ヲカリ、船頭行サキニテ公事有之、船ヲ被留時ハ、借船頭可弁事、

一 船ヲ損シテ命助ル時ハ、タトイ其内一人之者ハ金銀ヲタハサミタリト云共、惣中ヨリイロフタルヘカラス候事、

一 粃米ヲ積又唐物ヲ積合タル時、荷ヲ捨ル時、若唐物積

タル荷主我唐物ヲ捨、粃米ニ配当不可懸事、アワテ、
粃米積タル荷主或船頭水主、(脱語ありカ、内閣文庫本「彼から物を為諸時は勿論可入配当事、唐物積たるは、粃米を捨すして我唐物を為諸時は、何米ヲ不捨シテ我唐物ト申トモ不知ト云沙汰有之也、何を内にハ裏てから物といふとも不知」とあり)彼唐物ヲ捨タル時者、粃

一 荷ヲ積テ、或沖ニテ湊ニカ、リテ、船ニ火ヲ出シタル時ハ、沖ニテ大風ニ船ヲ捨タル同沙汰タルヘキ事、

但、火ヲ出シタルハ可為越度事、

一 船ヲカリ、スエテタツル時、船ヲ焼ワリタル時、カリ主可弁事、

一 船カリ、荷ヲ積テ、水主取逃仕タル時ハ可為弁事、

但、水主ヲトラヘ、荷主ニ渡シタル時ハ、縦取逃之

物チン(先カ)ノタリトモ船頭之弁ニ不及事、

一 船カリ候而借手ヨリ相違候ハ、船賃ヲ約束之儘相渡者也、其時者右之船上下仕間程右之(船脱カ)スエ置也、

但、本船主内談候而少々礼物ヲ以相渡候ハ、船何方へ成共廻シ可申事、

一 船ヲ借候時借手ヨリ相違候ハ、右之船程ナルヲ借替相渡、我船ヲ可請取者也、

右三十一ヶ条之儀、貞応二年癸未三月十六日兵庫辻村

新兵衛・土佐浦戸之篠崎孫右衛門・薩摩坊之津飯田備

前天下ニ被召出、船法御尋之時申上、御袖被成御判候

者也、理ヲマクル法ハアレトモ法ヲ曲理不可有之、此

三十一ヶ条之外ニモ船沙汰於有之者、卅一ヶ条ニ引合

似タルヲ以可有沙汰者也、

享保十三年申五月改之書、貞応二年ヨリ文化二年迄二

百八十一年、

諸浦寄物

一二〇七

御船手御規

一 諸浦並諸島へ船・鯨糞其外荷物寄来候ハ、早速取揚、

其所之浦役人へ申出候様、無油断可申渡之事、

但、別而輕品之儀者御定之通相計、時々得差図ニハ

及間敷事、

一 諸浦へ寄来候品物、六ヶ月ヨリ内為主者有之候ハ、

無別条旨承、窮之上品物可相渡候、若六ヶ月相過迄為主者無之候ハ、

時々入札ヲ以売払、代銀之内三ヶ二

御物へ上納申付、残り三ヶ一見付候者へ可被下之事、

但、異国モノ又者依品難売払物有之候ハ、可得差図

也、

一 諸浦並諸島へ寄来候鯨之フンハ惣体御物へ上納可申付

候、追而被売払候節、代銀之内三ヶ一見付候者へ可被

下事、

一二〇八

延享五年辰

一 鯨一本田布施へ寄来、入札払ニテ見付之者へ代銀三ヶ

一被成下候、

辰五月 御証文

一二〇九

一 伊作入来濱ニテ鯛網ニ錢三拾貫文引込、三ヶ一網之者

共へ被成下、三ヶ二浮得方へ上納被仰付、

宝曆六年子十一月 御証文

一二一〇

一 串木野羽嶋浦へ雜樵木流寄候ニ付、番人付置、所役々

ヨリ其段申出候、(然カ)勝者其後、摂州神戸雜樵木船致破船、

右船へ積入置候樵木之由ニテ船頭願出趣有之、寄来之

船①樵並樵木船頭へ被返下候旨被仰渡、

宝歴十二年 御証文

一二一一

一 御領天草之平蔵船高江濱江寄来、久見崎ヨリ申来候付、

左之通申出候、

一右之通申越候、御領内流船之儀者当座江承届、為主者

尋来候得ハ、慥成段承届、受取^取置引渡、六ヶ月相過迄

主無之候ヘハ、入札被仰付御規御座候、右旅船之儀、

牛深村平藏船主無別条段、別紙之通申出候付而者、証

文取置引渡候筋可仕候、旅船之儀故此段申上候、以上、

安永六年酉十一月晦日

御船奉行

例ヲ以可相調哉、

二二三

一琉球並諸島々諸郷浦方ニ至迄、唐木類之寄木等有之候

ハ、品々御用候間、何方ニ而モ見当候ハ、都而向

後御納戸江差出候様申付候条、折角心掛、取得候ハ、

詰横目並締方横目江得差図、御当地江差越候様可致候、

此旨可申渡旨御勝手方江相達、其外不洩様可致通達候、

天明七未八月

(菱刈隆色)
大炊

二二二(の1)

一鯨一本 十尋計

右、指宿宮ヶ濱ニテ取得、其段申出候付、宝曆二年申

二月、頼娃川尻浦江取得候例ヲ以、御物江ハ五部一上納

ニテ入札被仰付候筋吟味申出候処、申出之通被仰付、

寛政三年亥二月十日、松崎次左衛門取次御証文、伺留、

(二二二(の2))

(行間未書)
一本文、鯨寄物者網引等之失脚無之故三ヶ二上納、網ニ

テ取得候ヘハ、網代又者^帆子之手間ニモ掛候付、五部

一上納ニテ候、仮令寄物ニテモ網^為トク引入候ハ、此

二二四(の1)

文化五年辰

一杉本木四拾本 内書^長、尋略ス、

右者、先達而風波之節、櫻嶋沖中江相流候ニ付、所郷

土取揚致格護置当座江届申出候、中略、当座江ハ

何分被仰渡置候儀無之、埋木沈木等取揚候節、御用相

成候木柄ニ候ヘハ、取揚候入目料損亡無之様被成下、

不御用立木柄者取揚候者江吟味之上、代銀下直ニテ申

受可被仰付旨、御規模ヲ以被仰渡置候、 中略、 材

木之儀者当座通手形ヲ以取遣等申渡、受持之儀ニテ御

船奉行ヨリ取扱有之候而ハ、二端立可致混乱儀案中御

座候間、当座取扱被仰付度奉存候、 中略、 鹿木之

儀御座候間、御法之代銀上納被仰付度奉存候、七嶋・

種子嶋之儀、当座受持之場所ニテ無之、船材木ニ相用

候品者当座差構候儀無之候へ共、本木之儘流寄候材木

之儀者御用材木等節々及流失事候間、当座江掛合之上、

已来取扱有之候様被仰渡置度、 末略、

辰八月十八日 山奉行

(二二四の2)

此表、申出之通申付候、已来本木之儘七嶋・種子嶋江

流寄候節者山奉行江掛合之上致取扱、其外是迄之通申

付候条、如例可申渡也、

辰十月十七日

御勝手方印

伊集院平

御船奉行

山奉行

二二五

宝曆五年申

一宝曆五年申十月、甕嶋江流船漂着ニ付申出候処、

本文、流船六ヶ月過迄主無之候ハ、入札払申渡、三ヶ

二御物、三ヶ一見付候者江被下候条、如例可申渡候、

申十月

兵部

二二一六(の1)

天明四年辰十月御船手シラへ留

一大嶋赤木名村之乙松・熊五郎外二十二人銀子見当、大

嶋與人・横目ヨリ申出、島代官長沼嘉兵衛ヨリ銀子相

添及披露候処、向々吟味被召下、物奉行吟味之内、

一本文吟味仕候処、寄物等有之、御物江差上御払物相成

候節之次第、張紙之通御規模ニ相見得申候間、右ヲ以

吟味仕候処、本文銀高三割ニシテ、一ツハ見付候者

江被成下筋ニ相見得申候付、左之通被下方ニモ可有御

座哉、

但、三ツ割一ツ分、見付候銀高二応シ割合算面書略

ス、

辰十月十六日

物奉行

(一一二六の2)

張紙

一寄物有之、差上払物ニ相成候時ハ、代銀三ヶ一見付候者江可被下之、三ヶ二者浮得方へ可相納事、

一一二七(の1)

一鯨之フシ見付、御物江差出候時分、長崎ニテ直成相窮、売上候銀之内ヨリ万口分差引、残銀之内三ヶ一見付候者江可被下事、

右之通、御規帳ニ相立申候、以上、

辰十月十六日

物奉行

(一一二七の2)

本文シラへ被仰渡、本文体之先例見当不申^{⑨候}、諸浦寄

物之格ニ被仰付候へハ、見付候者江三部一被成下候御法ニ御座候間、都而物奉行シラへ之通ニモ可被仰付哉、
末略、

十月十七日

御船奉行

(一一二七の3)

右ニ付、

一 小玉銀二百三ツ、掛目四百四拾目

一 丁銀二拾七、掛目一貫四拾目

右之通、辰七月廿三日於赤木名乙松外二十三人見出、

辰七月晦日与人・横目申出候、

一一二八

一 七嶋江材木類流寄候節者、端島材木不自由之所故、依

願無代銀ニテ被成下候先例ニ而候、

委細七嶋物定之場有之、可見合、

一一二九

鬼界嶋御規模帳之内

一 於島中鯨糞見付候者江者、売上候代銀之内長崎ニテ口
錢相払三ヶ一可被下之間、早々役所江可差出之、若隱
置於致売買者双方共稱敷其科可申付之、縦雖為同類、

訴人之者ハ其科ヲユルシ、右代銀三ヶ一可被下候条、

戊七月

金太夫

此旨儘ニ可申渡事、

一寄鯨有之候節、油之用事ニモ不相達、又者料理^{①等}ニモ

難召仕様子ニ痛候ヲ島中ニ配分ニ申付、代銀相納サセ

候儀共無用可申付候事、

已上、

鬼界嶋御規模帳之内

一寄物見付候ハ、早速代官へ可申出候、六ヶ月相満、其

中主相知候ハ、可相渡、若六ヶ月過候ハ、見付主江可

被下候、勿論依品御用可相成候条可有其心得事、以上、

一一三〇

写

一諸島並浦々江鯨糞其外寄物有之節者、早速支配江相付

申出候筋ニ前々ヨリ申渡有之、計ヒ様之儀モ御規模帳

為被載置事候間、弥以其通可被相心得候、縦者一寸二

寸程之小キ木切類ニテモ唐木^{①等取}相見得候又者シヤレ候

木、ニホイナト有之候木、惣而為替木見当候ハ、不

捨置取揚之、早速支配江相付可差出旨、道之嶋・七嶋

其外島々地等ニテモ荒波之浦々不洩様可申渡候、

右之通、御船奉行・屋久嶋奉行・道之嶋代官へ可申渡

候、

一一三二

寛文七年、従公義、

(御触書寛保集成 三二号)

一自然寄船並荷物流来ニライテハ可揚置之、半年過迄荷

主於無之者揚置輩可取之、若右之日數過、荷主雖為出

来不可返之、雖然其所之地頭・代官へ可受差図事、

文上下略ス、

委細諸浦之場ニ有之、可見合、

寛文七年閏二月十八日

一三三

文化十一年戊

一 錢拾八貫文余

右者、大門口御船造場下町人松村主右衛門借地之内ニ

テ掘出致格護置候段申出候間、取揚申付候条可申渡候、

正月

(川去入秀)
右近

右ニ付御船奉行・物奉行江戌正月十四日桂太郎兵衛御

取次御証文ヲ以被仰渡、物奉行引付ヲ以金藏上納有之、

他所船中心得

一三二四

一 船中御条書

一 御役所へ必船ヲ着、万事公義御法度不相背様可致覚悟、

尤、船中御改之儀可任差凶事、

但、御番所前マキリ乗仕、乗荷船ニマキレ乗通り候

船モ有之、度々御番所ヨリ追船ヲ御出シ候、向後御

番所之前曾テマキリ乗不仕様、船頭・楫取へ堅可申

付旨被仰渡候旨、謹而可相守、其旨若於違背者急度

可為曲事、

一 島々泊ニテ者類船一所ニ可繫之、他国船ニ不乱入様可

申付事、

一 对他国船、船法不相背様可申付事、

一 手形之外船荷物曾而載間敷候、勿論他国へ不出御法之

品々不隠載様、船中可入念事、

一 水取刻者船頭水主ヲ召列、水取仕候ハ、則船へ可乗、

無用所陸へ上り候儀可停止事、

一 船頭陸へ上候刻、用談之趣宰領人継承届、於不叶儀者

可差出之、尤、致一宿義堅可為停止事、

一 船頭陸へ上り候ハ、弥以船中無緩様可致下知候、尤、

船頭同道ニテ陸上り船ヲ明置儀堅可為停止事、

右条々可相守、若違背之儀於有之者、宰領・船頭其科

可申付者也、

月日

御家老座

年間可札、

一一三五

一 御由緒之御方様

一 御近附之御方様

一 御近附無之御方様

右之御大名様方御船急参候節、御船ト見掛候ハ、其御船之前之櫓ヲ引可致行儀⑨候、走船之節ハ帆ヲスリ、懸勲ニ成体相見得候様可仕候、勿論矢倉之上ニ罷居候者共モ作法悪敷無之様可致平伏候、尤、不被為召、御船計御通船之節ハ、⑩不及式对候、依之、御船印並△帆之紋形相渡置候様、聊大形有之間敷候、以上、

九月

御家老座

御船手御帳之内、年間可札、

一一三六

一 御国船江戸・大坂へ被差遣候節、他国御番所船改之砌、謝礼等差遣事候哉、何分可申上旨承知仕候、依之申上候、相州浦賀御番所御番改之節者、御切手並往来取次宿へ苦勞米トシテ真米一俵、御船之儀者御物御払、浦

船者船主ヨリ出来申候、外ニ、右分トシテ積石百石ニ

付銀五分程ツ、是又右同様差出来申候、右石分之儀

者鎌倉之御崎城ケ嶋並志州之内深ケ嶋⑪須カ、右ニケ所灘通

船之節難場之故⑫、灯台被召建、雨晴共毎夜遠方ヨリ相

見へ候程之焚火仕候ニ付、右薪代ニ相成、其外浦賀湊

口へ迦瀬有之、水尾木相建候者苦勞金被成下候入目料

ニ相成申候由承居申候、諸国ニテ番所有之場所者往来

差出場所モ有之、又者往来不差出、何国船何人乗ト申

達迄之所モ有之、謝礼等遣候儀一切無御座候、

一天草諸所湊御番所有之候へ共、往来差出不申候、何国

船之段モ不申出候、

一天草之内牛深湊之儀者近年御番所相立、往来差出申迄

ニテ御座候、

一 肥前ヨリ筑前、長府ヨリ中国筋大坂迄、何方湊へ入船

仕候而モ往来差出不申、何国船者届モ不申出候、且、

何ソ故障モ有之節者其所番所へ申出候へハ番人ヨリ差

引方有之候、

右之通御座候間、此段申上候、以上、

享和元年酉二月朔日

御船頭

脇船頭

仮脇船頭

御船手船頭

明和二年酉十月三日

(一二二七の二)

張紙

本文藏太左衛門事、明和二年酉十一月十五日御納戸奉行へ御役替被仰付、御船奉行御役内浦賀往来印鑑押調不申候ニ付、此節御役替ニ付而者印判如何可仕哉之旨被相同候処、夫共印判共差出候様、御取次迫水善左衛門ヨリ被致承知、藏太左衛門ヨリ差出候段、川上瀬兵衛承届候事、

(一二二七の三)

張紙

平田平右衛門町奉行へ転役被仰付候ニ付、印判御勝手方へ被差出儀ニ付、吉井新太夫ヨリ御船奉行御役替之節何様致来候哉相糺申出候趣致承知、本文之趣申出候処、猶又御勝手方御糺方有之候処、是迄者印判差出候儀不同有之候、右ニ付、此節ヨリ已来御役替等之節者無間違印判差出候様可致、尤、右之件致壁書置候様、吉井新太夫ヨリ山本助右衛門致承知候事、

寛政十午三月三日

浦賀御番所印鑑

一二二七(の一)

御船手壁書

篠崎藏太左衛門

一右者、御船奉行御役ニ而浦賀御関所へ印鑑被差出事候ニ付、印判御勝手方へ差出押調有之候、此節印鑑浦賀御関所へ被遣候、彼地へ為相達儀可被仰渡候条、其節ヨリ浦賀往来手形印判可致候、且又其内久見崎詰ニ差越儀モ候ハ、前広右印鑑之沙汰申出候様可致候、右之趣、迫水善左衛門ヨリ藏太左衛門承申候間、為見合記置候、

一一三二八

一 町御奉行岡田佐太郎様御方ニテ役人共申候ハ、相返候
印鑑之内船奉行名之文字印形ニ懸リ候モ有之候、諸船
頭へ船奉行ヨリ手形相渡候節、名之文字印形ニ懸リ候
モ有之候ハ、於下田船被改候節、印形見ニクキナト、
申、難受付事モ可有之候間、印形字不掛様有之可然由
為申旨御留守居申出候間、右之段御船奉行江可申渡旨、
江戸ヨリ申来候、

但、御船奉行イツレモ名書有之候印鑑印形等宜候ヲ
一枚差出候ニ付、相残印鑑十三枚三包相返候、

宝永五年亥三月(四年カ)

一一三二九

一 浦賀奉行御代合ニ付、御船奉行印鑑被差遣管候間、印
判差出候様、御勝手方御用人ヨリ被仰渡、

安永三年午三月十七日

一一三三〇(の1)

正徳元年卯

一下田奉行御代合ニ付、御船奉行中印鑑相調被差上置候、
然処ニ、其砌追々江戸行船仕出有之候ニ付而御尋申上
候ハ、右印鑑イマタ不被差上内ニテモ此中之通我々
ヨリ江戸往来相付可申哉之旨、蒲生十郎兵衛殿ヲ以御
尋申上候処、十郎兵衛殿ヨリ承候者、此段者申出ニ及
間敷候、弥此中之通先相調可差上由、卯四月九日海江
田十郎右衛門承候事、

(一一三〇の2)

一 浦賀御奉行へ被差出置候御留守居並御船奉行印鑑、此
節 御隠居御家督ニ付 太守様御名ニ被相改被差出置
候間、先例之通相調差出候様可申渡候、

文化六年巳七月

(島津久泰)
將監
取次
島津藤次郎

浦賀御番所

一一三三二(の1)

一江戸大廻船往来共、武具馬具・鉛・錫積登^⑨候儀、

公義御禁制之段者兼而申渡置候、硫黄之儀モ御法度ニ候、早駄船ニモ右品々積登セ候儀御禁止之事情間、自

然御番所ニテ被改出候得者御難題相成事候条、奉得其意、兼而積入申間敷候、此旨末々迄堅相守候様、支配中へ可被申渡候也、

享保二酉正月十七日

御勝手方印

一一三三一(の2)

(行間朱書)
御留守居張紙返答

一本文錫・鉛・硫黄之儀、不限多少、武具同前之首尾ニテ通船有之事ニ候、

一一三三二

一船積遠慮^⑩

石手洗鉢 砂利 湯風呂 大鼓 鼓 笛 琴 三味線

碁盤^⑪ 将碁盤^⑫ 双六盤 鳥籠類 土付之芝

合十二色、

右品々遠慮被仰渡候、

(行間朱書)
「右同張紙
一本文之品上下共積登候儀不苦候、

但、前々ハ本文之品遠慮被仰付置候へ共、近年者
武器ノ外不苦候、」

一船積不苦物之覚

炉 七輪 茶臼 ノホリ カフト ヒナ 菖蒲刀

ハマ弓 数寄屋道具 石臼

右之通、表立候而モ不苦候、

(行間朱書)
「右同張紙
本文之通、船積不苦候、」

右之通、享保六寅六月公義被仰渡候由ニテ、将監殿御書附ヲ以被仰渡候、帳留有之、

申二月八日

御船奉行

江戸御留守居衆

一一三三三(の1)

(朱書)
「〇イ」

一江戸へ大廻船ヨリ武具馬具等差越候儀ニ付而者、別紙写之通先年被仰渡置、仰渡之趣ニテハ、武具馬具等ハ

積登セ之儀早駄ニモ不相成筋ニ相見得候へハ、江戸ヨ

^①乘

リ御国元へ武具馬具等差越候人者其訳申出、御切手ニ

被召載、浦賀御関所御改有之由候へトモ、右之儀ニ付、

当座へ被仰渡置^①儀無御座、御国元ヨリ江戸へ武具馬

具其外御停止之品差遣候節之儀、猶又何分不相知候ニ

付、何様之首尾ニテ差遣事共ニテ候哉被承合、其趣可

被申越候、為見合先年被仰渡置候別紙写差越候、被仰

渡候モ最早年数久敷罷成儀ニ候得者、相洩候品モ有之

候ハ、其段委ク可被申越候、以上、

右者、江戸御用之武具馬具其外御停止之品被差越儀モ

有之候節、何様之首尾ニテ可被申越哉、右之趣其元へ

問合申越候様ニト二階堂部ヨリ承候付、此段申越候間、

被承合委曲可被申越候、以上、

申二月八日

御船奉行

堀孫太夫

江戸御留守居衆

^①朱書

○追啓、長持並唐物之類江戸へ積登候儀モ御禁制之由

候へ共、窮而不相知候ニ付、是又被承合、何分可被

申越候、

(二二三の二)

右へ張紙ニテ

^①朱書

○一本文、通、武具馬具江戸ヨリ御国元へ被差下候節

ハ御留守居首尾ニテ御切手浦御奉行所江申出、押

切ウラ書印有之、浦賀御番所通船被仰付儀ニ候、

^①朱書

○一武具馬具御国元ヨリ江戸へ被差登候儀者、武器之

品委ク相記、船頭水主幾人乗之船ヨリ被積登候趣

江戸及御問合、御留守居へ被仰渡候上、前条同断

之首尾ニ而浦賀御奉行所押切印形申受、右切手御

国元へ被差下、積登候船頭ヨリ於浦賀御番所へ御

切手差出通船有之事ニ候、尤、最初被申出候武具

馬具^①員数並人数共ニ御切手相濟候已後増減等有

之候而者曾而不相成御法ニ候、

^①朱書

○一本文、唐物モ武具之外ハ雜物ニ準シ通船相成候、

一長持積船不苦候、

右張紙之通、江戸御留守居ヨリ被申越候、為見合記置候、

(一三三三の三)

前文之趣大坂御留守居江及問合候処、返答左之通、

一 武具馬具爰許ヨリ江戸へ差廻候節者如何致事候哉之旨、

享保年中之仰渡写相添被申越趣致承知相札候処、江戸

ニテ浦賀奉行衆方へ申出御証文ヲ以不積廻候ハ、爰元

ニテ御免者無之事之由、廻船年寄方ヨリ薩摩屋仁兵衛

承合申出候、且又御出入太刀屋方へ相札候処、早駄船

ヨリ相廻候節モ誠ニ隱蜜ニテ江戸何職人何町方江古金

入又者古着入ナト、致銘書送状ニモ其通相認遣候、陸

路差遣候砌モ同様之致方ニテ御座候由申出候、右通候

へハ御用之道具杯爰元ヨリ差遣筋ニ者難致候、此段御

返答申越候、以上、

申三月七日

大坂御留守居

藥丸猪右衛門

堀孫太夫殿

一三三四

一 浦賀押切左之通、

○割印 押切

松平豊後守手船積下申武具之事、

筥包箱 一箇

内弓 印三拾挺入

頭書一口 但箇數一箇内弓三十張

右者、薩摩国ヨリ江戸迄為積下申候、浦賀御番所無相

違被成御通可被下候、自今以後右之武具付出入之儀モ

御座候ハ、私申訳可仕候、為後日仍如件、

寛政十一年未八月四日 松平豊後守内 西郷八郎次 印

相模国浦賀

御番所

御当番衆中

表書之通改於無相違者可被通者也、

秋元隼人手力

佐々倉安左衛門 印

一江戸廻船便上下御用物之内浦賀御番所手形ニ相成候品、是迄下り手形者爰元御船奉行、上り手形者江戸御留守居ヨリ差出、押切相済来候、右ニ付、爰元ヨリ被差越候手形自然書損等有之候節者、往返ニモ相掛、御差支ニモ可相成事候間、以来押切御印形相成程之品物者、浦賀通船上下共江戸御留守居手形ヲ以押切相済御国元江被差越候方、御役所向御差支有之候間敷哉之旨、浦賀御奉行林藤五郎殿御方へ被仰込候処、於御役所何ソ御差支無之様、右様之節者、以来通船上下共御留守居ヨリ手形差出候ハ、押切可相済候間、其筋ニ御取計可然旨、御答向有之由候付、此已後押切ニ相成候品物爰元ヨリ被差越候節者、品員數・船頭名前・船頭水主何人乗之訳及御問合候ハ、御留守居名前ヲ以手形相調押切申受爰元へ被差越方可宜旨、此節江戸ヨリ申来候付、以来其通被仰付候条、得其意、無間違様可被致首尾候、此旨御差図ニ而候、以上、

天明元年丑六月十二日

横山権右衛門

天明元年丑

一御部屋御造立並大奥御造替方御用材木、当春ヨリ来年中ニ者太分被差登答候、地船迄ニテ積船及不足候ハ、他国船借入可差登之、御受江戸へカリ船ヲ以被差登候先例見当不申候、浦賀御関所差障有無之儀、且又往来認様相知不申候付、左之通御問合申越候、

一浦賀往来草案別紙遣候、其元吟味ヲ以案文可被差下候、一船頭水手乗組御定有無之訳、去ル申年江戸御留守居有川勇馬詰居之節聞合申越候処、張紙之通ニテ船之依大小勝手次第之由候、他国借船之儀モ同様之答候へ共、借船者訳モ相替候ニ付、今一往聞合可有之哉、他国カリ船之儀ハ、仮令者廿反帆之船ニ者船頭水手十八人又者十五人、船之乗組相並不申候、

一右通、借船ニテ被差越候而モ浦賀差支有無之儀、

一他国カリ船ニ御国者為案内乗セ付候儀、

一 御国地船へ他国者雇入案内右同断、

右二行差支無之候付ハ往来者同様相認可然哉之事、

右之通候間、其元ニテ御吟味被成、浦賀御奉行御役所

ニテ差支有無之儀御聞合、往来案其外委數可被申越候、

末略、

天明五年(元年カ)丑八月廿九日 御船奉行

一 二三七(の1)

張紙本文ニ付
一 御当地廻船反帆積負等御定有之候哉、

但、船頭水手之儀者応反帆乗セ付候御定有之候哉、

又者船之依大小勝手次第乗セ付候哉之事、

安永五年申正月 御名内 東郷喜三次

(二三七の2)

右ニ張紙

御当地江廻船並米石積高等之儀御定無之候、勝手次第

候事、

但、船頭水手之儀モ何人乗組御定無之候、船之依大

小又者依遠近勝手次第乗組候事、

右御問合ニ付及御答候、以上、

申二月

御船手役
向井将監

(二三七の3)

右者、去ル申年承合候儀申越候節、右之通御返答承置

候^①付、乗組之儀者不差支筋ニ相見へ候共、他国借船

之儀差支有無之儀申越候^②付、為御見合此段申越候、

以上、

丑八月

御船奉行

一 二三八(の1)

一 松平薩摩守江戸屋敷用石物何国領借船一艘、船頭水手

十何人外、領内才領幾人、案内何人領内召乗セ候ハ、

此所江書入可申候、江戸へ差遣申候、御禁制宗旨之者

ニテ無御座候、尤、船頭水手之儀者本国証文見届候条、

無異儀御通可被下候、以上、

年号月日

御名内
何某 印

相模国浦賀御関所

(朱書)
「宛書之儀者御案文ヲ以此通被仰渡
置以前ヨリ此宛書ニテ済来申候」

(一三三八の2)

〔朱書〕
「御当番衆中 此通御認可被成候、」

張紙

本文御問合之趣相達、不苦答存候得共、猶又御留守居附役柴源五右衛門浦賀御奉行久世斧三郎殿御方江差越候節、御借船ニテ諸物江戸へ被差越候儀モ可有之候、

左候ハ、御手船同様相心得申候、乍然浦賀通船御差障候儀、且又御借船乗組等之儀共為相尋、尤、御カリ船ニテ被差越候儀是又無之、切手之儀モ別紙案文之通被相認心得之由、是又為相尋候処、都而不苦候、切手認様案文之通ニテ宜候、宛書之儀者外々様ニテモ御当番衆中ト有之事之由ニテ彼御方ヨリ付札有之、其通被相認候様、斧三郎殿用人平野林次ヨリ申聞候段、源五右衛門申出候、依之、被差越候案文相添、此旨及御答候、以上、

丑十月廿四日

矢野清右衛門

御船奉行衆

(一三三八の3)

一諸船浦賀切手左之通

松平豊後守殿船廿三人乗

上〇此切手下可被戻也

文化十年酉四月五日 取次宿万之助

令条記卷第十九

一三三九

(令条記卷十九 二四二号)

一江戸ヨリ出舟夜中ニハ不可通之、入舟ハ夜分タリトイフトモ可通事、

一往還之輩、番所之前ニテ笠・頭巾ヲヌクヘシ、乗物ハ戸ヲヒラキ可相通事、

一女上下共ニ槌成証文有之ト云共一切不可通事、

一鉄砲二三挺迄者相改可通之、夫ヨリ数ヲホキ時者得差
図可通之、其外之武器道具可為同前事、

一人忍入ヘキ程ノウツハ物ハ遂穿鑿、於無異儀者可通之、ソレヨリチイサキ器物改ニ及ヘカラス、万一不審之子細アラハ其舟ヲ留置急度可申付事、

附、囚人又者手負タルモノ並死人等、慥成証文無之者不可通事、

右、此旨可相守者也、仍執達如件、

延宝四年六月日

一一四〇

(令条記卷十九 二四三号)

条々

一 従先年如被仰付浦々条目之通諸事可被申付事、

一 ノホリ船改之儀、小筒之鉄砲五十挺・弓五十張・矢千本・鏝百本・具足五十領迄者諸大名家来之手形ニ其方

裏判ヲ以可被相通之、五十日玉ヨリ上之大筒者此方江

相伺可被通之、右員数ヨリ多時者留置可被伺之事、

附、塩硝・鉛太分々々於積来者可有注進事、

一米・大豆五十俵迄者問屋手形ヲ以可被通之、五十俵有

余者遂穿鑿、問屋手形ニ以其方裏判可相通事、

附、米・大豆二十俵迄者手形ナシニ通来ト云トモ、

舟之合恰ニ随テ五十俵迄者可通之、其外雜穀等是又

可為同前事、

一 海土之外者女人一切不可通之、(手負カ)手形或幼少之子或カト

ハカシモノ、俄ソリノ坊主、惣而常之水手ニ相替、不

審成輩於乘来者可改之、

但、前方断在之テ慥成モノニライテハ請負手形ニ以

其方裏判可被相通事、

一 前広断無之、初而乘来船不可通之、常々往来之船・獺

舟等者前々ノコトクタルヘキ事、

附、ノホリ荷物諸色之員数老年切ニ書付可被差上事、

一 手形文言跡々之通タルヘシ、ノホリ荷物長櫃箱等ニ至

迄或封ヲ付或鎖ヲヲロシ①線目禄ニ書載候分於無相違者其

儘可通之、疑敷荷物者封ヲ切、鎖ヲアケ相改可通事、

一 入船タリトイフトモ舟之造様替リ不審成儀於有之者可

被改、

但、先達而断有之者不可及改事、

右条々相守、此旨可被申付者也、

延宝四年三月十五日

(同部正能)
(播磨)
(土屋敷)
(但馬)

(久世広之)
大和

三崎奉行也
川田六郎左衛門殿

大坂御番所

一一四一

宝曆五年亥十二月

一 町奉行 御船奉行 山奉行へ

一 御領内ヨリ大坂へ為差登候諸商買荷物船御改之儀、今般大坂町御奉行於^{①御}役所仰渡有之、改方之儀左ニ段々申上候、

一 不依何色他国へ積出候荷物者御船手並諸所手形所へ申出、御法度之品ニテ無之候へ者通手形申渡、於津口番所相改差通、手形者津口番所江留置、追而御船方^{①手}へ差出^{②候}、由候、此儀者有来通可致候、御改ニ付而者案文之通別達而手形可相渡候、

一 此節ヨリ大坂御改之儀ハ薩州役人之印鑑ヲ御役所へ差出置、送状切手ニ其印ヲ押、差登、印鑑ニ引合御改有之筈ニ被仰渡候、然者改之津口番人印鑑ヲ差出置筈候へトモ、番人ヲ時々交代勤之儀ニ候へハ、代合毎ニ印鑑差出候様ニ者難調事候処、津口番所印鑑差出候様ニ申出、其通被仰付、別紙印鑑之案紙相渡候ニ付、番所印入念押調差出候様、御船奉行ヨリ申渡、印鑑取揃可差出候、

一 御改之儀、第一唐物締方之儀ニテ可有之候条、通手形申出候節、珍敷品者時々可得差戻候、

一 大坂御改之儀、印鑑封印有之荷物者内迄之改ニ不及、封印無之候へハ内迄モ御改有之筈候、俵類・束物・砂糖之類者一々致封印候様ニハ難成筈候事^{①候}、封印ニ及間敷候、改方之儀者随分入念、櫃箱類其外荷物堅固ニ有之、入付候品外ヨリ不相知荷物者一々内迄相改、於無相違者致封印可差通候、自然改方不相届、於大坂御改之節、荷物之内紛敷品等入付有之、又者品員数過不足有之時者御難題ニモ相成事候条、封印之品者一涯可

入念、尤、於津口番所改之役々可為越度候条、緩セ之儀無之様、志布志・内之浦・脇元津口番所へ御船奉行ヨリ堅可申渡候、尤、自他国船其他国出之節者右三ヶ所へ船ヲ着、改ニ可逢旨、船頭江堅可申付由、御規帳ニモ可載置候間、猶又右之趣可申渡候、

一 旅船ヨリ差登候荷物並旅人買切ニテ積出候荷物モ同前ニ可致首尾候、其内本国江積帰、近国瀬戸内ニテ大坂江不差越船モ有之候得共、不図大坂へ参候儀モ難計候間、何方江差越候迎モ御領内出船之船者大坂江差越筋ニ手形可相渡候、尤、御領内大坂迄不差越、中途壳ニテ罷帰候船者帰帆之節於津口右手形取揚、追而御船手へ可差出候、旅船者不及其儀候、

一 大坂江差越管候荷物、自然中途ニテ相払候ハ、其所買主証文ヲ取、大坂江持越、御改之節可差出候、
一 此節御改ニ付、大坂迄荷主・船頭持登候手形認様案文相渡候間、御船奉行得其意、諸所手形所、志布志・内之浦・脇元津口番所江モ可相渡置候、

一 椎皮・楊梅皮・桂心・明樵其外品々、御規帳ニモ被載

置、山奉行支配ニテ通手形相渡來候品モ、運上駄者今迄之通山奉行方ヨリ上納申渡、御船奉行へ問合、都而前条之格ヲ以、御船奉行ヨリ通手形津口番所奥書ヲ以可差通候、

一 諸材木 一 樵 一 松大束 一 櫓木 一 檜楫 一 油竿

一 杉丸太 一 櫓腕

右品々者山奉行並附通檢者ヨリ手形相改、津口差通之由候、右類者荷物ニテハ無之候故、大坂御改ハ無之管候事、右有來通申付候、尤、右之段者大坂へモ直ニ申越置候、自然右積船ヨリ外之品差登候節モ是又前条可為同断、

右之通申付候条、得其意、諸所手形所・三口之津口番所江御船奉行ヨリ委ク申渡、若疑敷存事モ候ハ、幾度モ得差図、間違無之様可致首尾候、右ニ付而者旅船藏役人江者町奉行・諸所手形所ヨリ不洩様時々可被申渡候、右、可被申渡候、

宝曆五年亥十二月

(謹聞入中)
彈正

一一四二

宝曆五年亥九月

一諸船上方江品物積上候節、唐物者勿論其外不依何色送状迦之品纔迎モ不積上様ニ可申渡旨、先月廿日委曲申渡置候、左候而、送状之積荷之内何方浦ニ而モ売払候ハ、買主ヨリ品立ヲ以証文取置、大坂着船之節從公儀船御改有之候ハ、右証文可差出候、船御改之儀ニ付而者追而何分可申渡候条、御改之節不差支様可致覚悟旨可申渡也、

右之通申渡置、猶又無間違様通手形申付、時々可申渡候、町方諸所手形所江者町奉行、浦方並船持有之島々

江者御船奉行ヨリ申渡候様可申渡候、

九月

(島津久光) 凶書

堀堀右衛門

一一四三

久見崎御船手旧記之内

一諸商売荷物大坂江積上候節者当座並諸所手形所ヨリ津

口通印鑑相渡事候処、無印鑑ニテ夏井口差通候、已後

於他領志布志之船頭弥左衛門船江積入、大坂江差上セ

候処ニ、印鑑無之、公義御改不相濟、問屋方江格護申

渡置候段、大坂御留守居ヨリ被申渡、得御差図候処、

此節迄者不及荷物御取揚、津口銀重上納申付、津口通

印鑑相渡候様被仰渡候、向後右体之致方有之モノハ其

品御取揚、相当之科料ヲ以可被仰付旨、未七月廿二日

迫水善左衛門取次御証文ヲ以被仰渡候ニ付、此段申渡

候、以上、

宝曆十三年未七月廿六日 御船手

久見崎御船手

一一四四

一寛政五年丑、異国方御用ニ付 公義御役人衆廻浦被仰

渡、浦方御答書シラへ之内、

一御領内ヨリ大坂江為積登候諸商買荷物船御改之儀、宝

曆五年大坂町御奉行於御役所被仰渡趣有之、俵物・束

物共ニ大坂江差登候節、自他国船共ニ印鑑相付差越事

ニテ、荷主ヨリ何荷物幾ツ大坂何屋何某方江差登候、

若中途ニテ右荷物之内相払候ハ、買主証文ヲ取、於大

坂御定之間屋江相付改ヲ受可申旨、書出ニ次書ヲ以、

右之通相改可差通旨、薩州船方何某ト相認、薩州領何

方津口番所ト宛書ニテ御船奉行ヨリ脇元・内之浦・志

布志外津口三ヶ所江^{⑨同}差遣、於津口番所相改、相違無

之旨、薩州領何方津口番所印並番人兩人印形ニテ差通

事候、尤、諸所手形所ヨリ差通候節者郷土年寄名前ニ

テ薩州船方何カシト相認候而右同様之首尾ニテ差通候

事、上下略ス、

丑三月

掛御船奉行

⑨御客書
調掛衆

一二四五

一文化八年未五月、船頭京泊之佐六・船間嶋之武市、讚

州觀音寺之文四郎船ニテ川内表売人共荷物御仕送方荷

物積入^{⑩合}ニテ大坂江積登候処、右商荷物之印鑑御船手江

不申出、脇元津口番所江申出、直ニ彼方ヨリ印鑑差出

候ニ付、大坂御番所江難差出^(マ)而者問屋共ヨリ左之通申

出候、留守居ヨリ申上、御船奉行江吟味被仰渡、

乍恐口上

御国川内荷主白和町之紋兵衛外四人、東郷町之太郎右

衛門外一人、向田町之助太郎外七人、大小路町之徳次

郎外ニ三人、右荷主之者ヨリ綿実・椎茸・紙・古鉄・

木海月・煙草・牛馬皮、右品々、沖船頭京泊之佐六・

船間嶋之武市、讚州觀音寺之文四郎、右船々ヨリ於御

国元口々御手形申受、脇元津口御番所ニテ御改受、積

登申候、然処、先例御手形之儀者荷主ヨリ御船奉行所

江御届申上御次書申受、夫ヨリ津口御番所御改之上御

次書申受積登リ候筈之処、此度之御手形ニ者右御船奉

行所御次書無之、別紙手形方ニ御裏書有之、先格相違

仕候故、御公辺御役所江荷物改ニ御手形差出候而者

旁不都合相成、御面働筋可相成候哉、乍恐奉存候、此

度之儀者荷主・船頭不案内ニテ積登候儀ニ御座候間、

右船々江者心得違無之様相達置候得共、尚又不案内之

荷主・船頭モ有之、追々右通御手形ヲ以積登候而者甚

差支ニ相成候間、別紙先例御手形之写並宝曆年中商売荷物、御公辺御免有之候四十品並当年御免有之候馬尾・同髪、都合四十二品之写奉差上候、右御免品々、先格ニ相違不仕候様、御手形申受積登候様、被^①仰付被下度奉願上候、以上、

未五月十七日

御定問屋カネ番

薩摩屋仁次郎

同年番

太原武左衛門

御手形所

一二四六

印鑑 ^④但、脇元・山川・内之浦・志布志、何モ御番所ニテモ此所御印有、尤、四ヶ所之外御番所者御公辺不用御座候、

覚

一何品何程 ^④「御船手様印

荷主何所之何某

右荷物、此節船頭何所之何某船ヨリ瀬戸内表へ差越候、若大坂江差越候ハ、中途ニテ相払候荷物者其所買主ヨリ証文ヲ取、於大坂御定之間屋江相付御改ヲ可申候間、津口通御手形被仰付可被下候、以上、

右之荷主何某 ^④

何年何月何日

御手形所

「津口御番所印 ^④次印

右之通相改可被差通候、以上、

何年何月何日

薩州領役所之 ^④何

津口御番所

「津口御番所印 ^④次印

右之通相改、相違無御座候、以上、

薩州領何所津口番所 ^④

何年何月何日

何某

—— ^④

一二四七

薩州荷物、宝曆九年御公辺御免有之候荷物左之通、

一黒砂糖 一 生蠟 一 菜種 一 胡麻

一 鬱金 一 桂辛 一 伊豆^④砂 一 柴胡

一 莪朮 一 茯苓 一 紫根 一 松煙

一 楊梅皮 一 海人草 一 明礬 一 硫黃

一 煙草 一 木海月 一 苧 一 芭蕉芋

一 布類 一 綿実 一 紙 一 鯉節

一 貝類 一 玉子 一 牛馬皮 一 牛角

一 鉄 一 焼物類 一 蕎麦 一 小麦

一 椎茸 一 ツグ綱 一 鳥モチ 一 椎実

一 椎皮 一 材木類 一 焚炭 一 松節

合四十品

文化八年未年御免荷物、

一 馬尾 一 馬髮

合四十二品

右ニ相添、御留守居ヨリ左之通、

先達ヨリ川内表商売船手形積荷津口御改御法通無之、

荷主差出候津口番所改有之候迄ニテ差越、外浦売荷者

御船奉行次書ヲ以、其上津口番所改次書有之事情処、

御船奉行次書無之、津口改次書迄ニテ差越候ニ付、公

刃改ヲ受候儀不相調、其儘差返候而者荷主共之可及迷

惑候付、御屋敷江取入、御物仕登之筋ヲ以為売払候得

者、御改無之候而相濟候間、其通及度々取計、新御仕

送方試荷モ有之候付、御法通ニテ差越候様ニ先達而致

問合置、若御仕送方ニテ難取扱候ハ、御船奉行へ右之

段掛合有之候様申越置候得共、今以無其儀、度々差越

於問屋モ取計兼候趣別紙之通申出候間、御吟味之上御

法通手形申受差越候様、御船奉行江被仰渡度、此段申

越候、以上、

未五月十七日

田中藤右衛門

御勝手方
御用人衆

大坂川内御定

二二四八

条々

一大坂中川筋ニライテ出入御船不自由成様ニ船ヲカケ置

へカラス、

一ミオ木江船ヲツナクヘカラサル事、

一水除ノワクカセ木ニ船不可維事、

右之通於相背者可為曲事者也、

慶安元年五月七日

此札兩川口ニ立、鈴木九郎三郎江相渡ス、

一二四九

掟

- 一 過書船伏見ヨリ夜船ニテ下リ候時、大坂ニテ夜明候而船ヲ着、荷物之センサクヲイタシ、舟ヨリ可移事、
- 一 船中ニ不審成モノ有之者カ子共相改、大坂八軒屋其外擱置ヘシ、取遁スニヲイテハ舟主其者ヲ可尋出事、
- 一 右可相守此旨、若令違背、夜中ニ船ヲ着、盗人於有之者、其船之カ子籠舎可申付者也、

慶安二年十二月二日

一二五〇(の1)

定

- 一 上荷舟、從一ノ洲大坂中船着迄、米壹斗壹升、
- 一 傳法並木津川之ヨシハツレヨリ大坂中船着迄、米八升、

一 木津川之番所並小廻ヨリ大坂中船着迄、米六升、

一 土佐堀・江戸堀・京町堀ヨリ上堀川中、米四升五合、

一 京橋迄米三升五合、天満中米三升五合、北濱中三升、

一 七郎右衛門堀・西国橋・筑前橋ヨリ上堀川中、米四升、

一 京橋迄米三升五合、天満中米三升五合、北濱中米三升、

一 センタンノ木橋上下ヨリ上堀川中、米三升、

一 天満中米三升、京橋迄米四升、

一 上堀川中ヨリ天満中、米三升、

一 京橋迄米三升五合、

一 長崎川中ヨリ北濱中、米四升、

一 上堀川中米四升五合、天満中米五升、京橋迄六升、土

佐堀中四升、

一 大坂中ヨリ堺之津迄、銀三匁、

①尾ヶ 崎迄二匁、

一 老艘之荷物所々ニ有之共荷主次第積可申事、

一 川口並大坂中ニヲイテ一番船二番船之差別無、荷主相

対次第タルヘキ事、

一 田舎船川口へ入候刻、大風吹候時無油断上荷船可出事、

一 船破損之時者無油断上荷船ヲ出シ、人ヲタスケ並荷物

ヲ取上荷主江可相渡事、

一同破損之荷物隠取間敷事、

右、上荷船運賃直段之先規相定所也、可相守此旨者也、

慶安元年五月七日

此以前之札者寛永四年正月十一日之日附ニテ候、右之

札、傳法・長崎・難波橋ニ立也、

(二五〇の二)

一 上荷船茶船御仕置之事、

一 上荷船茶船運賃其外万事御制札之旨令違背者可為或籠

舎或過料之事、

一 川口ニライテ破損船有之時者早々上荷茶船ヲ出シ、船

頭ニ相對イタシ精ヲ入荷物ヲ取揚ヘシ、

但、流荷物者船頭ニ不及断取揚ケ、傳法・三軒家・

難波・木津・野田・福嶋可為同前、

附、風波之時、田舎船上荷茶船ヲ借り候刻、無異儀

荷物ヲ取揚、其後運賃定之通可受取事、

一 取揚之荷物右之通年寄屋敷之前ニ置、船頭並其所之年

寄立合、流荷物・浮荷物之逐吟味、其上御制札之通可

仕事、

一 当地町中並傳法・四貫嶋・三軒家・難波・木津・野田・

福嶋其外、何方之船ニ而モ荷物盜取候ニライテハ、後

日ニ聞候共、如御制札、其者ハ死罪、其所者為科料家

毎ニ錢百文ツ、可遣之事、

一 上荷茶船之者、組中ニテ荷物盜取候者見付聞付次第申

出ヘシ、於隱置之者家一軒ヨリ錢百文ツ、可取之、中

間ヨリ申出ニライテハ其科人計御制札之通申付、組中

科錢可免事、

附、上荷船茶船之年寄惣代、組中之船者不及申、ワ

キ①ヨリ出シ船盜取候共、見付聞付次第急度可申

来事、

一 夜中ニ上荷茶船ヲカリ、惡事仕者於有之者、船主可為

同罪事、

一 上荷茶船運賃ヲタハカリ、剩他之船ヲ借候時妨之儀曲

事タルヘシ、カリ候者相對次第可仕事、

一 三之標澤ヨリ内者川之内タルヘキ事、

一 火事出来之刻、船ニテ荷物ヲ廻候モノ先々之町ニテ見

合次第留置、荷物致穿鑿可相渡ヨシ、先年町中江申付候間、其心得可仕、並火事場ニ親類近付有之而船ニテ見廻ニ越、荷物ヲ退候者於有之者、火事場之近辺船ヲ掛置、火事鎮リ荷主差図次第可相届事、

附、上荷船劍先船其外之小船共、火事場之者頼候ハ、荷物ヲ積走、又火事場之近辺ニ懸置、火事鎮リ候而荷主^(差)次図次第可相届事、

右条々、堅固可相守此旨、惣而悪事故ニライテハ、如御制札、其所其組之者ハ不及申、他所ヨリ成共訴人出ヘシ、褒美ヲ出ヘシ、其上科人者其時^④ノ様子ニ依テ申付ヘシ、

此趣寛永十四年ニ申渡、上荷茶船之年寄惣代並傳法・三軒家・難波・木津・野田・福嶋之庄屋年寄承届候由、判形ヲ取置トイヘトモ、弥失念為仕間敷書出者也、

慶安元年子六月五日

一一五

一 薩州船天氣相又者大坂川口寄洲ニ付、汐時ニ随ヒ当浦迄繫候儀有之候処、積荷産物之儀者大坂表ニテ荷改モ有之候ニ付、相對買請等難成候段、郷中江申渡候処、尚又大坂町奉行ヨリ^④大坂ヨリ積廻候共荷物瀕取荷揚等不致候様申渡候間、旁郷中買請候儀者勿論、売物代申受候儀等致間敷申渡置候ヘ共、産物之儀者当地之者不案内故、若心得違当浦滞在中積合之品又者水手所持之品タリ共買請又者売物代等ニ相望候ハ、早速当御役所江可申出旨、乗組之者共江申渡置有之候様、且、当浦石錢取立取締之為、時々依荷改無之、船中モ組之者見廻リ候儀モ有之候間、其段心得サセ被置候様御受申達候、右之通、堺御奉行矢部駿河守殿ヨリ被仰渡候段申来候条、御船々並御領國中船持諸船頭江不洩様可申渡旨、御船奉行江可申渡候、

文化三年寅十二月廿五日

(新船久命)
内藏

島津家歴代制度卷之二拾二 慶長
寛政

進貢接貢

進貢接貢

一二五二(の1)

一家久公ヨリ琉球へ御人数被差遣、中山王降参ニ付其段
権現様 台徳院様へ被 仰上候処、則被遊 御頂戴候
御内書、
琉球ノ儀、早速属平均ノ由注進候、手柄ノ段被感思召
候、即彼国進之候条、弥仕置等可被申付候也、

慶長十四年
七月七日

家康公
御印

(家久)
薩摩少将殿へ

(一二五二の2)

至琉球差越人数、不経日教輩討捕之、其上国王就降参
近日至其国可為着岸ノ旨、尤、無双之仕合候、猶本田
佐渡守可申候也、

七月五日 秀忠公
御印

(義弘)
羽柴兵庫入道殿へ

一二五三

一 琉球唐へ通融ノ儀、御詫ノ趣山口駿河守様被仰越候御
状、

一 書令啓上候、爰元相替儀無御座候、 上様御機嫌能
駿府被成御下着候、弥以息災ノ儀候、御心易可被思召
候、先度御在京ノ砌モ琉球ヨリ唐へ通用ノ儀無御油断
御才覚可被成旨御詫候キ、琉球国ヨリ唐へノ御使者可
為帰京候条、(朝)其口上之趣被△聞召届、唐へ重テ様子
被仰渡御尤存候、猶於趣ハ御年寄衆迄申上候条可被得
御意候、将又小屏風一双進上申候、(表)寸志計候、猶口

上申含候、恐惶謹言、

慶長十六
五月廿六日

山口駿河守
直友判

奥州様

参人々御中

一二五四

一琉球ヨリ唐へ使者差渡候段被仰上候付、台徳院様ヨ

リ御内書、

從琉球至于大明差遣使節処、少々先船令帰朝、彼使者
相通北京当夏ノ時分可為着岸ノ旨様子聞届候、遠路入
念申越候段令祝着候、就中花砂糖百斤桶二・白砂糖百
斤桶二・焼酎ノ壺^{②ケ}到来、喜覚候、猶本多佐渡守可申
候也、謹言、

慶長十九

正月六日

秀忠公

御判

薩摩少将殿

一二五五

一大明兵乱ニ付、琉球ヨリ糸商買ノ儀、御老中様へ被得

御差図候処、被仰渡候御内書、

琉球へ從大明糸商買ノ事、今度彼国兵乱ニ付如何可有
之ト被存ノ趣承届候、琉球ノ儀ハ如有来令売買候様、
尤存候、恐惶謹言、

正保三年

六月十一日

阿部对馬守

重次

阿部豊後守

忠秋

松平伊豆守

信綱

松平薩摩守殿
(光久)

一二五六

一琉球八重山島番人被引取候儀、且又琉球国王継目ノ儀、

心次第可被申付旨被仰渡候事ニ付、御奉書、

御使札忝致拜披候、然ハ琉球八重山島へ從先年張番ノ
者被渡置候へトモ、遠島故今度被達^{①上}公聞候ノ処、番

ノ者共引取可申候旨被 仰出、並琉球国王継目ノ儀、
御手前心次第可被申付由、上意ノ趣忝思召候旨、御

紙面ノ通承届候、因茲為御礼ノ使ハ被指上ノ由得其意
候故、猶期来音ノ可得御意候、恐惶謹言、
①在候

慶安元

九月二日

堀田加賀守
(正盛)

松平薩摩守様
貴報

二二五七

御札令拜見候、琉球八重山島ニ從先年被差置候張番ノ
者被引取候儀並琉球国王継目等ノ事、最前被仰出ノ趣
謹被承届ノ由得其意候、因之被差越使有之、念入候段
及上聴候、猶使者可令演說候、恐惶謹言、
①々

慶長元

九月五日

阿部豊後守
忠秋判

松平伊豆守

信綱判

松平薩摩守殿
貴報

二二五八

一 韃靼国ヨリ唐ヲ攻取、琉球ヘモ冠船差渡候由相聞得、

御国元ヨリ江戸へ被申越、御老中様へ被仰上候処ニ、
仰渡ノ旨有之候、右ニ付、松平隠岐守様へモ被仰達候
儀共有之候次第、

覚

先年韃靼順治皇帝ヨリ琉球国へ使者船差渡ノ由相聞へ
候刻、於江戸阿部对馬守殿へ先々被得御内意候、御使
新納右衛門ニテ御座候、其時分对馬守殿被仰聞候ハ、
琉球ノ儀、從前々大隅守殿へ御拝領ノ事候故、万事
御公義ヨリ御差図ハ無之候、多分此度モ可為其分候、
乍然琉球ハ異国ト乍申大隅守殿下知ノ儀ニ候時ハ日本
同前ニ被思召上候、就夫琉球国へ悪キ事出来候ハ、日
本ノ瑕ニ罷成候間、大隅守被申付様ハ何分候哉ト御尋
可有之候条、内々大隅守殿何分ニ被仰候哉、定テ右衛
門可承候、可被聞召旨被仰聞候、左様ノ儀ニ兎角不承
由申上候テハ御油断ニ可罷成ト存、俄ニ分別仕申上候
様子ハ、從上古琉球国ノ儀ハ唐国へ相隨致通融、被免
王号、諸事自由ヲ相叶候処、此度韃靼人打入、唐国ヲ
過半取申由候、彼韃靼順治皇帝ニ相隨、從琉球祝儀ノ

使者ヲ以差渡候ハ、後年ニ自然唐国ノ儀⑨代ニ罷成候刻

面目有間敷候、又今体ニテ往々順治ノ代ニ相治候ハ、

今度致無沙汰儀可惡候、一途ニ返詞申儀難成候間、兼

双方可然存候由、内々我々へモ被申聞候通申候処、对

馬守殿へ尤ニ被思召候、乍去双方へ能様ニ可被仰様子

ハ如何ト御尋候間、当分ハ兵乱ニ付海上賊船多候テ不

自由ニ候、賊船モ治候時分ニ使者船ヲ差渡可申候ト先

以此節可申述候、左候ハ、其間ニ唐ノ兵乱相治、何方

ニ成共代モ可片付候、兵乱ノ間迄⑩は海賊絶間敷候間、右

ノ分ニ可申述ト被存由申上候へハ、其段可然被思召候、

其儀ハ右ノ大体大隅守殿御内存書付ヲ以可被仰上候、

讚岐守殿へ先々御内談被成可被仰上由候、此旨則 殿

様ニモ申上候処、御内証モ左様ニ被思召候条、早々可

被仰入由候間、以書付被仰付、又对馬守殿へ右衛門致

持参候、其後五日御座候テ御返詞ニ、琉球ノ儀大隅守

心次第可申付旨御説ノ由被仰出候事、

一右之通琉球へ被仰渡候、三司官ヨリ返事ニモ定テ無相

違可被申候へトモ、使者ノ謝老合点不申候哉、祝儀ノ

使者寅之年迄ハ可相待候、夫過候ハ、又々韃靼方ヨリ
使船可差渡旨致約諾、唐へ罷帰由候事、

一其以後寅之年ノ約束モ相違仕候ニ付、重テ謝老琉球へ

罷渡、順治皇帝御代祝ノ使者同心仕、唐へ罷渡由候、

此一巻江戸へ不被仰上、於御国御返詞御座候、依テ其

近年国頭王子江戸へ参上ノ時分⑪以駭カ御書付酒并讚岐守殿被

得御内意、御老中へ被仰入置候、其時分御書物其御方

留帳ニモ可有之候へトモ、此度モ書写差上候事、

一右ノ首尾ヲ以、順治皇帝冠船琉球へ可被渡由候間、於

福州大船ヲ造調候、琉球ヨリノ使者モ其船ニテ可被送

渡由、当年長崎へ参候船頭⑫申由、菓丸形部⑬刑左衛門長崎

ヨリ申越候、又琉球ニテハ使者ノ為迎船当春唐へ船ヲ

遣候、其船兵船稠敷候福州ノ浜口⑭漢カヨリ遇獵船罷帰候、

其伝ニモ右ノ風説無相違候由候、左候へハ早々御公義

御内証被仰入置、肝要ニ御座候事、

一最前ヨリ琉球国韃靼人ニ相隨候儀 御公義ニモ御残多

被思召上様子ニ承及候へトモ、最早祝儀ノ使者差越候

上ハ請冠船ノ所ハ不及是非候、自然琉球ノ位三司官以

下官人ノ分韃靼人ノ位官ニ申付、首ノナリ等迄右ノ仕合ニ候ハ、如何可有御座候哉、於其儀ハ右如申候日本

ノ瑕ニモ罷成、殿様マテ御外聞ニモ可惡候間、琉球へ急度然々之人被差渡、三司官談合ヲ以、此度モ此中唐

ヨリ相談渡候体ニ万事御座候ハ、冠・位官等モ可被請候、万一韃靼人ノ為体被申越候ハ、罷成候間敷、

達テ申断、冠船ヲモ追返候カ、又ハ彼使者無合点追返候儀モ不罷成、還テ彼方ヨリ事ヲモ仕出候ハ、討果申

体ニモ可有之哉、是ハ急ニ御用談肝要ノ儀ニ候、度々出合申、琉球国ハ唐へ通融無之候テハ不叶由候へトモ、

御外聞旁日本ノ瑕ニ罷成候ハ、琉球ノ不自由成分ハ堪忍被仕候様ニ可被仰付候、左様ニ成立候トテ韃靼方ヨ

リ琉球へ兵船ヲ差渡候儀有之間敷ト存候、日本ニ相隨此御家ヨリ御下知被遊候段ハ無其隠候処、韃靼ノ使者

参候テ琉球人ノ頭ヲ刺ナト仕候ハ、後年迄御難題ニモ可罷成欺ト爰許ニテハ相談仕候、然共於其御地能々被

成御談合被入御耳、左候テ讚岐守様へ御申分ノ口上書ナト被遊被得御内証、其上ヲ以御老中様へ御披露專一

ニテ御座候、就夫モ冠船参候通ハ早々被仰上尤ニ奉存候事、

明曆元年七月十二日

鎌田源左衛門(政有)

町田勘解由(久則)

新納右衛門(久登)

伊勢兵部(貞昭)

島津因書(久通)

二二五九

熊一書令啓入候、然ハ從長崎藥丸形部左衛門申越候ハ、

当年ノ唐船ニ申来候、於福州大船ヲ作調、琉球ノ冠船可差渡風聞ノ由候、此船便從琉球去々年罷渡候(諸日記ニ

も可乘来物音承候通被申越候、其上從琉球之△使者為より補)迎当春唐へ参候船福州港口ヨリ帰帆仕候者共モ右之通

獵船(之船)頭申由無相違候、乍去風説ニテハ其御地へ申上候儀難成候故、長崎御奉行家老衆迄形部左衛門前ヨリ

御尋被申候様ニト申越候処、如其首尾政所へ御内証申上、唐船へ(船頭)口上書取候テ被差越候、此上ハ可為直説

ト存候間、早々御老中方へ御披露御座候テ專一ニ御座候、就夫韃韃ノ帝王ト琉球国挨拶ノ段ハ従前々被得御内意候趣大底書記、此度中村佐五右衛門罷上候ニ鎌田勘兵衛相加、以兩使申上候口上之通被聞召達、早速被入 御耳尤奉存候、恐惶、

尚々、右ノ冠船ニ付テ琉球へ誰ソ被仰付被差渡候ハ、乍不及申上、誰人ニ可被仰付哉、從其^御地必御指南御座候様ニ被仰上尤ニ存候、

(明曆元年) 七月十三日

政有

久則

久詮

貞昭

久通

島津筑前殿^(久敷)
島津中務殿^(久茂)

人々

一一二六〇

熊令啓入候^先

隱州様御機嫌能可被成御座ト奉存候、

然ハ琉球へ韃韃王使者越候通風説可有之由先日大隅守方申越候、就夫於江戸御老中衆被致披露候、其趣ハ以飛脚 隱州様へ申上由此方へモ申下候、右ノ御返詞在之ニ付、此度琉球へ使者兩人差越候、其趣令口達候条被聞召達御披露頼存候、恐惶、^御

(明曆元年) 九月十三日

政有

久則

久詮

貞昭

久通

遠山三郎左衛門殿

一一二六一(のー)

覚^御

一琉球へ從韃韃使者遣候由、長崎へ適風説在之通、彼地へ召置候物聞ノ者承、御政所へ申出、以通事唐船へ相

尋候処ニ、十四番船ノ船頭福州ニテ右ノ物沙汰在之候、

誠⑦殊為其用迄大船ヲ作候由承候ト申候、彼儀大隅守不承

候テ不叶仕合候故江戸へ申遣候、就其御内証酒井讚岐

守様へ申上、其上ニテ御当番松平伊豆守様へ以島津中

務被致披露候、其以後間候テ大隅守登 城可仕旨八月

廿二日被 仰出候、左候テ讚岐守様御老中御間之御使

被成被承候ハ、琉球国へ韃王ヨリ使者遣由候、人数

大勢遣ニテハ在之間數ト被思召候、若右ノ使者琉球へ

相渡候テ髪(マ、マ)ヲ、韃人ノ衣冠ヲモ着用可仕通申候共、其

分ニ相心得可申候、右之外ノ儀領国ノ儀候間以計可申

付候由、被 仰出候通以使者被申下候、得其趣、此度

高崎惣右衛門・本田六左衛門ト申者琉球へ渡海申付候、

此上者琉球王位⑧異(空白、マ、マ)モ意儀□問敷候、無口能仰出乍恐我々

モ安堵仕候、此旨御披露頼存候、以上、

明曆元年九月十三日 鎌田源左衛門

町田勘解由

新納右衛門

伊勢兵部

島津図書

遠山三郎左衛門殿

右ニ付、松平隠岐守様へ鹿兒島ヨリ御使者竹宮内記被

差越候、

(二六一の2)

薩摩守殿(綱久)へ為御見廻(マ、マ)以飛刀申入候間令啓候、其元無別

条薩州無事ニ在国候哉承度存候、於江戸大隅守殿弥御

堅固御在府ノ由被仰越候間、氣遣被成間敷候、随テ大

明韃王代替ニ付テ先年琉球ヨリ使者差遣候処于今帰帆

依無之、当春迎船差越候へトモ福州賊船多有之ニ付テ

港へ入津難成故、中途ヨリ乗戻候節、獵船ニ使者ノ儀

相尋候へハ、福州ニ堅固ニテ有之候、近日琉球へ船ヲ

可相渡為催於福州船作事仕、其船琉球人トモ乗セ可渡

旨承、罷帰候テ琉球ヨリ其旨注進依有之、早々江戸へ

被申越候処ニ、則大隅守殿言上被成、去廿二日ニ 御

城へ被為召、此度韃王ヨリ琉球へ使者相渡候ハ、其旨

ヲ不相背様ニ仕、其外ノ儀ハ大隅守殿可為御計次第旨

仰出候由、大隅殿ヨリ預御飛札候、一段ノ首尾ニ候、

琉球国ノ儀、唐(疾ハカ)へ無通候へトモ万事難成由内々承候間、

韃王ヨリ冠船被相渡候ハ、何分ニモ相随候テ可然存候、

定テ江戸大隅守殿ヨリ様子可被遣候間、急度其旨琉

球へ可被申越候、我々儀、来二日三日比ニ当地発足致

参勤候間、大隅守殿へ万端御相談可申候、①*恐惶謹言、

九月六日

松隠岐守定行

島津図書殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

鎌田源左衛門殿

町田勘解由殿

二二六二

自隠州様薩摩守へ為御見廻御使者被遣候間、被成下候

御書謹テ拜見仕候、先以御勇健被成御座候由恐悦奉存

候、薩摩守事モ別テ息災罷在候間可易責慮候、然ハ琉

球へ順治韃王冠船差渡候由ニテ、於福州船作有之、右

ノ冠船渡海ノ刻先年琉球(空百、よりカ)指渡候使者モ可乘来通、

長崎へ来着候十四番船ノ唐人申ニ付、彼地御政所へ御

内証ノ上ニテ唐人ノ口通事ニテ承究、江戸へ可申遣相

談仕候処、琉球ヨリモ先年ノ使者迎船遣候ニ海賊多有

之ニ付福州川へ入儀事不罷成候テ獵船ニ相尋候通細々

申越候、右ノ趣同前ニ大隅守方へ申遣候、其様子ハ先

日以使者申上候条、可相通ト奉存候、御書物ニテ如蒙

仰候、江戸御老中様へ披露被申上候処、御請合モ能、

御返事存儘ニ被 仰出、我々マテ安堵仕候、就夫此度

両使琉球へ差渡候、巨細先便ニ申入候条不能詳ニ、①候為

入御念御書面忝儀共ニ御座候、此旨可然様宜預御披露

候、①*恐惶、

九月廿三日

政有

久則

久詮

貞昭

久通

遠山三郎左衛門殿

二二六三

琉球ノ儀ニ付テ案内竹宮内記方被差越、御状ノ趣致披見候、然ハ此度琉球国へ韃王ヨリ使者船ヲ相渡候風聞依在之、長崎御政所^①被伺、唐船へ被相尋候処、福州

ニテ取沙汰有之由申ニ付テ江戸へ注進被申遣候処ニ、大隅守殿御老中へ被仰達候へハ、去月廿二日ニ大隅守殿御登城候処、琉球へ韃王ヨリ使者差遣候ハ、其旨ニ相隨可申旨依仰出、其元へ御左右有之ニ付テ、則高崎惣右衛門・本田六左衛門方琉球へ渡海被申付候由、内々上意ノ趣大隅守殿ヨリ被仰聞候、首尾残所モ無之テ珍重存候、委細ハ御使者へ口上ニ申含候、恐惶謹言、^①九月廿七日 松平隠岐守定行

島津図書殿

伊勢兵部殿

新納右衛門殿

町田勘解由殿

鎌田源左衛門殿

尚々、琉球ノ儀遠島ノ儀ニ候間、御仕置モ御六ヶ敷

儀ノ処、無相違 仰出珍重存候、將又別紙ニ書付被差添給候、被入御念令祝着候、

二二六四

一琉球ヨリ唐へ差渡候進貢船、唐之地遭海賊候ニ付、其段御老中様へ被仰上、於長崎東寧船ノ輩へ御穿鑿被仰渡、過料銀被仰付候、右ニ付^①御奉書、

御札令拜見候、去々年從琉球大清国へ差渡候進貢船二艘ノ内一艘、於唐地遭海賊船、荷物共ニ押之、琉球人少々打殺、残者共衣裳等剥取之、唐地へ追放之、今度令帰帆候、右ノ旨趣以使者長崎奉行人へ被相達ノ由得其意候、於長崎遂穿鑿ノ旨猶^①兩奉行申來候、入念候紙面各一覽ノ事候、委細使者可令演說候、恐惶謹言、^①寛文十二年 十月九日 板倉内膳正重矩 判

松平大隅守殿

御札令拜見候、去々年大清へ從琉球貢納ノ使者船唐地ニ於テ遭賊船候付、長崎ニテ東寧船ノ輩御穿鑿ノ処海賊無紛候、雖然身命ハ御助、為過料白銀三百貫目依差上之、右ノ銀其元へ遣之、琉球へ渡候様被 仰出候段、自岡野孫四郎申達候、中山王於被承知ハ忝可被存由得其意候、依之被差越使者候、入念候通各申談及 高聞候、恐惶謹言、

(寛文十三年) 正月廿六日

稻葉美濃守正則

松平大隅守殿

一貞享二年丑四月十三日、大久保加賀守様ヨリ御用ニ付相良仁右衛門致参上候処ニ、琉球ヨリ毛織過分ニ薩州へ差渡、京・大坂へ相払候由被及聞召候、其通ニ候哉ト御尋ニ付仁右衛門ヨリ申上候、紗綾縮緬ハ少々、参候、毛織差渡候儀ハ終ニ不承、乍然御尋ノ儀ニ御座候間罷帰承合、御当地へ不相知候ハ、国元へ申越、

追テ可申上由御挨拶仕候へハ、御意ノ儀ニテハ無之間、御当地へ不相知候ハ、御国元へ申越、慥ニ承届可申上候、此儀御尋被成候トテ御氣遣入儀ニテハ無之候、長崎へ商買ノ儀被仰越ニ付、脇々ノ様子ヲモ被聞召合事候間、是ヲ大本ニイタシ可承届候、毛織卷物ノ類琉球ヨリ薩州へ差渡候儀中興ヨリノ儀ニ候哉近年儀ニ候哉、琉球ヨリ毛織卷物商買ノイタシ様迄委細可申上ノ旨被仰聞候、依之、加賀守様へ差遣候以書付、但、寛陽院様御在府、

琉球ヨリ毛織過分ニ薩州へ差渡、京・大坂ニテ相払ノ由被及聞召候、其通ニ候哉ノ旨先頃御尋被成、天鵝絨少々、毛氈・紗綾・縮緬・縹子・鈍子・糸ノ類年々買渡申候、羅紗・猩々皮ノ類終ニ為買渡儀無御座候、且又卷物ノ類琉球ヨリ薩摩へ差渡候儀中興ヨリノ儀ニ候哉近年ノ事候哉ノ旨御尋被成候、古来ヨリ為買渡儀ニ候、先年大明兵乱ノ節売買如何可有之哉ト存相伺候処ニ、有来候通売買仕候様ト御奉書ヲ以被仰渡候故、

不相替致売買候、毛氈ノ儀ハ向後買渡候儀無用可仕由

去年琉球へ申遣候、右之趣爰元ニ委細不相知候間、国元へ申遣、頃日申来候、以上、

十一月十八日

右ニ付、天和三亥年琉球ヨリ買渡候品々書付一通候、略之、

一一二六七

覚 此趣ハ相良仁右衛門ヨリ加賀守様御取次角田教馬へ口達ニテ申遣候、

去々年琉球へ封王使差渡、唐人共糸巻物ノ類過分持渡買申故、去年上方・長崎ニテ琉球ヨリ相払候、右封王使差渡候節ハ、直段高直ニ有之、中山王勝手悪敷儀ニハ御座候得共、唐人為馳走彼方ヨリ申掛ケ次第高直ニテモ買取申事候、右封王使ノ儀ハ廿ケ年三十ケ年二一度モ参儀ニ御座候、此段ハ最前御尋ニテ無御座候へトモ御自分マテ申遣候、以上、

(貞享二年) 十一月十八日

一一二六八

一貞享三年寅七月、大久保加賀守様ヨリ御用ノ儀御座候間今朝参上可仕由、右年寄近藤吉左衛門ヨリ昨日申参候故今朝参上仕候、追テ御達被成御直ニ被仰渡候、

覚 但、大玄院様御在府、

從琉球唐買物品々書付可差出由、先頃相良仁右衛門へ申渡、其書付受取置候へトモ、一年分ニテ候、三年程御用候間、天和三亥年已後相知候ハ、国元へ品々申越、何トソ早ク相知候様ニ可申遣候、且又右商買銀高奥ニ金子ニシテ何両ト可書付候、將又從琉球薩摩へ右商買物相渡候員数銀高、薩摩ヨリ琉球へ相渡候品並銀高、右ノ段委細書付可差出由被仰渡候、先頃御受取置候御書付五通御返シ候間、受取罷帰只今差上申候、以上、

七月廿六日

伊勢十兵衛

一一二六九

一大久保加賀守様ヨリ御年寄近藤吉左衛門ニテ今晚被仰

渡候覺、

今朝達後候、琉球ヨリ薩摩へ渡候物品員数並銀高、且又薩摩ヨリ琉球へ渡候物品員数銀高、三年分程御用ノ^①候間、書付可被差出候、何トソ早相知候様ニト被仰渡候、以上、

(貞享三年)

七月廿六日

伊勢十兵衛

一一七〇

覺 大久保加賀守様へ被差出候、

唐買物ノ儀並琉球ヨリ薩摩へ相渡候商買物、薩摩ヨリ琉球へ相渡商買物ノ銀高書付可差出ノ由、先頃被仰渡候ニ付、国元へ申越候へトモ、委細ニ難知候ニ付、其段申上候処ニ、相知候分急ニ被聞召度由重テ被仰渡候故、又々申遣国元ニテ致僉儀、此度書付到来仕候間差出申候、且又唐買物ノ儀ハ先頃御断申上候通薩摩ニテ難知、琉球へ申越候間、来夏到来次第可申上候、以上、
(貞享三年)
十一月廿三日

加賀守様へ一所ニ被差出候天和亥ヨリ子年迄三年琉球

ヨリ積登リ候品々於薩摩売払候代銀ヲ以琉球へ諸物買下候銀高ノ書付一通略ス、^②

一一七一

覺 大久保加賀守様へ被差出候、

琉球ヨリ薩摩へ相渡候売物金高一年分三千兩余ニテ御座候、向後ハ二千兩ノ売物外ハ不相渡様ニ被仰渡ニテ可有御座由御内意被仰聞候、依之御自分迄御内意申入候、琉球ノ儀金銀無之所ニテ御座候故年々諸物相渡、於薩摩売払、琉球用物等買調、其殘銀ハ薩摩町人方へ前々ヨリ借銀有之利払仕事ニ御座候、年々ヨリ破損ノ船有之節ハ借銀利払モ不能成候、然処千兩余ノ売物被減候へハ弥利払不被罷成、中山王不勝手、其上町人別テ迷惑可仕候間、跡々ヨリ有来如ク商買被仰付被下度奉存候、最前申上候通、琉球物買調殘^③銀持渡儀無御座候、此等ノ趣ヲ以宜御取成可被下候、以上、

(貞享三年)

十二月朔日

二二七

寛 寅十二月十五日、薩州様御登城被遊候節、御老中御

列座ニテ被仰渡候、

薩摩・大隅兩國ヨリ琉球へ年々商買ノ儀、向後^{旧記雜録}金高^{により補}式千兩△可限之、其上ニ金銀堅遣間敷候、

但、諸色ノ内差テ不入品々一切不相調様、自今以後

可被相心得候、以上、

(貞享三年)
寅十二月十五日

二二七

寛 貞享四年卯九月大久保加賀守様へ被差上候、大玄院

様御在府、

琉球ヨリ唐へ買物ノ品々銀高並日本ヨリ買渡候品々銀

高、且又琉球ヨリ薩摩へ差渡売^①私ノ品銀高、薩摩ヨリ

琉球へ相渡候品銀高可書出旨去年被仰渡候間、琉球・

薩摩商買物品々銀高ノ儀ハ去年相改書出申候、唐商物^①買

ノ品々銀高ノ儀ハ琉球へ申遣、相知次第可書出由申上

置候、依之、当夏琉球ヨリ書付差越候付而頃日国元ヨ

リ申越候条、右書付差出申候、琉球ノ儀ハ唐へ進貢船

二艘ツ、隔年ニ差渡、其間一ヶ年ハ左右間^①一艘差渡

申候、往還並進貢ノ兩使北京へ罷上候諸入用銀、唐滯

留中遣方運上銀等、其外琉球諸用物唐ニテ調候代銀マ

テ相加へ、金子ニシテ六千兩程ニテ候、右金子中山王

用意難成候間、薩摩町人へ借金ヲ以相調候処ニ、此借

金返弁ノ手当別ニ無御座候間、金子ニシテ八千兩余ノ

銀子ヲ借り加相添差渡、糸巻物其外品々於唐買調、薩

摩へ遣売私、其代銀ヲ以右ノ借銀並利足迄致返弁、翌

年ハ又借金ヲ以右之通差渡事ニ御座候故、銀高少々ニ

テモ被相減儀ニ候へハ進貢モ不相調、中山王進退相極

儀ニ候条、有来通被仰付被下度旨申越候、右唐物買候

儀ハ古来ヨリ仕事ニ候、前々唐兵乱ノ節、^①売買之儀

ハ古来より仕事、△ 売買如何可有之哉ノ旨相伺候処、

有来通商買仕候様ニト以御奉書被仰渡、乱世ノ時分モ

買渡為申儀ニ候条、弥以不相替被仰付被下候様奉願候、^①願

左右聞船差渡候年ハ船一艘ニテ進貢物モ尤無之、唐ニ

テ付届モ別テ無御座候故、入用銀半分程ニテ相調事ニ

候間、差渡候銀高モ勿論右ノ半分ニテ御座候故、毎年
一万兩余ノ金子差渡ニテハ無御座候、其段ハ別紙ノ書
付ニ委細相達候、以上、

九月七日

天和二戌年・同三亥年・貞享元子年、三ヶ年渡唐銀売
立算用書一通略之、

一二七四

覚 右同前加賀守様へ被差出候、

天和二戌年進貢船二艘差渡候節、

一 銀八百七十六貫目 金子ニシテ一万四千六百兩

天和三亥年左右聞⑧船一艘差渡候、

一 銀四百二十六貫目 金子ニシテ七百兩

貞享元子年進貢船二艘差渡候節、

一同八百八十七貫目 金子ニシテ一万四千七百八十三兩

余

右ハ、戊亥子三ヶ年琉球ヨリ唐へ差渡候銀高如此御座
候、右之通差渡不申候テ不叶筋、委細別紙ノ書付ニ相

達候、此外進貢物並唐ニテ入用ノ諸物品々差渡儀ニ御
座候へトモ、是ハ上方・薩摩ニテ買調、其品々ヲ差渡
申儀ニ候故、右ノ外現銀曾テ差渡不申候、此段モ別紙
ニ委相達申候、以上、

(貞享四年)
九月七日

一二七五

口上覚 大久保加賀守様へ被仰入候、

琉球ヨリ大清へ売買ノ品々金高ノ儀、書付可差出由被

仰渡候趣琉球へ申遣、委細申来候、琉球ノ儀、唐へ隔

年ニ進貢船二艘ツ、差渡、其間老年ハ左右聞⑧船一艘ハ

差渡申候、往還並進貢使北京へ罷登候諸入用金、唐滯

留中遣方運上銀、其外琉球用物唐ニテ調へ代金迄六千

兩程ニテ候、右金子(中山王カ)中王用意難成ニ付、薩摩町人へ借

金ヲ以相調候、此借金返弁ノ手当別ニ無御座候間、八

千兩余ノ金子ヲ借り加相渡候、糸巻物類買調、薩摩へ

遣売払、其代金ヲ以右ノ借金払仕、翌年又借金ヲ以差

渡事ニ御座候故、金高少々ニテモ被相減儀ニ候へハ進

貢モ不相調、中山王進退相極儀ニ候条、有来通^⑧被仰付被下度旨琉球ヨリ申越候趣、先頃委細書付ヲ以申上候処ニ、進貢何^⑨トモ減少候様ニト段々被仰聞候付、家^⑩来共へ申付、委細逐^⑪愈儀候へトモ、金高相減候テハ往々進貢モ不罷成^⑫御座候故、何^⑬トモ了簡難仕候、然共日本ノ金子モ年々異国へ差渡儀ニ候へハ日本ノ宝相減管候付テ、長崎・対馬ヨリ差渡候金高モ為被減儀ニ候、御奉公ニモ罷成候条、少々^⑭ニモ減少候様ニト被仰聞事候へハ、何^⑮トソ相減候筋ハ有之間敷哉ト幾度モ吟味為仕候処ニ、進貢ノ用事首尾好相調ニテハ無之管候へトモ、唐へ差渡候現銀一万四千六百兩ノ内二百兩押^⑯テ相減、向後ハ一万三千四百兩ツ、現金差渡候様被申付候ハ、薩摩ニテ売立ノ金高モ跡々ハ一万七千八百兩ニテ候へトモ二千兩ハ相減、一万五千八百兩ノ売立ニ可申付候、右通ニテハ若進貢ノ用事不相調儀モ可有之候へ共、金高減ノ儀段々被入御念被仰聞事^⑰候条、何^⑱トソ申付様モ可有御座ト愈儀仕候間、唐へ差渡候金高ハ右通被仰付被下度候、委細別紙ノ書付ニ相達候、

左右聞船ノ年ハ船モ一艘ニテ候故、金高右ノ半分差渡候テ相濟儀ニ御座候、以上、
(貞享四年)
 十月十六日

右ニ付、銀高段々次第買元売立ノ算用書略之、

二二七六

覚 加賀守様ヨリ被仰渡候趣伊勢十兵衛^⑲ニ被成加賀守様ヨリ御書付被下候、

先日差出候琉球ヨリ唐へ商買ノ金高書付並口上書何レモ様へ被入御披見候処ニ、当年ハ琉球へ時分後ニ罷成由候^⑳、先日差出候書付ノ通千二百兩減候金高先差渡候様ニ可申付候、左候テ琉球へモ申越、先日モ被仰聞候通異国へ金子太分差渡候へハ日本ノ銀金漸々ニハ段々減申儀ニ候、日本ノ金山銀山共二年々纒ニ出候、依之、差渡候金高減少ノ儀別テ御奉公ニモ罷成事候条、琉球ニテモ連々其考仕候様可申付候、年貢物成等モ水損早損ノ節ハ如例取調難成儀ニ候、琉球儀、日本ヲ便ニ仕、進貢調事ニ候へハ、日本ノ金子不足ノ儀物成之不足同

前ノ儀候間、其断申聞候ハ、漸々ニハ減少モ可罷成哉
ト何レモ様被思召候、連々ニハ金高少宛ニテモ減候様
ニ其心得尤ニ候、此方ニテ金高何程減候様ニト差函ハ
難成候、能相考可申付候、

卯十月廿日

伊勢十兵衛

一二七七(の1)

一琉球ヨリ買渡候唐物、長崎・上方ニテ心次第売払事候
処ニ、長崎(ロカ)へ唐船抜荷物御改ニ付、糸巻物割符宿老封
ノ印ニテ売払方ニ被仰付候間、封印無之唐物商買不罷
成、琉球口ヨリノ唐物上方ニテ問屋相立可相払旨、御
願ノ次第、

一筆致啓上候、然ハ從琉球唐へ進貢船差渡申候序唐ヨ
リ買渡申候商買物、商人共買取ノ從前々其御地又ハ上
方ニテ相払申儀ニ御座候処ニ、去々年於其御地相滞申
儀共御座候、右之通御座候テ若先キ①私ツカへ申儀共
御座候ハ、中山王別テ迷惑可仕候、依之我共ヨリ御断
申上候様ニト薩摩守江戸ヨリ申越候付、使者市来次郎

左衛門差上申候、委細①曲被聞召達可然様ニ御取成願存候、
恐惶、

元禄元辰年正月廿七日

御国元
御家老連署

山岡十兵衛様御家老 但、長崎へ御在勤、

遠山三郎左衛門①様

安田宅右衛門①様

宮城主殿様御家老 右同

八十嶋武兵衛①様

鈴木弥左衛門①様

(一二七七の2)

尊札拜見仕候、然ハ琉球国ノ儀從往古大清へモ進貢仕
候付、船差渡糸巻物ノ類買渡致売買來候処ニ、於長崎
商買相滞儀共御座候、依之、他方ノ商買物不紛様於京
都商買被仰付度ノ旨、大久保加賀守殿マテ御断被入仰①仰入
候処ニ、於当地問屋御定商買可被仰付候、此段私共へ
モ可被仰聞旨加賀守殿御指図ノ由、御紙面ノ趣得其意
奉存候、且又当地ニ被差置候御家來衆口上ノ趣承届候、
右ノ様子川口源左衛門殿へモ被仰達候由、委細承知仕

候、恐惶謹言、

六月十九日

井上志摩守正貞 判

前田安芸守直勝 判

松 薩摩守様

尊報

一二七八

一 琉球ヨリ唐へ進貢ノ儀、三百四十年已前大明洪武年中

ヨリ勤来候、

一 薩摩守家へハ其以前ヨリ致聘礼ニ、^{①候}別テ当薩摩守十二

代ノ祖陸奥守忠国代 公方普廣院義教公ヨリ琉球国拝

領仕候、依之、永享年中ヨリ薩摩守家へ急度相隨年々

貢物差渡候、然処薩摩中納言家久代 権現様御代初テ

ノ御礼可申上旨使札ヲ以申付候処ニ不致領掌候付、

権現様へ言上仕、慶長十四年三月琉球へ渡口ノ港山川

ト申処マテ家久出張下知仕、先手差渡候処ニ、琉球入

口ノ於島防戦候付、琉球人百四人打殺段々責掛、同四

月海陸ヨリ中山王居城首里ノ城へ懸申処ニ、中山王降

参仕候間、先手ノ者共則中山王ヲ召捕、同五月薩摩へ

到来候、依之、早速 両御所様へ言上仕候処ニ御感不

斜、御感状被下、琉球国家久へ被下候旨被 仰出、其

上家久養父三位入道龍伯並家久実父宰相入道惟新へモ

御感状被下之候、

一同翌年五月、家久薩州ヲ罷立為御代初ノ御礼中山王ヲ

召列、同八月六日駿府ニ参着仕候、道中ノ御馳走朝鮮

人来朝ノ節ト可為同前旨宿々へ被仰付候、同八日家久

中山王ヲ召列登 城仕候、中山王ヨリ鈍子百卷・羅紗

十二尋・太平布二百疋・蕉布百卷・白銀一万両・御太

刀一腰献上仕候、家久ヨリモ御太刀御馬代其外品々献

上仕候処ニ、当御代始琉球国ヲ隨、剩其王ヲ早速卒来

候事家久働ノ由蒙 御感候、同十八日御饗応被下御酒

宴ノ上、常陸介様・御羈様御座被為立御仕廻被遊、其

上貞宗ノ御腰物大小家久ニ被下之、同十九日御暇相済、

翌廿日中山王召列駿府ヲ罷立江戸へ参上仕候、

一同廿五日江戸着仕候段々 上使被下、同廿七日又

上使ヲ以御米千俵拝領仕候、同廿八日家久中山王ヲ召

列登 城仕候、中山王ヨリ鈍子百卷・虎ノ皮十枚・太平布二百疋・蕉布百卷・白銀一万両・長光ノ御太刀獻上仕候、若君様へ御太刀一腰・鈍子五十卷・太平布百疋・蕉布十卷差上候、家久ヨリモ御太刀馬代其外品々獻上仕候、同九月三日登 城御饗応被下、同七日於御数寄屋家久御手ツカラ御茶被下、同十二日登 城仕、同十六日ニモ 御城へ被為 召御饗応ノ上、加賀貞宗ノ御腰物並御馬拝領之、且又其日櫻田ノ屋敷被下之、^{⑧直}御暇被 仰出、同廿日中山王召列江戸ヲ罷立帰国仕候、尤、御下知ヲ以中山王儀其年帰国申付候、

一 右ノ後ハ、公方様御代替 若君様御誕生並中山王自分継目ノ節ハ、中山王ヨリ江戸へ使者差上来候、其節ハ每度薩摩守召列参府仕候、四年以前寅年マテハ六度中山王使者差上候、且又中山王継目ノ節ハ不及窺薩摩守ヨリ可申付旨 ^(家光)大猷院様被 仰出、薩摩守ヨリ継目申付候上、其段御届申上来候、右使ノ故ヲ以 ^(件カ)御代々様ヨリ被下置御判物ニモ薩摩大隅並日向諸縣郡琉球全可致領知旨被為記候、

一 慶長ノ頃ハ唐ノ商船日本へノ通融相止ノ程ノ事ニテ不自由御座候故、琉球ヨリ唐へ可申談旨從 権現様家久へ御談ノ趣有之、公命ノ旨ヲ以於薩摩書翰ノ草案相調、中山王ヨリ大明へ使翰差渡サセ候、其趣ハ、琉球国ト日本薩摩ハ隣国ニテ千八百里ヲ隔候故、^(方カ)万物ヲ捧来候処ニ、頃日怠候付、從薩州兵ヲ差渡、中山王被捕薩州へ罷渡候へトモ、国主家久依慈悲本国へ相帰シ候、其節家久申付候ハ、此年来日本唐商船通融無之候間、日本ノ船ヲ唐へ遣候カ、又ハ唐ノ商船ヲ琉球迄可遣カ、又使ヲ遣年々和漢ノ貨物ヲ致交易候カ、此三ヶ条ノ内一ヶ条モ於無許容ハ日本数万ノ軍兵ヲ大明ニ差渡候、日本へ近キ所憂アルヘシ、此段ハ日本將軍ノ思召ニテ候間、中山王ヨリ可申越旨申付候、右三ヶ条ノ内一ヶ条被差免候ハ、吾琉球国大明ノ徳化ニ沐シ、且又日本ノ夙志ヲモ可遂旨、達テ為願候処、於大明承之、琉球国日本へ随ヒ又大明へ右之通致通達候儀、内々ハ殊ノ外疑、段々及吟味、獻シ候貢物ノ内於日本調候品ハ不致受納差返シ、十ヶ年過候テ可致渡海由申付候、然ハ

琉球ノ儀大唐附庸ノ国ニテ候処ニ日本ヘモ随候故ヲ以
 疑ヲ受候段別テ難儀ニ存、別心無之ノ趣其後様々申披
 候ヘトモ五ヶ年一度ノ進貢ヲ申付候、雖然已前ニ引替
 リ通融ヲ疎ニ候体相見得ヘ不安堵候故、無表裏ノ旨又
 ハ及再三訴歎キ、漸疑ヲ散シ、古来ノ通隔年ノ進貢申
 付於于今其通動来候、右節中山王ヨリ大明ヘ遣候書翰
 ノ扣並大明天子ヨリノ勅書等写有之、且又 台徳院様
 ヨリ御内書ヲ以被 仰下、山口駿河守様(直友)ヨリ御状ヲ以
 御申越候旨等モ御座候、

一 明ノ代ノ末、彼地兵乱罷成候節、此砌進貢船ヨリ品物
 通融仕候儀奉伺候処、琉球ノ儀ハ如有来可令売買ノ旨、
 正保三年六月松平伊豆守様(信綱)・阿部(重次)对馬守様(阿部豊後守忠秋脱カ)御
 奉書被下置候、

一 寛文中、大清ヘ差渡候進貢船東寧ノ洋ニテ逢賊船、
 荷物船共ニ被押取、唐ノ地ヘ被追放、乍漸致帰国候、
 右之段薩州ヘ申越候付、御老中様並長崎御奉行ヘ御届
 申上候処ニ、於長崎東寧船ノ輩ヘ被御穿鑿逐、海賊無
 紛ニ付、過料白銀三百貫目唐人ヨリ御出サセ中山王ヘ

被下、唐人ノ生命ハ相助候儀御座候、右ニ付稻葉美濃(正則)
 守様・板倉内膳正様ヨリノ御奉書有之、
(重徳)

一 進貢船・接貢船ヨリ持渡候銀子ハ前々ハ量數ノ御定無
 之候処、貞享(空白、四ツ)□年大久保故加賀守様ヨリ被仰渡候ハ、
 日本ノ金銀異国ヘ相渡候儀今度被遂御沙汰、長崎口・
 对馬口金高被相減候、依之、琉球ヨリ唐ヘ差渡候銀子
 ノ儀モ可被相減候、然トモ琉球ノ儀ハ古来ヨリ為進貢
 料銀子差渡事候故、減少ノ員數從 上者何程ト難被仰
 付候間此方ニテ吟味仕、少ニテモ可相減旨被仰付候付、
(具)
 日々遂吟味候処ニ、已前ヨリ各別銀入ノ事ニ成来候故、
 前々ヨリノ員數ヲ減候儀ハ曾テ不罷成由琉球人申候ヘ
 トモ、乍其上委吟味仕、其時分持渡候金高大數ノ内千
 二百兩押テ相減、進貢船差渡候節ハ一万三千四百兩、

接貢船差渡候年ハ六千七百兩持渡候筋御免無之候ヘハ
 進貢難相勸段申出候処、申出候員數可相渡旨被仰渡候、
 右ノ次第ノ故、此上金高相減候儀ハ曾テ不罷成事ニ御
 座候、御免ノ量數ノ金高ニテ被定置候ヘトモ、西国ノ
 儀金子不自由候故、一兩ヲ銀六十目替ノ積ニテ、進貢

船ノ時ハ銀八百四貫目、接貢船ノ時ハ四百二貫目持渡申候、

一大清ノ天子へ直ニ金銀ヲ獻シ候事ハ無御座候、錫・銅・

硫黄ヲ進貢仕候、官人共へハ礼被遣候外ニ品物モ進物

仕、又ハ滯留中諸用ノ品モ有之候ニ付、其品々上方・

薩州ニテ買調、琉球ノ産物ニ取添持渡申候、尤、右品

物代ハ御定金員ノ外ニテ勿論大清へハ不持渡銀子ニテ

御座候、近年諸物高直ニ付、此品物代モ相分相増申候、

一進貢船持渡候銀子八百四貫目ノ内三百五十貫目ノ前後

於大清段々官人へノ礼銀又ハ運上銀並滯在中雜用ニ仕、

其余銀ニテ菓種・糸・端物其外於琉球事欠候品買取申

候、

一接貢船ノ儀ハ、差渡候進貢使海陸長途故貢期相滯、又

ハ天子ヨリノ勅書贈物等中山王頂戴及延引候儀毎度有

之、对清朝緩怠候筋罷成候条、接貢使差渡勅書並贈物

等可接回旨大清ヨリ申付候付、進貢ノ翌年接貢使福建

迄差渡申候、北京へハ不参候故、進貢船ノ銀高半分ニ

テ相仕廻申候、

一右持渡候御定金銀子調候儀ハ、琉球人薩州へ罷渡、町人共へ致借金候、其内難達分ハ依願薩摩守藏銀ヲ借遣

候、右借銀返済ハ於福州糸反物ヲ買求、薩州へ持来、

銀主へ相渡、又ハ上方ニテ相払、此代銀ヲ以返済仕候、

一於大清ハ正金銀ニテ用候ニ付、日本ノ古銀モ吹抜候へ

ハ量如減申候処、元禄年中ノ新銀ハ猶相減不勝手ノ由

先年中山王ヨリ致訴訟候へトモ、日本一統通融ノ事候

故此方ニテ了簡無之由申付置候、然処宝永已来ノ新銀

段々位悪敷罷成、太分致不足難儀仕候条、何トソ可加

了簡旨重テ訴申候、位悪敷段々無紛事候へトモ、此

上可申付様無御座、薩州ニテ元禄銀致才覚、不足ノ分

ハ宝永銀モ取加可持渡旨急度申渡候間、一往持渡、於

大清吹抜候処ニ、宝永銀ハ正銀纔ニ有之候ニ付、此体

ニテハ向後進貢使差渡候儀何共難成候、進貢及懈怠候

ハ、何様ノ儀力可致到来旨別テ難儀ニ存候間、何トソ

了簡ヲ願候由、去夏使者ヲ以訴訟申越候、願ノ旨無余

儀候故、薩摩守領内人別ニ元禄銀相改候へトモ致不足

候、然共外ニ可申付筋無之故、宝永銀ヲ又々取加可持

渡旨押テ申付候処、去ル辰年迄ハ無是非持渡申候、勿論此已後新銀取加持渡候テハ乍漸モ相調可申了簡絶テ無之、此体ニテハ当年ヨリ大清ヘノ勤懈怠仕候外無御座候条、此上可加憐愍旨偏願申候、然ハ当已年接貢料ニ可差渡元禄銀最早薩摩守領分ニテ無之、何トモ無了簡次第御座候、

一慶長年中依 御下知琉球国日本へ相随候段大明へ申越サセ候節ハ殊ノ外疑、乍漸申断致進貢来候処ニ、^①大清之代ニ移リ候而ハ各別引替、日本へ致通融之段△ハ何様内慮ニ候哉、官人共ヨリ今迄沙汰不仕、進貢使ノ取持明ノ代ヨリハ会釈段々丁寧ニ申付、琉球ヨリ誠ヲイタシ不懈候ハ、寵愛スヘシ、万里ヲ遠シトセス使ヲ以貢物ヲ備候段忠節ノ至ニ候ナト、進貢使帰国ノ度毎懇成勅書差下、使者従者等迄賜物有之候、中山王ヨリモ皇帝へ表文ヲ捧ケ、北京・福建ノ官人へモ互ニ咨文ヲ取替シ、且又中山王代替ノ節ハ從大清翰林学士ヲ封王使ニ遣、武官ヲモ相添、惣人数五六百人又ハ七八百人差渡、冠並官服其外ノ品々^①賜物有之、急度規式執行、

中山王ノ廟所へモ勅使相越祭等旁慰勸ノ仕形御座候、右之通親キ体ニハ候へトモ、進貢接貢使罷渡候節ハ運上銀等兼テ定数ヲ取極置強申掛、又ハ官人共へノ礼銀モ恣ニ貪取、買物ノ儀モ旅宿へ出入ノ商人ヲ定置、我儘、畢竟銀子持渡候儀ヲ琉球国第一ノ勤ノ様仕掛候ニ付、漸間ヲ合セ置候、且又封王使罷渡候節モ商物押押テ高所ノ売渡申候段ハ、右仕形ニ候故、品物ヲ以償候筋ニハ不罷成由琉球人申候、右ノ次第候処、銀子当分ノ体ニテハ琉球人申候通大清へノ勤一定懈怠可罷成候、然時ハ中山王進退必至ト差迫候積御座候、琉球人於大清通達ノ程兼テ難計候処ニ、決テ勤懈怠罷成候ハ、大清へ何様ノ筋可申哉、此上ノ儀何トモ不了簡ノ方御座候、依之、元禄銀ノ位ニ吹替被仰付度、去秋薩摩守為奉願事ニ御座候、

以上、

(正徳三年)^①五

六月廿六日

松平薩摩守内(久明)

島津大蔵

一二七九

一 巳七月二日井上河内守様ヨリ被仰渡候御書付、

松平薩摩守家来へ

元禄銀ハ当時此方ニテ吹出候儀モ無之候へトモ、琉球

へ相渡候銀子ノ事ハ去年薩摩守願之趣前御代達 上聞、

且又琉球封王使ノタメニ有之上ハ、願之通^{①先} 元禄銀ノ

位ニ吹替可仰付候条可被得其意候、以上、

(正徳三年) 七月

一二八〇

一 筆致啓上候、 公方様益御機嫌能被成御座、恐悦奉

存候、然ハ私領知琉球国相渡候進貢接貢料ノ銀子吹替

ノ願申上候処、今度願之通被仰渡、於私モ安堵仕忝次

第奉存候、右御礼為可申上呈使札候、恐惶、

(正徳三年) 八月三日

土屋相模守様

秋元但馬守様

大久保加賀守様

井上河内守様

阿部豊後守様

井伊掃部頭様

一二八一

御札令披見候、 公方様益御機嫌能被^{①成}御座恐悦旨尤

候、将又琉球国へ被相渡候進貢接貢料ノ銀子吹替ノ儀

願之通被 仰出之、忝ノ由得其意候、依之、被差越使

者御紙面ノ趣承届候、恐惶謹言、

(正徳三年) 九月九日

土屋相模守 在判

松平薩摩守殿

以上、

一二八二

宝永御答書

一 琉球ヨリ唐へ進貢ノ品御尋被成候ハ、銅・錫ニテ御

座候由可申上候、

一 琉球ヨリ本唐へ商買有来通可仕旨御奉書ヲ以被仰渡置

候、其後商買ノ金高減少ノ御究有之、隔年ニ相勤、其

間七ヶ年ハ左右聞船差越申候、進貢ノ年ハ金高一万三

千四百両、左右聞ノ年ハ右ノ半分差渡申候筋ニ被仰渡

置候由可申上候、以上、

一一八三

寛政御答書

一 琉球ヨリ唐へ商買ノ儀ハ 御奉書ヲ以御免被仰渡置、

進貢隔年相勤、進貢ノ間接貢ト申候テ左右聞船隔年ニ

差越申候、右渡唐ノ砌商買ヲモ仕事ニ御座候、進貢料

銀六百四貫目、接貢料銀三百二貫目、右量数隔年持渡

候、

一 琉球ヨリ唐へ進貢ノ品御尋被成候ハ、硫黄・銅・錫

ニテ御座候由可申上候、

以上、

一一八四

写

一 御藏ヨリ琉球へ相渡候銀子ヲ渡唐銀ト不案内ノ者ハ唱

候儀有之、向後ハ琉球拝借ト唱可申候、右銀ニテ琉球

人買来候品ハ拝借銀ノ返上方ニ相納筋ニ候間、是又唐

買物ナト、内々ニテモ曾テ唱不申、返上物ト可唱旨御

役座帳面其外写ニモ右之通可相記候、

右之通堅固ニ相守候様御用係ノ面々へ可申渡候、以上、

正徳三年巳五月晦日

肝付(兼納主殿)

島津(仲外)帯刀

島津(久当)将監

島津(久貫)内記

御勝手方

島津家歴代制度卷之二拾三 天明元和

寺社家格式

僧官成

寺家法度

寺社家

靈符祭

寺院社家格式

二二八五

一〇 門首并門首列、合星

一● 御目見之寺院・山伏・社人、合星

一▲ 達 貴聞、住職御家老申渡、合星

一✕ 達 貴聞、虎之間ニテ寺社奉行申渡、合星

一△ 御家老承届、虎之間ニテ寺社奉行申渡、合星

一● 御家老承届、寺社座ニテ寺社奉行申渡、入院ノ御

祝御席ニ御目見被仰付候、合星

一■ 長日番寺院、合星

天台宗、東叡山直末寺

一大雄山 佛日寺 ●南泉寺

一寺高五百石

一南泉院 ▲●院代

天台宗、東叡山末寺、高原

一霧嶋山 花林寺 ▲●神徳院
錫杖院

一寺高八十六石八斗九升八合
九勺六才 ④四

天台宗、比叡山末寺、衆太派、野田

一龜翁山 西 面姓院 ▲●○山内寺

一寺高二石

一南泉院脇寺 ●●觀樹院 ●●吉祥院 ●●実相院

天台宗、南泉院末寺、伊集院

一法泰山 普慶寺 ●●來迎院

一寺高二十石

右同、都之城

一霧島山 金剛院 ●●明観寺

右同、鶴田

一紫尾山 神興寺 ●●祇答院

京都醍醐山寶地院末寺、真言宗小野方

一経圍山 寶成就寺 ■▲●○大乘院

一寺高八百八十二石一斗三升六合七勺七才

一每年長日番

真言宗、郡山厚地

一花尾山 ▲●●○平等王院

一寺高二十石

真言宗、大乘院末寺

一護國山 大樂寺 ■●▲●安養院

一每年長日番

一寺高二百石

右同、曾於郡

一霧島山 錫杖院 ■●▲●華林寺

一每年長日番

右同、伊作

一如意山 願成就寺 ■▲●●海蔵院

一四年目

一寺高五十九石

右同

一神護山 観音寺 ■●●寶持院

一五年目

一寺高五十石

右同

一太岳山 乘護寺 ■●●善聚院

一五年目

右同

一神照山 ■●●普賢院

一八年目

真言宗、大乘院末寺、國分

一 五峯山 龍護院 ■● 金剛寺

一 五年目

一 寺高五十三石

右同、庄内高城

一 春日山 三摩地院 ■● 東龍寺

一 一六年目

一 寺高九石六斗六升六合

右同

一 ■● 延壽院

一 一六年目

右同

一 ■● 勝軍院

一 一五年目

右同、市来

一 鳳凰山 遍照院 ■● 大日寺

一 五年目

一 寺高三十五石

右同

一 ■● 文珠院

一 五年目

右同、末吉

一 無量壽山 深川院 ■● 光明寺

一 七年目

一 寺高二十六石

右同、串木野

一 冠嶽山 領國寺 ■● 頂峰院

一 六年目

右同、庄内高城

一 東霧嶋山 金剛佛作寺 ■● 勅詔院

一 七年目

右同

一 ■● 護國院

一 六年目

右同、國分

一 寶来山 淨菩提院 ■● 正高寺

一 七年目

右同、帖佐

一平安山 八流寺

■●增長院

寺高二十七石

右同、高原

一霧島山 華林寺

■●錫杖院

五年目

寺高三十一石八斗七合二勺九才

天台宗

一竹林寺 衆聚院

●基明寺

寺高十三石

真言宗

一■●威光院

六年目

右同

一■●万壽院

六年目

右同

一大勝山 聖御院

■●寶莊殿寺

五年目

寺高四十三石

右同

一醫王山 多樂寺

■●寶珠院

五年目

寺高五十石

右同、加世田

一雲林山 寶龜院

■●今泉寺

八年目

右同、水引

一神龜山 ■●觀樹院

七年目

右同、加久藤

一高連山 福性院

■●二宮寺

七年目

高五十石

右同

一●永福寺

右同、財部

一小牧山 法嚴寺

■●佛性院

八年目

高十四石

右同、隈之城

一觀現山 (平嶺石寺) 平嶺寺

■●金剛院

六年目

高三十一石

真言宗

一■●善行院

右同

一●福藏院

一●柿本寺

一●潮音院

一●千手院

一●初壽院 (西方)

真言宗

一神照山 (応力) 金胎寺

■△抱真院

⑧隔
満年

寺高百十五石三斗三升四合六才

外三十三石神明領

真言宗、飯野

一白鳥山 金剛乘院 ■△●満足寺

毎年

真言宗、大口

一牛王山 蜜教院 ■●郡山寺

七年目

寺高二十六石

右同、水引

一醫王山 正知院 ■●泰平寺

六年目

真言宗、飯野

一狗留孫山 多寶院 ■●端山寺

八年目

右同、始良

一摩尼山 千手院 ■●幸田寺

六年目

寺高三十六石

右同、飯野

一稻荷山 西方寺

●●保壽院

八年目

寺高廿七石^④斗^④二升九合一勺

右同、志布志

一蜜敵山 丈陸寺

●●大性院

六年目

寺高六十四石七斗二升^④才^④

右同、加世田

一野間山 龍泉寺

●●愛染院

右同、出水

一寶池山 無量壽院

●●成願寺

八年目

寺高三十一石八斗七升三合九勺六才

真言宗、高岡

一寶珠山 威徳院

●●高福寺

八年目

寺高十六石

真言宗、当山山伏薩隅日袈裟頭

一玄海山 ▲○●般若院

法花宗、京都本能寺・撰州尼ヶ崎本興寺末寺、国分

一鷲峯山 勸持院 ○▲●遠壽寺

鹿兒嶋諏訪社

一×●●神主

曹洞宗、能州総持寺末寺、峨山五哲ノ内通幻派下石屋流

一玉龍山 ▲○●福昌寺

寺高千三百五十石

外ニ高三百石 慈眼院様御影堂附^(家久)

百五十石 寛陽院様御菩提料^(光久)

百五十石 大玄院様同^(綱實)

曹洞宗、伊集院

一法智山 ×●●妙圓寺

寺高三百七十五石

右同、福昌寺末寺

一松原山 ×●南林寺

寺高四百石

右同

一覺照山 ×●妙谷寺

寺高三百八十七石

右同

一太平山 ×●興國寺

寺高二百石

右同、福昌寺末寺

一×●惠燈院

寺高百七十石

曹洞宗、田布施常珠寺末寺、加世田

一龍護山 ×●日新寺

寺高二百三十三石四斗四升七合九勺二才

曹洞宗、福昌寺末寺、顯娃

一平源山 ●證恩寺

寺高十四石二斗七升二合九勺一才

曹洞宗、天真派下西上野長源寺末寺、希明派、福山

一永泰山 ●大安寺

寺高十六石三斗一升四才^{④合}

右同、妙圓寺末寺、伊作

一瑞氣山 ●善勝寺

寺高三十一石一斗

右同、福昌寺末寺、伊集院

一福壽山 △●梅岳寺

寺高七十五石

右同、福昌寺末寺、帖佐

一龍護山 ●總禪寺

寺高三十二石

右同、田布施

一太平山 △●常珠寺

寺高十六石

右同、田布施常珠寺末寺

一龍豐山 ●玉泉寺

寺高七石五斗

曹洞宗、能州總持寺末寺、峨山五哲ノ内通幻派下量外派、

蒲生

一大定山 ●永興寺

寺高五十石四斗七升三合

右同、福昌寺末寺、指宿

一安泰山 ●源忠寺

寺高十二石

右同、福昌寺末寺、谷山

一永谷山 △●皇德寺

寺高百石

右同、皇德寺末寺、谷山

一補陀山 ●慈眼寺

右同、能州総持寺末寺、峨山五哲ノ内大源派、市来

一萬年山 △●金鐘寺

寺高八石

右同、福昌寺末寺

一西峯山 △●隆盛院

寺高六石

右同、伊集院梅岳寺末寺

一寶藏山 ●笑岳寺

寺高二十二石一合

曹洞宗、福昌寺末寺、南林寺塔頭

一●源舜庵

寺高三十石

右同、福昌寺末寺、國分

一文明山 △●龍昌寺

寺高三十三石

右同、福昌寺寺中

一●花舜軒

寺高三十石

右同

一△●深固院

寺高七石

右同、田布施常珠寺末寺、伊集院

一千秋山 ●雪窓院

寺高百石

右同、能州総持寺、峨山五哲ノ内通幻派下天興派、清水

一佛頂山 ●楞嚴寺

寺高六石

右同、肥後悟真寺末寺、明峰派、川辺山田

一永谷山 ●善積寺

寺高九石五斗二升七合八才

曹洞宗、田布施常珠寺末寺、阿多

一千手山 ●大年寺

寺高二十石

右同、福昌寺末寺

一太平山 ●大徳寺

右同、福昌寺末寺、市来

一法城山 △●龍雲寺

右同、福昌寺末寺

一△●月香院

寺高三十石

右同、市来金鐘寺末寺、川邊

一忠徳山 ●宝福寺

寺高四十一石

右同、福昌寺末寺、薩州吉田

一佛知山 △●津友寺

寺高十石

右同、福昌寺末寺

一醫王山 ●薬王寺

曹洞宗、福昌寺末寺

一重寶山 ●上山寺

右同、福昌寺末寺、帖佐

一瀧水山 ●心岳寺

右同、川邊寶福寺末寺、伊集院

一久木山 ●破鞋庵

寺高八斗

右同、能州総持寺末寺、峨山五哲ノ内実峰派、飯野

一兜率山 ●長善寺

▽^⑧ 寺高廿石 △

右同、福昌寺末寺、高岡

一真金山 ●法花嶽寺

寺高七十七石八斗八升八合五勺四才

右同、福昌寺末寺、始良

一寶陀山 ● 舍粒寺

寺高十三石

右同、福昌寺末寺、志布志

一新豊山 △ ● 永泰寺

寺高十九石三斗六升四合六才

曹洞宗、福昌寺末寺、大口

一知額山 ● 成就寺

寺高十石

右同、福昌寺末寺、出水

一達磨山 ● 龍光寺

寺高十石

右同、福昌寺末寺、栗野

一福城山 ● 徳元寺

寺高二十石

右同、宗江院末寺、飯野
(長善寺末寺力)

一 ● 宗江院

寺高十八石

右同、長善寺末寺、飯野

一亀城山 ● 幻生寺
イ四

寺高二十石

右同、川邊寶福寺末寺、谷山

一如意山 ● 清泉寺

右同、能州総持寺末寺、峨山五哲ノ内大徹派、高山

一曹溪山 ● 瑞光寺

臨濟宗、五山派京都東福寺末寺

一瑞雲山 ▲ ○ ● 大龍寺

右同、五山派京都南禪寺末寺、伊集院

一泰定山 ▲ ○ ● 廣濟寺

寺高三十一石二斗二升八合一勺二才

右同、伊集院廣濟寺末寺、山川

一海雲山 ● 正龍寺

寺高三十七石一斗八升九合一勺四才

右同、伊集院廣濟寺末寺、伊作

一佛母山 ● 多寶寺

寺高二十五石八斗四升五合八勺

右同末寺、阿久根

一瑞香山 ●蓮花寺

寺高一石五斗七升二合九勺二才

右同末寺、坊泊

一東光山 △●海印寺

寺高七石九斗一升四合五勺八才

右同末寺、伊集院

一瑞雲山 ●善福寺

寺高二石

右同末寺、坊泊

一清月山 ●廣大寺

寺高四石

臨濟宗、五山派京都建仁寺末寺、國分宮内

一靈鷲山 ▲○●正興寺

右同、正興寺末寺、大村

一雲長山 ●大應寺

寺高六石

律宗、南都西大寺末寺、門首列、國分宮内

一梅靈山 無量壽院 △○●正國寺

法花宗、京都本能寺・撰州尼ヶ崎本興寺末寺

一本長山 △○●正建寺

時衆宗、相州藤沢山末寺

一松峯山 △○●無量壽院 淨光明寺

寺高四百石

右同、淨光明寺末寺

一清水山 五道院 △●本立寺

右同、相州藤沢山末寺、曾於郡

一吉水山 称名院 ●念仏寺

寺高三十石

右同末寺、伊作

一法水山 梅窓院 ●西福寺

寺高三十石三斗

右同末寺、志布志

一福壽山 無量院 ●海徳寺

寺高二石三斗四升三合五勺

右同末寺、伊集院

一竹林山 ●龍泉寺

寺高七斗

右同末寺、末吉

一弥勒山 寶泉院

●光福寺

右同末寺、隈之城

一法昌山 福壽院

●称名寺

寺高三石

右同末寺、大口

一大法山 口称院

●専念寺

右同末寺、国分

一仏光山 ●常念寺

右同末寺、本城

一現王山 正覚院

●大林寺

右同末寺、坊泊

一海寶山 清水院

●法光寺

寺高三斗

右同末寺、加世田

一白亀山 安養院

●浄福寺

寺高七斗

浄土宗、鎮西派京都知恩院末寺

一養泉山 無量寺

▲○●不断光院

寺高二十石

右同、帖佐

一如意珠山 △●願成寺

寺高三十石

真言宗、京都仁和寺末寺

一如意珠山 龍巖寺

■▲○●一乘院

寺高二百五十六石二斗六升三合六勺八才

右同一乘院末寺、顯娃

一開聞山 普門寺

△●●瑞應院

毎年

右同末⑨寺、田布施

一金峯山 妙音寺

■●金藏院

毎年

寺高百二十石

右同末寺

一千墓山 真乘院 △■●●大興寺

四年目

寺高三十石

右同末寺、高山

一摩尼山 五大院

■●高崇寺

八年目

寺高十石

右同末寺、阿多

一水精山^(地) 花藏院

●上宮寺

八年目

寺高二石五斗

律宗、南都西大寺末寺、志布志

一秘山 密教院

▲○●寶滿寺

∇^⑧ 寺高三拾壹石五斗六升△

臨濟宗、関山派京都妙心寺末寺、志布志

一龍興山 ▲○●大慈寺

寺高四百七十六石九斗三升七合五勺

右同大慈寺塔頭、右同所

一△●即心院

寺高十五石

右同大慈寺末寺、高山

一神護山 ●昌林寺

寺高十二石

天台宗、本山派山伏薩限日袞婆頭、飯隈山別当職、大越^(繪カ)

一飯隈山 飯福寺

▲○●照信院

寺高四百三十石一斗六升一合四勺六才

右同飯隈山坊中、同所

一●仲之坊

高百一石一斗四合一勺七才

右同飯隈山末寺、吉松

一新熊山^(三藏院カ) 山藏院

●内小野寺

臨濟宗、五山派京都本福寺末寺、野田

一鎮國山 ▲○●感應寺

寺高二石

法花宗、富士門派房州妙本寺末寺、高山

一松尾山 △○●本永寺

水引八幡新田宮社務

一●執印丹下

右、執印ニテ 御目見被仰付候、

一二八六

門首順之次第

一南泉院 福昌寺 平等王院 大乘院 淨光明寺

一乘院 弥勒院 大龍寺

以上八ヶ寺、着座門首、本下座、高欄ヨリ登城、

寶満寺 神徳院 山内寺 正興寺 大慈寺

廣濟寺 感應寺 不断光院 正建寺 幸禪寺

壽國寺 本寧寺(水) 連壽寺(通) 願成寺 正國寺

飯限山 般若院

以上十七ヶ寺、平門首、半下座、大身分上(より脱カ)口登城、

一二八七

一天明三卯年福昌寺圓山和尚江戸へ被差越候書付左之通、

一申渡

薩州 福昌寺 煩代 深固院

右、一位一代乘輿独礼、願之通、献上物且御暇拜領物

御礼且朱網代(一代カ)代乘輿ノ儀モ松平薩摩守ヨリモ申上、九

州無双ノ大地ノ上、(淨庵院、雜懸懸堂付處)淨庵院様御入寺モ被為在候儀、

殊ニ惣本寺ヨリ古論ノ事候故、寺格別ノ訳ヲ以当住一

代朱網代乘輿御免被仰付候、出席◎当日大中寺、

右申渡趣、其方共可致承知候、

十月

右、天明三卯年福昌寺圓山和尚江戸へ被差越、右之通

格式被仰付候、御馬廻リ掛橋五百右衛門其外役僧兩人・

寺社方書役并福昌寺役人被差付候、辰正月下国有之、

一二八八

一天明八申年南泉院僧正正官成勅許有之、左之通被仰渡

候、

一南泉院僧正

右者、先般上京、正官成被蒙勅許、出府有之、公義

御目見ノ儀ヲモ御願立有之、十月朔日 御目見被仰付、

同七日御暇拝領物被仰付、且又山門玉照院兼帯ノ儀是

又御願立有之候処、同二十一日上野 御殿へ被為召、

玉照院現住(不依有無之)、永代南泉院兼帯被仰付、 令旨頂

戴、御礼勤向等無残所相濟候段申来候条、可承向へ可

申渡候、

天明八申十二月

(島津久邦
石見)

一一八九

一 福ヶ迫諏訪神主井上左膳

一 花尾山神主 井上右内

右ハ、先達テ神主職叙爵ノ家ニ被仰付置、此節京都吉

田家ヨリ神主号裁許有之候付、以来年頭其外屹ト致登

城候節ハ、諏訪神主本田彈正同様^⑨虎之間東脇雁木よ

り罷登、△虎ノ間へ相扣、門首席ニテ御礼可申上候、

進上物ノ儀モ同様被仰付候旨被仰渡、

寛政元酉六月

(島津久進)
登

一一九〇

一 諏訪神主

右、官有無ノ無差別、左之兩家上ニ可罷在候、

福ヶ迫諏訪神主 花尾山神主

右、家順ハ此通ニテ座順ハ時々ノ可為官順候、

右之通被仰付候間被仰渡、

天明七未八月

一一九一

一 寺社方御規

一 南泉院 福昌寺

右ニケ寺扣所杉ノ間、其外着座ノ門首并御目見他ノ諸

寺院都テ扣所虎ノ間、

右同

一 南泉院僧正

右、進上物御対面所御上段御敷居内一疊目ニ進物番備

之、同下ニテ御礼、表御年男披露、御右ノ方内一疊^⑩同

目上ニ着座、御家老御取合 御意又御取合有之、

一 御茶表御年、男上、南泉院へモ被下給仕表、御小姓、畢テ御礼、御家老

御取合有テ退座、

一 福昌寺

右、進上物御上段御敷居内一疊目末ニ進物番備之、同

御敷居外一疊目上ニテ御礼、表御年男披露、御右ノ

方御敷居内一疊目ニ着座、以下南泉院同断、

一 平等王院 大乘院 淨光明寺 √^① 一乘院 △ 弥勒院

大龍寺

右六ヶ寺、御上段御敷居外一疊目ニテ御礼、表御年男

披露、御敷居内一疊目下へ着座、以下右同断、

安永二年巳

一一二九二

一 加治木長年寺ノ儀、格別由緒ノ寺ニ候付、御目見寺被

仰付、住替ノ節、虎ノ間申渡、門前下馬札ヲモ被建置

筋被仰付被下度旨、島津兵庫殿願ノ趣有之、願ノ通被

仰付、寺格良英寺上ニ被仰付候、

巳十一月

一一二九三

一 南泉院 福昌寺 平等王院 大乘院 淨光明寺

一 乘院 弥勒院 大龍寺 寶満寺 神徳院

山内寺 正興寺 大慈寺 廣濟寺 感應寺

不断光院 正建寺 幸善寺 壽國寺 本永寺

遠壽寺 願成寺 正國寺

右一列

飯限山 般若院

右一列

本田甚次 執印丹下

右一列

右廿七行門首被仰付置候処、今度出家沙門神職一列ニ

右之通列ヲ被分、向後御祝儀事等被申上候節、右列ニ

テ被申上筋被仰渡、

押礼

平等王院、当時ハ大乘院兼帯被仰付置候、以後平等王

院住持列ニ被仰付候節ハ、大乘院ヨリ寺格宜候付、福

昌寺次被仰付候、大慈寺儀モ紫衣ノ僧住持ノ節ハ先年

被仰付置候通、紫衣ノ僧一世ハ大龍寺次被仰付候、

元文元年辰十二月

(鳥津久實)
主殿

享保十五戌十二月

一一二九四

(例により補)

僧官成御礼物 令条記卷三十七

一本永寺 遠寿寺 願成寺 正国寺

右四ヶ寺、只今迄ハ住替之節御家老承、於虎之間寺社

一一二九六

(令条記卷三十七 五六五号)

奉行より申渡来候へとも、自今以後住替之節より達

僧正成

貴聞、於敷舞台御家老直申渡被仰付、御祝儀被申上候

禁裏

白銀五枚

儀其外都而之儀迄も、別紙一列十九ヶ寺同前被仰付候

上臈御局

金沓歩分

間、可承置旨被仰渡、

長橋御局

同断

享保十五戌十二月

大御乳人

同断

一一二九五

東
春宮御所

白銀三枚

金沓歩分

一於敷舞台住職御家老申渡門首ノ寺院、隠居申渡候儀、

上臈御局

同断

於虎之間寺社奉行申渡来候へトモ、住職・隠居共於敷

本院御所

御乳人

同断

舞台御家老申渡筈候、

上臈御局

金沓歩分

一於虎之間住職寺社奉行申渡候寺社家ノ儀モ、住職・隠

勘廣ケ由小路御局

同断

居共於虎之間寺社奉行可申渡旨被仰渡、

中宮御所

右同断

上藤御局〱 金老歩分

兵部卿御局〱 同断

上卿 同断

職事 同断

宣旨 同断

兩伝奏 同断

雜掌四人 銀二十匁宛同

法印成

禁裏

黄金老杖 白銀老杖

上藤御局〱 同断

長橋御局〱 同断

大御乳人〱 同断

白銀三枚 白銀老杖

上藤御局〱 同断

御乳之人〱 同断

白銀三枚 白銀一枚

上藤御局〱 同断

勘々由小路御局〱 同断

本院御所

春宮御所東

中宮御所 白銀三枚右同断

上藤御局〱 白銀一枚

兵部卿御局〱 同断

内侍所 白銀四十匁

上卿 白銀六十匁

職事 同断

宣旨 同断

兩伝奏 同六十匁宛

御太刀代 同五匁

雜掌四人 同二十匁宛

法眼成

御所方并御局方へ僧正成同前

上卿 白銀一枚

職事 同断

宣旨 金一步分

兩伝奏 白銀一枚宛

雜掌四人 同二十匁宛

法橋成

禁裏

拾帖一卷、縮編チリメンニテモサヤニテモ紗綾

右位記宣旨等被申請候御礼物

上臈御局同断 白銀一枚

位記 白銀六十匁

長橋御局同断

宣旨 同断

大御乳人同断

御請印 同一枚

春宮御所東

右同断 金一步分

▽ 兩伝奏 中務大輔 銀子一枚同断

上臈御局同断

主鈴 同六十匁

御乳之人同断

中務少輔 同一枚

本院御所

右同断 金壹歩分

雜掌四人 同十五匁宛

上臈御局同断

但 右位記致焼失被申請候職事へモ六十匁出申候、以上、

中宮御所

右同断 金壹歩分

上臈御局同断

兵部卿御局同断

寺院諸法度

上卿 同断

▽ 職事 同断

一一九七 (令条記卷九 一〇〇号)

宣旨 同断

永平寺諸法度

兩伝奏 金一步分

一 遂三十年之修行、致江湖頭之經五年、僧有転衣之望

雜掌四人 鳥目五十四匹同断

者、以嗣法師之推挙状、致登山可申理、自当寺

就云奏_ニ申_テ降_レ綸旨_ハ、以_テ其上_ニ出世_ト転衣_可レ有_テ披露_ス、

付_シ、出世_之戒_臈者_ハ、可_レ為_テ綸旨_{之日}付次第_ノ事_ト、

一非_ハ三十年_ニ修行_了畢_者不_レ可_レ立_テ法_幢事_ト、

一至_ニ紫衣_者、当_テ寺_ニ摠持_寺為_テ当_位之_仁者_ハ、經_テ奏_聞、勅_許之時_ニ可_レ有_テ着_用、兩_寺之外_ニ一切_ノ不可_レ着_用、於_テ退_院者_ハ可_レ脱_紫衣_事、

紫衣事、

一開山_忌越前_一國_{之外}諸_末寺_不殘_可出_仕、

但、遠_國者_ハ可_レ為_テ志_趣次第_ノ事_ト、

一日本_曹洞下_之末_流、如_先規_可守_當寺_之家_訓事_ト、

右、近年_法度_相亂_、往々_紫衣_・黄_衣着_用之_僧滿_巷街_、

違_于仏_制、受_人嘲_、法_道陵_夷無_甚於_此、且_為仏_法紹_隆

且_為宗_門繁_榮相_定畢_、若_於違_背之_僧徒_有之_者、可_レ処_流

罪_者成_、仍_如件_ト

元_和元_年乙_卯七_月日

二二九八

(令_条記_卷九 一〇一_号)

摠持_寺諸_法度

一遂_二二十年_一之_修行_、致_江湖_頭、經_五年_僧、有_轉衣_之望_者、

以_嗣法_師之_推挙_状、致_登山_、可_申理_之、從_當寺_就伝_奏

申_降綸_旨、以_其上_ニ出_世轉_衣可_有披_露事_ト、

〔令_条記_二〕_一なし_、前_文に_続く_事、
一_出世_之戒_臈者_ハ可_レ為_テ綸旨_{之日}付_{次第}事_ト、

▽附、非_ハ三十年_ニ修行_了畢_者不_レ可_レ立_テ法_幢事_ト、△

〔令_条記_、こ_こより_一つ_書き_始む〕
至_ニ紫衣_者永_平寺_・当_寺為_テ住_仁者_ハ、經_テ奏_聞、勅_許之

時_ニ可_レ有_テ着_用、兩_寺之外_ニ一切_ノ不可_レ着_用、於_テ退_院者_ハ可_レ脱_紫衣_事、

一開山_三代_忌共_、加_賀・能_登・越_中三_ヶ國_ノ諸_末寺_不殘_可出_仕、

但、遠_國ハ_可為_テ志_趣次第_ノ事_ト、

可_出仕_、

右、近年_法度_相亂_、往々_紫衣_・黄_衣着_用ノ_僧滿_巷街_、

違_于仏_制、受_人嘲_、法_道陵_夷無_甚於_此、且_為仏_法紹_隆

且_為宗_門繁_榮相_定畢_、若_於違_背之_僧徒_有之_者、可_レ処_配流_者也_、

仍_如件_ト、

元_和元_乙卯_七月_日

二二九九

(令_条記_卷九 九四_号)

五山_十利_諸山_之諸_法度

五山_十利_諸山_之諸_法度

一東班西班牙^官轉位間資、可為^如寺法事、

一康弘ハ叢林之典章、出世之初歩也、^然近年狼依申下無

弘之帖、康弘既雖^欲及退轉、於向後者無弘之帖堅^令停止事、

一南禪寺ハ深紫衣、大龍寺ハ淺紫衣、其外京都・鎌倉之

五山黃衣、十刹諸山ノ出世・入院・開堂儀式等可^被相

守先規事、

一南禪寺者龜山法皇改皇后^居為禪刹、尊崇異他、勅書云、

長老職之事、選器量卓拔才智兼全而佛法為重担勤行為

志節之仁、可補任者也、僧者不必以貴人為尊、乃至雖

吾子孫不可以勢住持云々、^然近年乍在他山恣申下兩禪

之帖、紫被僧其員過本寺、甚以無謂、向後本寺之外狼

不可補任、

但、善德碩學之仁希有雖免之、稱唯^惟兩禪位、可為本

寺之次座事、

一新院建立之時、申下綸旨奉書、塔頭披露者^被先規也、▽

然近年為私稱寺号院号事、自由之至也、△向後可有^令之

嚴制事、

一庄園方今度差出之上、碩學^料領相定畢、撰器用、一代宛

可省之事、

一鹿苑蔭涼之官職者先代之規範也、當時不足叙用、毀破

之畢、自今^以已後、以五山長老之中歸依之僧一員可兼備

之^{ナシ}、出世之官資并入院、出世之規式等ハ、如先規可賞^有

重賞事、

▽右条々、為寺法相統學問昇進、所相定如件、△

元和元乙卯年七月 ^{年乙卯}▽家康公御朱印△

一三〇〇 (令条記卷九 九八号)

妙心寺諸法度

一僧臘轉位并仏事勤行等、可為如先規寺法事、

一參禪修行就善知識^(職カ)、三十年費綿密工夫、千七百則話頭

了畢之上、遍歷諸老門、普遂請益、真諦俗諦成就、出

世望之時、以諸知識之連署於被言上者、入院開堂可許

可、近年狼申降綸旨、或僧臘^(高カ)不當或臘行未熟之衆依令

出世、匪啻汚官寺、蒙衆人嘲者、甚違仏制、向後有其

企者、永可追却其身事、

一新院建立之時、申下 綸旨、塔中披露先規也、然近年

為私称寺号院号自由之至ナリ、向後令停止事、

一常住領・諸塔頭領、如今度差出、永可有收納事、

一諸院各塔主、如先規可為輪番、

但、雖為其門派、或若輩或不器之衆可除輪番事、

右之条々、為寺法相統、所相定如件、

元和元乙卯七月

一三〇一

(令条記卷九 九七号)

大德寺諸法度

一僧臘転位并仏事勤行等、可為如先規寺法事、

一參禪修行就善智識知、三十年費綿密工夫、千七百則話頭

了畢之上、遍歷諸老門、普遂請益、真諦俗諦成就、出

世衆望之時、以諸智識知之連署於言上者、開堂入院可

許可、近年猥申降 綸帖、或僧臘不高或修行未熟之衆

依令出世、匪啻汚官寺、蒙衆人嘲者、甚違干仏制、向

後有其企者、永可追却其身事、

一新院建立之時、申降 綸帖、塔頭披露先規也、然近年

為私称寺号院号事自由之至也、向後令停止事、

一常住領・諸塔中領頭、今度相改別紙録之、永可有收納事、

一諸院各塔頭注、如先規可為輪番、

但、雖為其門派、或若輩或不器之衆可除輪番事、

右条々、為寺法相統、所相定如件、

元和元年乙卯七月ナシ、日家康公御朱印△

一三〇二

(令条記卷八 九一号)

真言宗諸法度 ∇醍醐寺へ被下之、△

一從四度加行至授職灌頂、師資授法之儀、議式并衣体色淺深、

可為如先規寺法事、

一事稠相教數相習学觀心尤最為專要事、

一修法者護国利民之基也、仍密宗之建立以之為肝心、弥

可抽四海安全之丹精事、誠

一破戒無慙之比丘、可令衆拔事、

一諸末寺可相守本寺之法度、若有法流中絶之儀ハ不求他

流可ナシ自門之濫觴、自由之企於在之者寺領可改易事、可改易寺領

一新義之僧積二十ヶ年学問之功、遂住山三ヶ年、其後帰誠

国法談可為一会、

但、數年住山之仁、於有、教道器量之譽者、任能他之化

許、可令常法談執行事、

一於論席徒謗能他、企公事、妨学業事、甚以惡僧也、速

可令擯出於其長本事、

一於紫衣ハ殊規模之事也、無勅許僧侶猥不可着用事、

一延喜御、所贈賜高野山大師之御衣、号檜皮色、或深染

香色、或調紫衣、用赤色、然間於香衣ハ非密教之棟梁・

有智之高僧・公達ハ、兼僧而不可着用之事、

一在国ノ僧、近年猥申下上人号、着用香色、甚以無其謂、

自今以後令停止之事訖、

但、有智者之譽輩ハ格別之事、

右、可相定此旨、若違背之僧徒於有之者、可处配流者

也、仍如件、

元和元年乙卯七月日

▽御朱印△

一三〇三

高野山衆徒諸法度

(令条記卷七 七九号)

一檢校職之事、自今以後碩学之人者如古来可為三ヶ年之住

持、但学衆之人者可為一ヶ年之住持者也、其外老若之

修学、衣鉢之威儀、可守先規之事、

一仁和・高雄・東寺・醍醐并高野、此五ヶ寺互致交衆可

勸事教之修学、此旨弘法之遺誡仁門徒之間修学最初成

出可長者不可乱臘頭兩云云、然近年仁和・高雄・東寺・

醍醐為本寺之由、雖被募其旨、遺誡分明之上者、法会

出仕之時、門跡僧正之外、任戒臘兩可有列座事、

一寺号院号先規趣不許事也、然共近年恣称寺院号、其無

謂、令停止事、

一灌頂授職之作法、或云由緒末寺、或云貧僧結縁、輒執

行、於客坊・奥院等ノ非衆非学之宿所、灌頂曼供之執

行無先規之由、堅可令停止之事、

一高野明神ハ高野之鎮守也、祭礼神事惣テ神主・社家・

供僧守先規不可企新儀事、

先年定寺法、雖成渡黒印、今度依諸寺諸社之法度、五

ヶ条重テ所相定事、

元和元乙卯七月日

(令条記所収の本法度は慶安二年九月二十一日頒下のもの。元和元年七月日・同三年九月十一日兩先判之旨に任せ相守るべきとあり。)

一三〇四

(令条記卷十 一〇六号)

淨土宗諸法度

一 智^知恩院之事、立置宮門跡、門領各別相定上者、不可混雜^混寺家、引導仏事等ハ定脇住持如先規可致執行、於寸念^寸為結縁門主自身可有授与事、

▽ 一 於京都門中撰器量之仁六人、為役者可致諸沙汰、曾而不可有最負偏頗事、△

▽ 一 碩学衆於円戒伝授者、調道場之儀式可令執行、浅学之輩^輩不可授与事、△

一 对在家人、不可令相伝五重血脉事、

一 淨土修学不至十五年者不可有兩脈^血伝授、殊更於璽書許可者、雖為器量ノ仁不滿二十年者堅不可令相伝事、

一 糺明学問之年臘、増上寺当住并其談儀所之能化以兩判添状可啓本寺、於令満足二十年之稽古ハ可^令頂戴正上

人之綸旨、不至二十年者可為權上人事、

附、十五年以來之出世之座次、可有正權之^差分別事、
一 非古來之学席者私不可立常法幢事、

一 不解事理縱^横積^際之源義、着相^感文之族、貪着名利不可致

法談、仮六蒙尊宿ノ許可、可^{サツ}令雖令勸化、空^ツ闊^キ二^ハ仏經

祖^ノ積^ル偏事^ニ狂言綺語^ヲ妄^ニ愚夫耳、剩自讚毀他最是為

法衰ノ因諍論之縁堅可制止事、

一 往來之智識^{知者其所}等前之門中無許容聊^兩三不可致法談事、

一 若輩ノ砌、及十ヶ年致学問、其後令退転之僧、望色袈

婆者、依其人体六十歲已後^以可許之、

但、於上人ノ儀ハ可有斟酌事、

一 為平僧分、仮雖老年不可致引導事、

一 於淨土宗諸^寺宗家者^{サツ}仮雖為師匠之附属恣不可住職事、

一 就相替古跡之住持ハ可令血脉附法相統、若於為前住没

後ノ入院ハ至流儀之源可致^受伝授事、

一 紫衣之諸寺家之住持、^致隱居之時可脱紫衣事、

一 大小ノ新寺、為私不可致建立事、

一 借在家構^前仏壇不可求利^兼營事、

一 於智識分座次ハ、以血脉綸旨ノ次第上下之品可相定事、

一於法問商量ノ座敷ハ以學問之戒臘可定上下、至其外之

衆會者、以出世ノ前後着座スベキ事、

可着座
可列座平僧之上

一於所化・寺僧ノ会合ハ、選扱以上ハ平僧ノ上可列座事、

一平僧分ノ中、声明法事等ノ役儀有其嗜輩者、同臘ノ内

可居上座事、

一不弁階級ノ浅深、恣高举自身、对上座致緩怠輩ハ、永

不可会合事、

一諸寺家ノ住持、任自己之分別、背出世ノ法儀ハ為寺中

之老僧兼テ可加異見、不然者可属同罪事、

一白旗流義諸国ノ末寺、隨其大小、集調報謝錢、三ヶ年

一度宛以使僧可備影前事、

一出世之官物之事、輪旨ノ分銀子二百文目、参内ノ分五

百文目、若為兩様同時ハ七百文目相定上者、不可論米

穀ノ高下事、

一末々、諸寺家者、其本寺可致仕置、若有理不尽、沙汰

者可為本寺之私曲事、

一一向無智ノ道心者等对道俗授十念勸男女与血脉寔以法

賊也、自今已後堅可停止事、

一惣徒出来、近年興邪法、違経文釈義、私勸安心、闕六

字名号唯称三字、廻種々謀計、誑惑衆生、是須魔民

ノ所行、速可令追払事、

一号靈仏靈地之修理、不可諸国勸化事、

一任旧例、夏安居從四月十五日日期六月二十九日、冬安居

自十月十五日可至極月十五日、聊不可有処促事、

一於一夏中客殿ノ法問十、則、下談法問十一則、無欠減

可令專扱、并湯日ノ外不可有談場懈怠、冬安居可為同

前事、

一解問ノ事、春自二月朔日期三月二十九日、秋自八月朔

日可至九月二十七日、如兩安居物談法問不可有懈怠事、

一頌義十人、以下ノ僧不可為寮坊主事、

一諸談所ノ所化、自今以後、雖令他山、老若共不可附替

同名、

一於一寺追放之所化者諸談所ノ会、不可有之ノ事、

付、寺僧同宿、可為同前事、

一諸檀林所化ノ法度悉以可復従上事、

右三十五ヶノ条々、永代可相守此旨、於違背ノ人ハ、

随科ノ輕重、或^可令流罪、或可脱^知三衣者也、

元和元年乙卯七月^日 御判[△]

▽右ハ、智恩院并増上寺・傳通院之被下之、△

一三〇五 (令条記卷十 一〇七号)

浄土西山流諸法度

一所化衆入、三年ノ間、先習学先徳ノ古抄、於衆徒ノ前

毎日誦^誦誦、依利鈍遲速可有之事、

一衆入三年ノ後、許写聖教^号ノ立筆事、

一頂戴聖教後、就善導ノ御疏^五兩部九卷選択等受伴頭ノ指

南、三經一論^之談決^之可令修練事、

一及中年選其器量授法可統宗^麻縁事、

一当麻曼陀羅注記十卷證空ノ作也、以此注銘文絵相問答

一年余、再聽再問、隨其根思量工夫相熟時、血脈相承

在之、^{券之}兩部令^{ナシ}伝授^{ナシ}後、許寺中ノ小役可令居伴頭事、

一円戒伝授血脈相承可有之事、

一修法修行器用卓拔之仁、衆徒門中相儀^儀許色ノ袈裟、一

七日ノ間令成道、遂門中披露、則可為能化分事、

一辻談^儀議^街ハ称^街衢談巷語先輩^雖厭之、近代^年為^士勸^勸土檀^勸勸其企

有之、尤非正法令停止事、

一香衣ノ綸旨頂戴ノ事、殊仏法世法共成就、俗諦真諦齊

帰依、年過耳順令推拳事先例也、雖然近代不限当宗出

世漫有之、自今以後復旧例、隨其器量年数、衆望ノ時

遂奏聞、綸旨可有頂戴事、

故可相守此旨者也、

元和元年乙卯七月日

▽右ハ栗生光明寺依為無住、當麻禪林寺之被下之、△

寺院社家

一三〇六

一南泉院僧正

右ハ、先般上京、正官成被蒙 勅許、出府有之、公義

御目見ノ儀ヲモ御願立有之、十月朔日 御目見被 仰

付、同七日御暇拜領物被仰付、且又山門玉照院兼帶ノ

儀是又御願立有之候処、同二十一日上野 御殿へ被為

召、玉照院現住不依有無、永代南泉院兼帯被仰付、

令旨頂戴、御礼勤向等無残所相濟候段申来候条、可承

向へ、申渡候、

天明八申十二月

(島津久邦)
石見

(二二八八号文書に同じ)

二二〇七

一地神盲僧共為改方 青蓮院御門跡御支配片岡隼人・南

司馬知事院代見明院上下十五人被差越管候段ハ先達テ

申渡置候処、肥後熊本辺^①入込候聞得有之候^②付、若^③、

領内へ入込模様候ハ、水俣又ハ近方止宿ノ所へ見廻、

領国中地神盲僧ノ儀ハ古来ヨリ神徳院触下天台宗ニテ

日光宮様御支配下ニ相成居、無本寺無支配ニテ無之段

ハ、去年十月京都留守居ヨリ鳥居小路式部卿方へ申達

置候通ニテ、猶又 日光宮様御方へモ去冬御掛合申上

置候、右御返答迄当領へ差入被扣居候趣モ候ハ、勝

手次第可被致様ト相応ニ可致演説由ニテ、横目山口孝

右衛門・山田次左衛門被差越候、

天明八申四月

(朱書)
「本書朱書ニテ候」

二二〇八

一地神盲僧惣家督浄染藤野寿仙ヨリ寺社奉行へ相付、地

神盲僧惣家督ノ儀、根元比叡山東谷志野尾妙音寺住職

相勤候宝山檢校ト申盲僧 御元祖様ヨリ御祈禱座頭被

仰付無断絶相勤来、檢校以来代々惣家督ニテ御目見被

仰付来候処、役中絶^①ヨリ、以前ノ通、以来 御目見被

仰付被下度、左候テ正法山妙音寺大徳院ト寺山院号有

之、盲僧一派ノ門首ト被召建置候付テハ、以来諸書付

等ニモ寺号等相記候儀、且身分ニ付テハ院号迄惣家督

住職ニ付相用候儀、御免被仰付被下度奉願候由、願申

出趣有之、求馬殿ヨリ被相渡候御付書ノ写、

本文願ノ趣、無抛儀候故、以前ヨリノ由緒旁ノ御取分

ヲ以、御目見迄願之通被^②御免候、

寛政三亥六月

(島津久通)
求馬

一三〇九

福ヶ迫諏訪神主井上左膳

花尾山神主 井上右内

右^{⑨は}、先達テ神主職叙爵ノ家ニ被仰付置、此節京都吉

田家ヨリ神主号戴^{⑨符}有之候付、以来年頭其外屹ト致登

城候節ハ、諏訪神主本田彈正同様、虎之間東脇雁木ヨ

リ罷登リ、虎之間へ相扣、門首席ニテ御礼可申上候、

進上物ノ儀モ同様被仰付旨被仰渡、

寛政元酉六月 登^(島津久連)

(一一二八九号文書に同じ)

一三一〇

一御領国ニテ寺院別当ヲ無故座主ト相唱候儀ハ有之候間

敷事候間、別当ト相唱、書付等ニモ可致候、アサナ等

ニ座主ト唱候所モ相改候様ニ被仰渡、

元文二巳六月

一三一

一諏訪神主

右、官有無^(無差別之)ノ差別、左之両家上ニ可罷在候、

一福ヶ迫諏訪神主 花尾山神主

右、家順ハ此通ニテ、座順ハ時々ノ可為官順候、

右之通被仰付候旨被仰渡、

天明七未八月

(一一二九〇号文書に同じ)

一三一二

一花尾^{⑨山}神主 御切米二十五石

一社家兩人 御切米四石ツ、

右、前条神主へ被召付置候、

一社家屋敷一ヶ所

右、御宮近辺へ被下置候、

一神主家作六十帖敷位ニ造立、以来修覆等ノ儀ハ門外廻

表向座敷迄寺社家修補所ニ申付、居間ヨリ末自分修補、

社家兩人家作ノ儀モ三十帖敷位ツ、已後ノ儀ハ表一

通同断修補所ニ申付候条、座敷等ノ儀ハ絵図面ヲ以可

申出候、此旨寺社奉行へ申渡、可承向へモ可申渡候、

天明七未八月

(市田教四)
勘ケ由

右、御祓執行、備物神酒、

右之通神主作法相勤、別当寺勤行ハ是迄之通、

一頼朝公・丹後御局御法会之節ハ、於御社頭大雄山御宮

ノ通被仰付候旨被仰渡、

天明七未八月

一三三三

一花尾山神主、此節新規被^{①百}相立候付、祭礼等ノ次第左条

ノ通ニテ、神主平日ハ狩衣ニテ同勤坊舎四ヶ寺并平等

王院看坊ノ儀モ一人ツ、御社頭へ可相詰候、

一正月元日 一同二日 一同七日 一二月朔日

一三月三日 一四月十五日 一五月五日 一六月十五日

一七月七日 一十一月朔日 一同廿四日 一十二月十五日

一臨時ノ祭

右十三ヶ条、御祓・御神楽執行、備物神酒・花・米・

賽銭、

▽^②一正月十三日△ 一九月九日祭礼 一十二月十二日

右、ヶ条、御祓・神供・神楽・奉幣執行、備物神供・

神酒・野菜・^{③木}水菓子・干菓子・餅、

一毎月朔日 十五日 廿八日

一三一四(の1)

一英彦山七十五坊之修験中、御儉約ニ付、廻檀ノ山伏不

来菅候、去年八月申渡置候へ共、彦山坊中無拠願之

趣有之、五錢三錢ノ半減勸物致受用菅、右員教難差出

者ハ其内ニテモ不苦候、尤、讒迎モ勸物難罷^④出者モ可

有之候間、右体之者へハ押テ出方不申掛様、彦山へ申

越候条、回檀^⑤入来候ハ、右通勸物可罷出旨被仰渡、

明和七寅七月

(一三三四の2)

一右同断仰渡、

天明二寅正月

(島津久健)
仲

一三一五

一江戸護摩所御引取、左候テ、右へ御渡方別段被差分置、

一万兩ニ及候節ハ、其首尾申出、士共致困窮当日飢渴

之者共へ御救被仰付①候、御賢慮ニ被為在候旨被仰渡、

安永三年

立儀有之候テモ御取揚無之筈候旨被仰渡、

享保五年子六月三日

一三一八

落穂集

一日州那珂郡飢肥時衆宗光照寺ト申候テ末寺モ二三ヶ寺

有之寺、浄光明寺触下ニナリ候処ニ、是又直触ノ願有

之、入組ニ罷成、浄光明寺使僧一水房・寿門房已後浄光明寺

ニ成、足下、兩僧藤沢山へ被差登候、飢肥ヨリハ歴々ノ土

附居、方々へ物入ノ附届共有①之、藤沢山ニテモ触下被

相除筋ニ被存事ニ成立、時衆宗他派迄ノ惣触頭江戸浅

草ノ日輪寺ヲ藤沢山へ相招キ、日輪寺嚙ニ成、兩使僧

へ、今度浄光明寺触下ヲ差免候ハ、浄光明寺事ハ一

宗ノ高官ニ可被仰付候間、其筋ニ致落着候様ニト被申

聞候へトモ、此節ノ儀寺格ノ願ニ為差越儀ニテ無之、

薩隅日三州ノ触頭ニ被仰付置候詮相立候筋ノ訴ニ申付

為差登事ニ候、为使僧右被仰聞趣ノ儀ニ御請難成段申

理候故、日輪寺モ此上可被申付様無之、殊之外立服①服ニ

一三一六

一龍洞院

右、寺格安養院同格被仰付、任職之儀、弥勒院兼帯ニ

テ候、年頭御礼進上物等ノ儀、安養院同前被仰付、

享保十巳十一月十六日

一三一七

一大乘院 浄光明寺 大龍寺

興國寺 南林寺 (妙善寺之) 妙善寺

右六ヶ寺役人、片書名字且又刀指ノ儀被成御免候間、

可申渡候、

但、右外外城寺院ヨリ右之例ヲ引候様ノ由緒ヲ以申

テ、何事ニモワカラサル出家共ニ①候トテ如江戸被罷
帰候故、浄光明寺申分相立、如古来触下②被申渡、両
使致安堵被罷下候、

一右之通、両使僧罷登候節、於江戸御家老衆被聞召届候
節、其席へ可相詰旨被仰付、予事相詰候故、右子細委
承置候、然処享保十七壬子①之年、遊行五十世快存上人
廻国ニ付、予事松崎藏右衛門殿ト兩人②馳走人被仰付、
出水迄迎ニ参、中途寺々へ滞在有之、九月末鹿兒嶋へ
着ニテ浄光明寺へ滞在、十月末門中ノ出家段々出世被
申付、浄光明寺ニ限り何ノ沙汰モ無之故、罷帰得ト致
工夫、此時節申立候③、足下地ニモ可罷成哉ト考付候
故、翌日現住寿門上人へ右之趣申談候へハ、尤ノ儀ニ
候、自分ニハ成程存寄居候へ共、身ノ上ノ事故不被申
出罷在候間、本立寺抔へ致相談可然由之故、藏右衛門
殿ニモ申談、本立寺へ致相談、是又同意ノ故、致登
城遊行座へ罷出、寺社奉行頼娃左京殿へ右之趣申上、
早速本殿へ被相伺、弥其通相計ヒ見可申由、本殿被仰
候旨、左京殿ヨリ致承知、同役藏右衛門殿へ右之旨申

達、具為申談事ニ候、

朱書（以下七行、薩陽落籠集になし）
一足下寺、日本ニ三ヶ寺ナリ、甲府ノ一蓮寺・飢肥ノ光

照寺・御国ノ浄光明寺ナリ、或ハ曰、浅草④日輪寺・
最上ノ光明寺・薩州ノ浄光明寺ナリ、一蓮寺ハ足下ノ
内ニテ一老寺ノ事ニテ格別ノ由、

一四院五阿ト云有、五阿ハ法阿・其阿・但阿・覺阿・弥
阿ナリ、浄光明寺ナト五阿上人ノ内ナリ、本立寺モ其
内ナリ、

一右ニ付テ、噌啖郡念仏寺へ遊行上人御留ノ節、被付居
候老僧衆不殘藏右衛門殿旅宿へ相招、此節御下向ニ付
テハ（薩陽落籠集により補）浄光明寺事、足下に可被仰付ト私共存居候へ共、
何の御沙汰も無之、△浄光明寺ノ儀ハ清水山ト申テ当
分ノ本⑤寺ノ地ニ有之候処ニ、中納言家久代ニ当テ
当分ノ処へ引直シ、松峯山ト号、其跡⑥本立寺ヲモ相
建申候、依之、右建立ノ訳ヲ以、其時分ノ遊行上人ヨ
リ薩隅日三州ノ触頭ニ被仰付、順足下地ニ被仰付候、

本ノ触頭ハ当所ノ念佛寺・伊集院ノ龍泉寺兩寺ニテ有之候、家久建立ノ訳ヲ以テ右通為被仰付事ニ候処、此節ノ儀ハ、当 上総入道御宗門ニ罷成、是又近キ比失火ニテ浄光明寺及類火、急火ノ故本尊御置文ヲ⑨始校割諸道具一品モ不殘令燒失候処ニ、太守ヨリ只今之通致建立、至諸道具等不足無之様ニ寄附申付候付テハ、格別ノ建立ニ候へ者、右ノ御取訳モ可有之哉、先年飢肥ノ光照寺触下除之願有之候節、淺草ノ日輪寺被差越、兩使僧光照寺願ノ通触下差免候ハ、浄光明寺ノ儀ハ足下地ニ可被仰付由為被申聞儀モ有之、其節候予事江戸へ罷在、右之儀ニ携リ委為存事ニ候へハ、此節ハ足下ニ被仰付儀無別条存罷在、國中ノ者ハ、犬打童子迄モ其通為申事候処ニ、此節門中ノ出家共不殘出世被仰付、浄光明寺ニ限り何ノ沙汰モ無之候へ者、相仕廻罷帰候節、家老共ハ不及申、上総入道ヨリ為何訳ニテ右之儀御沙汰無之候哉ト尋ノ節、為御馳走人相付罷在、不存トハ難申候間、何様ノ訳方不被仰付段致承知置度旨申達候処ニ、老僧中被申趣モ有之候へトモ涯立候儀

無之故、不被仰付ハ無是非儀候へトモ、訳ヲ致承知置、以後相尋候節ノ申披キニ仕度由申達候処、洞雲院ヨリ被仰聞趣御尤ニ候、此儀者誰モ不存候へトモ私一人⑩兼テ被申聞置候ハ、浄光明寺出世ノ儀ハ跡ニモ志布志⑪上人⑫餞別之時分有來たる儀候間、此節も於志布志△足下ニ可被申付旨被申聞置候間、御念遣被成候間數旨被申聞候間、我々迄モ、其通ニ候へ者別テ難有次第ニテ致安堵候由致挨拶置、翌日上人旅寺念仏寺へ罷出候処ニ、老僧中不殘上人ヨリ御用ノ由ニテ被罷出候跡ニ衆領軒一人殘居、予ヲ近ク呼、夕部老僧共ニ承候訳具ニ致承知、御尤ノ儀ニ候、弥此節被申付答ノ儀、兼テ拙僧一人ニ被申聞置候間、念遣被成間敷候、志布志餞別ノ時分被申付答ニ候へトモ、早ク被申付筋ニ思召候ハ、急ニハ難調候間、於都之城申付筋ニモ可有之候、此儀ハ御馳走人ノ思召次第ニ候由承候、世話ニモ吉事ハ寄セヨト申事候間、トフソ早々被仰付被下候へ者我々モ安堵可仕由申達、左候ハ、都之城ニテ被申付筋ニ上人へ可申達由返答ニテ、於都之城足下ニ被申付候、我モ

同席へ相詰見届候様ニトノ儀ニテ一座へ罷在候、書付一通檀紙ニ相調、外ニ上人ノ袈裟衣ニ南無阿弥陀仏①ヲ自筆ニ記、上人ノ名印有之候ヲ被相渡、右書付ヲ上人自分ニ読聞被相渡候、意味ハ口ニ少シ足下ニ成候文儀有之、跡ハ甲州ノ一蓮寺ハ足下ノ内ニテモ一老寺ノ事ニテ格別ニ候、浅草ノ日輪寺・最上ノ光明寺ト浄光明寺三ヶ寺同格ニテ、皆臘次第座配有之旨ノ趣ニテ候、上人ハ上座ニ二帖畳ニ下リ向ニ着座、浄光明寺へハ客居ノ方ニ薄縁半帖敷有之候へトモ半帖ヲ押上其次ニ着座ニテ、茶執司ト申候テ会下中老ノ内ヨリ一人申付、右之僧給仕ニテ茶ヲ浄光明寺へ被振廻候迄之規式ニ候、左候テ、浄光明寺足下成ノ礼、老僧ヲ始衆僧罷在候小屋五軒有之、被見廻候へハ、老僧ヲ始衆僧庭上ニ出迎、殊ノ外懸勲ニ礼ヲイタシ取持拔群ニ相替候、其後ニ老僧衆咄ニ、当宗門ニテ足下ト申候格別ノ物ニ候、仮令ハ上リノ節、下ノ関ノ旅宿有之候へトモ、長門一國ノ一宗不殘不見廻候テ不叶法式ニ候由、各被申候、

一 其後足下成ノ礼ニ相州藤沢山へ被罷出候へハ綱代輿ノ

乗物免許、茶執司於御国元浄光明寺ヨリ被申付候へハ、於本寺モ其席へ務候儀免許有之候、茶執司ト申ハ遊行ノ会下ニテ中老ノ上之席ナリ、

一 足下ノ僧ハ遊行上人同然ニ絹布着用無之、綿布ノ故、袈裟モモメンノ風染ニテ候、

右足下成一巻ハ、予勉ノ内殊ニ受込ニテ成就ノ儀ニ候ユへ、遠慮ニモ存候へトモ、近代ノ新格ニテ委ク人ノ不知事ニ候間、此書ノ末ニ載置者也、以上、

一三一九(の1)

(御触書天明集成 二三七六号)

一 是迄寺院ノ出訴ハ本寺触頭ノ添簡ヲ以奉行所へ罷出、社人ノ出訴ハ添簡無之罷出候へトモ、已来地頭有之寺院ノ出訴ハ御代官・領主・地頭ト本寺触頭向添簡ヲ以可罷出旨、寺院・社人へ申触置候、御代官・領主・地頭ニテモ其旨可被相心得候、

右之趣、万石已上已下共ニ不洩様可被相触候、

二月

右之通可被相触候、

(一三一九の2)

右之通、從 公義被仰渡候条、此旨与中・支配中・諸
外城へ不洩様可被申渡也、

天明二年寅四月八日

御家老座印

一三二〇

一阿久根蓮花寺 玄恕

右、明六日於 御対面所 公文頂戴被 仰付候旨被仰

渡、
安永八亥三月五日

一三二一

一大龍寺 玄鱗

右、頂戴之 (公カ) 台帖来ル十五日於御書院 御覽被遊候、

安永六酉十月

靈符祭

一三二二(の1)

一明和九巳^(辰カ)四月、曾山久助^(文)御当地諸郷へ災難除之札配^(御)
方願出^(御)ノ内、

一私亡祖父恕心事、易道并星祭ノ法委ク修練為仕由、

(光久) 寛陽院様御代被聞召上、度々御前へ被召出、難有蒙

御意、右勉方并御扶持等被仰付、(綱重) 太玄院様御代ニ至

候テモ難有被仰付相勉来申候処、恕心相果引、次ニ私

親佐平次ニ右勉方ニ被仰付、(吉豊) 淨國院様 (維豊) 宥邦院様

(宗信) 慈徳院様 (重年) 圓徳院様御代迄相勉居候へトモ、 当御代

ニ至リ右御星祭御祈禱勉方私へ被仰付、難有次第奉存

候、 末略、

巳四月五日

(文) 曾山久助

(一三二二の2)

別紙ニ、 御城地へ靈符堂被遊御建立候訳ハ、 御先

祖中納言様御代、御城地ノ吉凶ヲ黄友賢被申唐人へ被

為成御占候処、鶴丸山ノ御城ハ四神相応ノ御城地ニテ

成程万事宜御座候へトモ一ツノ障御座候、火難ノ御城

成由申上候、然処、火難消除ノ法ハ無之哉ト御尋候、

其儀ハ唐土へ被仰遣、靈符尊神ノ御本尊御安置被遊候
ハ、火災ハ自然ト無御座答ト申上候付、御本丸相立、
則唐土へ被仰遣、靈符尊神ノ御本尊御求被遊様、御城
山へ為被遊御安置事ニ候、左候テ 光久公御代ニ罷成、
殊更御沙汰ノ余リ、御下屋敷へ御隠居被遊砌トモ右御
本尊御下屋敷へ御置ナリ被遊候テ、朝暮御勤行為被遊
由候、其時節 御本丸御焼失ト承、然共御下屋敷ニ
ハ一向火相掛不申、

一 太玄院様御代ニ至、右唐渡ノ靈符御本尊始、 寬陽院

様御自身御勤行ノ御法道具等不殘私亡祖父恕心へ拝領

候テ、御月次ノ御祈禱相勉来申候、其後総州様御代

被思召上訊有之、由ニ候、右拝領ノ内唐渡ノ靈符御本

尊ヲ御城内ニ御安置無之候テハ不叶候間、御屋形様へ

可差上旨被仰渡、恕心方ニハ写ヲ被成下候旨奉承知候

ニ付、則差上申候、其砌此方へハ木村村右衛門へ被仰

付、唐渡ノ御本尊ニ少モ相違無之様写被成下候テ、于

今看経所へ安置仕、朝夕不怠看経仕候、 末略、

巳四月

曾山久助

島津家歴代制度卷之二拾四 安永

二代忠時公 文永九年壬申四月十日

一 道佛仁阿弥陀仏 右同

三代久経公 弘安七年甲申閏四月二十一日

一 道仁義阿弥陀仏 右同

四代忠宗公 正中二年乙丑十一月十二日

一 道義忠阿弥陀仏 右同

五代貞久公 貞治二年癸卯七月三日

一 道鑑道阿弥陀仏 右同

貞久公御嫡子宗久公 曆応三年庚辰正月廿四日

一 久阿弥陀仏 (名) 隈之城称明寺

貞久公御子師久公

一 定山道貞 右同

六代氏久公 嘉慶元年丁卯五月四日

一 齡岳玄久 志布志即心院大慈寺内

七代元久公 応永十八年辛卯八月六日

一 恕翁玄忠 福昌寺

八代久豊公 応永廿二年乙巳正月廿一日

一 義天存忠 惠燈院

一三三三

御代々御安殿

御元祖忠久公 嘉祿三年丁亥六月十八日御逝去

一 得佛道阿弥陀仏 浄光明寺

九代忠国公 文明二年庚寅正月廿日

^(義弘)義久公御嫡子久保公 文祿二年癸巳九月八日

一 大岳玄譽 深固院

一 唯恕參大禪定門 皇德寺

十代立久公 文明六年甲午四月十一日

十八代家久公 寛永十五年戊寅二月廿三日

一 節山玄忠 龍雲寺

一 慈眼院殿花心琴月大居士 福昌寺

十一代忠昌公 永正五年戊辰二月十五日

十九代光久公 元祿七年甲戌十一月廿九日

一 円室源鑑 興国寺

一 寛陽院殿泰雲慈温大居士 右同

十二代忠治公 永正十二年乙亥八月廿五日

光久公御嫡子綱久公 寛文十三年癸申二月十九日

一 蘭窓津友 薩州吉田津友寺

一 泰清院殿関山良無大居士 右同

十三代忠隆公 永正十六年己卯四月四日

二十代綱貴公 寛永元年甲申九月十九日

一 興岳龍盛 隆盛院

一 大玄院殿昌道元新大居士

十四代勝久公 天正元年癸酉十月十五日

二十一代吉貴公 延享四年丁卯十月日

一 大翁妙蓮 右同

一 淨國院殿鑑阿天清道濃大居士 淨光明寺

十五代貴久公 元龜二年辛未六月廿三日

二十二代繼豊公 宝曆十年庚辰九月廿日

一 大中良等庵主 南林寺

一 有邦院円鑑亨盈大居士 福昌寺

十六代義久公 慶長十六年辛亥正月廿一日

二十三代宗信公 寛延二年乙巳七月十日

一 貫明存忠庵主 妙谷寺

一 慈徳院殿俊敵良英居士 右同

十七代義弘公 元和五年己未廿一日^(七月脱之)

二十四代重年公 宝曆五年乙寅六月十六日^(亥之)

一 松齡自貞庵主 妙圓寺

一 圓徳院殿寛満良義大居士 右同

忠久公御母堂 嘉祿三年丁亥十二月十二日

(空白、ママ)

花尾山

忠久公御夫人(人カ)

一 貞嶽院殿元光明一房

淨光明寺

忠時公御夫人 御逝去年間不知

一 得基院殿忍西生一房

右同

久經公御夫人 御逝去年月不詳

一 淨雲院殿妙智神一房

右同

忠宗公御夫人 御逝去年月不詳

一 理玄院殿惠照見一房

右同

貞久公御夫人 御逝去年月不詳

一 梅林院殿法麗聞一房

師久公御夫人

(空白、ママ)

氏久公御夫人 御逝去年月不詳 伊集院長門守忠国女

一 敬外(飲カ)飲公大姉

志布志即心院

元久公御夫人 正長元年戊申八月廿日

一 久山妙栄大姉

始良含粒寺

久豊公御夫人 御逝去年月不詳 伊東大和守祐安女

一 壽山妙久大姉

惠燈院

忠國公御夫人 御逝去年月不詳 新納近江守忠臣女

一 心華開安大姉

深固院

立久公御夫人 御逝去年月不詳

一 茂山妙才大姉

市木(米)龍雲寺

忠昌公御夫人 大友豊後守政親女

一 天真妙幸大姉

忠治公御夫人 御逝去年月不詳

(空白、ママ)

忠隆公御夫人 御逝去年月不詳

(空白、ママ)

勝久公御夫人 御逝去年月不詳

(空白、ママ)

貴久公御夫人 入来院彈正忠重(聰)女 天文十三年甲辰

八月十五日

一 雪窓妙安大姉

雪窓院

義久公御夫人 日新公御女 永祿二年己未十一月十八

日

三十日

一 花舜妙香大姉

華舜軒

一 信證院殿壽国総宗元持大禪尼(守カ)

壽国寺

右同後御夫人 種子嶋左近太夫時堯女

吉貴公御夫人 松平越中守定重女 元文四年己未八月

一 圓信院殿實溪妙蓮大姉

月香院

五日

義弘公御夫人 廣瀬氏、実園田清左衛門女 称宰相殿

一 靈龍院殿潜顕妙能日淵大姉

一 實窓芳真大姉慶長拾二年丁未(二月) 家久公御母堂 朔日

芳真軒

繼豊公御夫人 松平長門守吉元女 享保十二年未三月

家久公御簾中 義久公御女 寛永七年庚午十月五日

二十日

一 持明彭窓庵主

興国寺

一 瑞仙院殿松嶽貞高大姉(後御夫人カ)

浄光明寺

光久公御夫人 伊勢大隅守貞豊女 万治元年戊戌六月

繼豊公御夫人(後御夫人カ)

十一日

一 浄岸院殿

福昌寺

一 曹源院殿恵山永泉大姉

重年公御夫人 島津大学久(空白、尚カ)女 宝曆四年閏二月二日

綱久公御夫人 松平隠岐守定頼女 天和二年壬戌十一月七日

一 智光院殿心顔貞鏡大姉(正覺院殿、島津備中貴備女、延享二年十一月七日逝去) 重豪公御実母 長年寺

月七日

一 慈照院殿円應靈珠大姉(重豪室、一橘宗尹女、明和六年九月二十六日逝去)

一 真修院殿孝延日長大姉

福昌寺

右同後御夫人 甘露寺大納言規長卿女 安永四年十月

綱貴公御夫人 二階堂十左衛門宣行女 天和三年癸亥

二十六日

二月十九日

一 玉貌院殿華山妙嚴大姉 福昌寺

一 掩粧院殿身安貞法大姉

吉貴公御女

右同後御夫人 江田五兵衛國重女 宝曆六年丙子正月

一 玉泉院殿

淨光明寺

同御妾

一 慈照院殿

右同

光久公御女 織田因幡守信盛夫人 正徳元年辛卯七月

二十日

一 智性院殿円月壽相大姉

深固院

綱貴公御女 近衛大納言家久公御簾中 寛永二年乙酉

十月五日

一 英光院殿覺樹円明大姉

右同

吉貴公御女 近衛内大臣家久公(御脱之)後簾中 正徳五年乙未

十一月三十日

一 光相院殿寶岳慧勝大姉

惠燈院

繼豊公御実母 名越右膳恒渡女 延享元年甲子七月三日

日

一 月桂院心一猷珠大姉

淨光明寺

綱貴公御夫人 松平左兵衛督信平女 寛文十三年癸丑

正月五日

一 常照院殿観了日脱大姉

興国寺

綱久公御子六七様 万治二年己亥七月十五日

一 秋天幻鑑大禅童子

鹿府曹溪寺

綱久公御女子 鳥居播磨守忠救夫人 宝永五年戊子十

二月廿二日

一 惠照院順孝妙春大姉

江戸駒込江岸寺

光久公御女 島津右馬頭久雄夫人 慶安五年正月十一

日

一 徳雲院殿實参真大姉

右同二本枝廣兵衛(櫻)

綱貴公御女 松平飛驒守定英夫人 明和八年辛卯六月

八日

一 信解院殿方廣淨玄大禅尼

壽国寺

綱久公御女 酒井鞆負佐忠隆夫人 天和二年壬戌十二

月十二日

一 養蓮院殿貞信妙長日仁大姉 江戸谷中瑞林寺

光久公御女 織田因幡守信盛夫人 正徳元年辛卯七月

二十日

一 智性院殿円月寿相大姉

江戸大圓寺

吉貴公御養女、実島津伊賀守忠救御女 牧野備後守盛

央夫人 宝曆九年己卯十二月廿八日

一 光圓院殿真譽天教普潤大姉 江戸淺草西福寺

光久公御養女、実ハ島津函書久洪女 延享二年八月九

日 島津淡路守惟久夫人

一 諦觀院殿寂譽昌室義榮長光大姉 幡隨意院

重豪公御女子 明和元年甲申七月廿六日

一 照雲院殿(桂麿)柱巖慧月大姉(大禪童女)

右同御女子 天明八年戊申四月廿八日

一 淨信院殿本因即妙大姉

右同御女子 安永七年戊戌六月十三日

一 翠黛院殿松屋恵吟大禪童女 福昌寺

右同御女子 天明四年甲辰七月廿九日

一 芙蓉院殿牧窓智玉大禪童女

右同御女子 安永七年戊戌五月二日

一 蓮心院殿清質妙香大禪童女(童)

右同御末子 天明四年甲辰七月廿九日

一 香樹院殿秋露幻清大姉童女(禪)

右同御末子 天明六年丙午四月十一日

一 義光院殿天真祐明大禪童女(童)

重豪公御末子 寛政八年丙辰七月三日

一 麗珠院殿

右末子 寛政九年丁巳三月七日

一 天苗院殿潤光大禪童子

太守繼豊公

一 有邦院殿円鑑亨盈大居士

太守宗信公

一 慈徳院殿俊岩良英大居士

太守重年公

一 圓徳院殿覚満良義大居士

光久公御夫人

一 陽和院殿

綱貴公御夫人

一 蘭室院殿

吉貴公御夫人(人)

一 靈龍院殿

義久公御女

- 一 持明彭^(窓)総庵主 興国寺
- 一 持明様御母堂
- 一 實溪妙蓮 御靈屋御牌トモ 南林寺
- 一 貴久公御母堂
- 一 寬庭芳有大姉 御靈屋御牌トモ伊集院梅岳寺
- 一 忠久公御母堂
- 一 桃源妙悟大姉 同 雪窓院
- 一 忠良公御母堂
- 一 妙芳梅窓住一房 伊作西福寺^{①(時衆)}
- 忠国公長女大徳寺開山
- 一 日峯妙恵大姉 鹿兒嶋大徳寺
- 一 友久公御寺 田布施常珠寺
- 一 忠幸公御寺 阿多大年寺
- 一 伊作久逸公御菩提所 伊作善勝寺
- 一 同善久公御菩提所 同 多宝寺
- 一 義久公御牌御安置 国分竜昌寺
- 一 忠国公御牌 泊 海印寺
- 一 寶庭芳有大姉^(寛) 貴久公御母堂 加世田浄福寺

- 一 實溪妙蓮大姉御牌 持明様御母堂 国分遠寿寺
- 一 花麗妙香大姉御寺^(寛) 鹿兒嶋花舜寺^{①(野)}
- 一 伊作忠親及伊作一族菩提所 伊作天徳寺
- 一 蘭桂様御寺 義久公御子 栗ノ徳元寺
- 一 妙栄大姉 中翁様御母堂^(給) 大姫ヲ陽泰寺
- 一 貴久公御牌^(給) 大姫ヲ陽泰寺
- 一 幼直様御遺骨 義弘公御子 加久藤不動寺^(幼生)
- 一 同 飯野幼直寺^(幼生)
- 一 湖月宗江大禅定門 義弘公御公^(子カ) 同 宗功院
- 一 妙蓮大姉御牌 国分金剛寺
- 一 芳真大姉影仏弥陀 鹿兒嶋不断光院
- 一 歳久公御寺 帖佐心岳寺
- 御逝去
- 一三三四^{①(例)}
- 圓徳公御側

一 宝曆五年亥六月十二日、太守様御病氣為御尋、今日

昼時頃從 公方様 大納言様⑨之へ 上使御奏者松平紀伊(信考)

守様御出、御名代島津淡路守殿ニテ候処、御懇ノ被

蒙 上意御請御礼被仰上、御老中様へ淡路殿為御礼御

廻勉、若年寄様へハ主鈴御使者、御側衆へハ物頭御使

者、上使ノ御方へ表方御使者ヲ以御太刀金・馬代被

遣候、御内証ヨリモ 御守殿へ御伺ノ上 公方様 大

納言様御簾中様へ御文ヲ以御礼被仰上、(維豊女、黒田重政室)

ノ右御文ノ内へ被込被仰上候、⑩御礼は

一 六月十五日、重年公御病身御尋トシテ 上使阿部飛(正)

驛守⑪様ヲ以鮮干鱧一箱御拝領、從 大納言様モ御懇ノ

被蒙 上意、御名代島津淡路守殿御勉被成候、

一 亥六月十五日、御病氣為御尋從 公方様 上使御奏

者阿部飛驒守様之御屋敷へ御出、御名代島津淡路殿御

勉ノ処、御懇ノ被蒙 上意、鮮干鱧一箱御拝領、大納

言様ヨリモ御懇ノ被蒙 上意、御請御礼淡路守殿ヲ以

被仰上候、御老中様へハ、御側衆へハ物頭御使者、上

使ノ御方へハ表方御使者金馬代被遣候、御内証ヨリモ

公方様 大納言様へ御銘々御文ヲ以御礼被仰上候、

一 松平薩摩守病氣為御尋以 上使御懇ノ蒙 上意、御着

拝領被 仰付、從 大納言様モ蒙 上意、難有仕合奉

存候、右ノ御礼名代私ヲ以申上候、

以上、

六月十五日 松平越中守(定賢)

一三二五

一 宝曆五年亥六月十六日未ノ刻、重年公御逝去、

一 亥六月十九日、上使御奏者番井上河内守様御出、從(正経)

公方様薩摩守卒去御愁腸被 思召上候ニ付、御香奠白

銀五拾枚被下置候段、大納言様モ御同様 上意ノ段、

淡路守殿御承知御香奠御頂載、淡路守殿ニテ御請御礼

被仰上候、左候テ、即日御老中様方・若御年寄様方・

上使ノ御方へ淡路守殿御名代ニテ御礼御廻勉被成候、

一 右御香奠銀御付紙ノ儀ハ福昌寺へ被納置候、

一三二六

御届書

一同氏薩摩守病氣養生不相叶、今十六日致死去候、

一忌五十日 六月十六日ヨリ八月六日迄

一服十三ヶ月 亥六月十六日ヨリ子六月迄

右、私忌服御届仕候、以上、

六月十六日 御名

一三二七

一松平薩摩守病氣養生不相叶、今日死去仕候、忌服覚、

一忌十日 六月十六日ヨリ同廿五日迄

一服三十日 六月十六日ヨリ七月十五日迄

実正(子也)三候へトモ、故薩摩守養子罷成候間、嫡孫ノ続ニ

御座候、

松平(継豊)大隅守

一忌三日 六月十六日ヨリ同十八日迄

一服七日 六月十六日ヨリ同廿二日迄

実兄ニ候へトモ、故薩摩守養子罷成候間、甥ノ続ニ御

座候、

菊

右之通、忌服相受申候、以上、

御名内

赤松甚(右ノ、則正)左衛門

右、御用番様へ御届御同案一通小出様へ御届、

一三二八

安永元年辰十二月

一淨岸院様御逝去ニ付、十二月九日昼時過、上使松平(継豊繼室竹姬)

右京大夫様芝御屋敷へ御出、從 公方様御香奠白銀二

百枚、從 大納言様同二十枚被遣候、御逝去ニテ可為

愁腸ト被 思召候旨被(御為)蒙 上意、從 大納言様モ御

同様、御名代秋月山城守様(種茂)ニテ御廻勤、

一万壽姫君様ヨリ御香奠白銀五枚(家治女)

一御香奠銀二枚ツ、清閑寺中納言様・冷泉侍從宰相様・

藤波三位様・勘解由小路左京權大夫様ヨリ

一二枚 御内証御方様ヨリ

一同一枚 於品ノ御方ヨリ

一三二九

安永四乙未年

(重家齋室、玉鏡院)

一 御前様御不例、御典藥森雲禎・村田長庵・河野仙寿院・

橋降庵・小川玄達御頼被成、池原雲伯ニモ御伺之上、

御養生段々被尽候得共御驗無之、十月廿六日七ツ時於

高輪御奥御逝去、

一 右御病氣ノ段 公方様達 御聴候由ニテ、十月廿五日

御奉文ヲ以被為蒙 御尋候ニ付、御即答ハ被仰上候へ

トモ、御礼ノ儀ハ当日遅成候間、翌廿六日先例ノ通御

直文ヲ以被仰上④候、

一 十月廿七日戌之刻御入棺、

一 同廿九日酉刻御出棺、高輪御玄關ヨリ御本門被遊御出、

片町筋御通棺ニテ大圓寺客殿へ御入、

一 十一月二日酉ノ刻御葬礼有之、大圓寺住持御引導相勉、

島津(久念)左中殿御位牌被奉守候、左候テ 御代香左中殿、

一 同四日ヨリ八日迄、日数五日御中陰御法事有之、

一 同晦日、三拾五日於大円寺輕キ御法事有之、

一 十二月十四日、四十九日御法事一日御執行、

一 閏十二月十六日、御百ヶ日御法事御取越ニテ於大円寺

一日御執行、御代香左中殿、

一 御遣髮福昌寺へ御納リ、御廟所御位牌御建被成、四十

九日御百ヶ日御法事被相込、十二月十四日於福昌寺御

執行有之、御中陰御法事モ有之、

御靈屋御名目ノ次第

一三三〇(の1)

(家久) 一 慈眼院様御影御位牌、御一所ニ御安置有之、御影堂ト

御書付ニモ有之、平日ノ唱モ其通御座候、

(繼豐齋室竹姫) 一 浄岸院様御位牌殿ノ儀、御靈屋ト可申候哉、

一 惣御位牌所ノ儀、御靈屋ト可申候哉、

右、福昌寺、

(貴久) 一 大中様御影御位牌、御一所ニ南林寺客殿上ノ間へ御安

置有之、平日御位牌所ト唱、書付等ニモ致、且 御代

参被仰渡候節 御位牌所へ御代参ト有之候、寺家ノ内

へ御安置ニテ候御影堂又ハ御影殿トモ難申、此節仰渡

ニモ御影殿ト申唱相見得不申候間、御位牌殿ト可申哉、

一得佛様御影御位牌、御一所ニ浄光明寺へ御安置有之、
(忠久)

平日御莊殿等ノ儀、御影様御方宜仕、唱ニハ浄光明寺

殿ト申由、御代参被仰渡候節ハ、得佛様御忌日浄光明

寺へ御代参ト有之候、右南林寺同前 御位牌殿ト可申

候哉、

一淨国院様 (吉良) 月柱院様御位牌、得佛様御影御位牌御同

禮へ御安置有之、御位牌殿ト可申哉、

一信證院様御影御位牌、御一所ニ寿国寺々家別ニ御安置

ノ所有之、平日ノ唱御影堂ト申由候、右御安置ノ所御

造立ノ時分御位牌所御造宮ノ筈ニテ、御影ノ儀右所へ

御安置被成筈候旨、被仰渡候書留有之候、

一信解院様御影御位牌、御一所へ御代受ト有之候間、御

靈屋ト可申候哉、

一信解院様御影御位牌、御一所ニ右同断壽國寺へ御安置

有之、御造立ノ砌諸書へ御位牌堂ト有之候、信證院

様御方同前御靈屋ト可申候哉、

右ハ、此節御廟所・御靈屋・御位牌殿唱ノ儀被仰渡、

右御位牌御安置ノ所唱難相究候付、此節得御差図候旨、

寺社奉行申出候、

亥二月八日

(一三三〇s2)

張紙

本文、御影堂ノ儀御靈屋ト唱候テモ差支候儀無御座候、

右ニ付テハ福昌寺へモ相糺候処、御影様ノ儀ハ御存生

ノ内 御思召ヲ以御彫割(刻カ)為被仰付(由)、福昌寺へ申伝へ

有之由承届候、左候へハ御位牌ノ儀ハ御逝去以後一所

御安置為被遊ニテハ有之間敷哉ト存申候、御存生ノ内

御思召為有之 御影様ニモ御座候へハ、御影堂ト唱候

テモ御支無之候ハ、往古ヨリ唱来候通御影堂ト唱候

筋可然存申候、此旨申出候、以上、
寺社奉行
亥三月

(一三三〇s3)

本文、都テ吟味候通被仰付候条、此旨可承面々へモ可

申渡候旨、
(以下欠)

安永八亥八月七日

(小松清春) 帯刀

一三三三

安永八亥正月

一御廟所

但、御廟所ノ儀ハ御靈屋ト是迄相唱候事モ有之候ヘ

トモ、以来トモ書付等ニモ右之通相認候様被仰付候、

一御靈屋

但、御寺客殿等ノ内ニテ無之、別ニ御一方様ニテモ

御幾方様ニテモ御位牌御安置ノ所ハ、右之通相唱候

様被仰付候、

一御位牌殿

但、御一方様ニテモ御幾方様ニテモ御寺客殿等ノ内

ニ御安置ノ御座ハ、右之通相唱候様被仰付候、

右之通、江戸・御国トモ書付ニモ相認候様被仰付候旨

被仰渡候、

安永八亥三月

一三三三

一大雄山 御宮方

一南泉院 御位牌殿

右ハ、此内南泉院御宮ト唱并書付等ニモ相記候ヘトモ、

向後書付又ハ唱之儀モニケ条ノ通可相心得旨被仰渡、

正徳四年四月十六日

主殿

一三三三

一福昌寺 浄光明寺

御正統様ヘ年首并御正忌日、^①着出立等ノ節、御役人

ノ儀ハ屹ト参詣可仕儀候、無役タリトモ家柄ノ向ハ勿

論、諸士ノ儀モ心入ヲ以、参詣ノ儀ハ其通可有之候、

尤、右外ノ御寺ニテモ同断可相心得候、此旨寄々可致

通達候、

但、御正統様外ニテモ心入ヲ以参詣ノ儀ハ自其通可

有之候、

天明七年未八月

(市田教國) 勘ケ由

一三三四

一南泉院

御位牌殿ノ儀、御仏殿ト唱候儀有之候ヘトモ、向後ハ御位牌殿ト唱候儀モ有之、不相並候条、向後ハ御位牌殿ト唱可申候、

一御先祖様御位牌所ノ儀、御牌堂ト唱候儀モ有之、不相並候条、向後ハ御位牌所御廟所ト相唱候様被仰渡、

正徳四年午四月十六日

一三三五

一御先祖様御忌日、御寺参ノ御暇申上候テモ御存知ラレタル者ニテ無之候ヘハ御暇不被下御法ニ候、

一御先祖様御正忌日、御存知ラレタル者ハ精進可仕事候、御存不被成候者ハ、依心入ハ精進仕、或恐ヲ存、或世上ヲ存、精進仕^①者モ可有之候、畢竟御存知ラレタル者計致精進、御存知不被遊者ハ精進不致候テモ不苦候、面々心入次第可仕事、

一御先祖様御存生ノ内御前近不罷出者、致御寺参、御

位牌近所ニテ致拜礼者モ可有之候ヘトモ、別テ恐多事

ニ御座候間、諸事御存生同前存、其意ヲ以御位牌近^②々

ハ遠慮仕儀候、御側ニ被召仕、又ハ外様ニテモ能御存被成候訳モ有之者ハ格別ニ候間、有来通拜礼可仕事、

御寺参一向無用被仰付儀ニテハ無之候条、参詣候儀ハ

右之心入次第可有之候、

右之通、屹触ナト仕ニ不及候、御役人中咄コトクニ誰

人モ存知候筋可申聞被仰渡候、

享保六年丑正月申

一三三六

一御一門

右、^(雜書 雜室竹筵)淨岸院様御位牌所ヘ参詣候節ハ、拜殿縁類敷居上

疊三枚目ニテ拜礼、

大身分 大御目附格以上

右、同断之節ハ拜殿敷居涯疊一枚目ニテ拜礼、

寺社奉行ヨリ納殿役人迄

右、同断ノ節拜殿縁類ニテ拜礼、

右之通被仰付候条、御一門方參詣ノ節ハ、先達テ留守居差越其段相達、伴僧一人唐御門内迄罷出案内可致候、

安永四年未七月

御體様御下向

一三三七

写

一 淨信院様御遺髮、五月廿九日御昼西目御船中、依之御

(重華女教姫)

通筋并御泊ノ諸所諸事御手当ノ次第左之通可相心得候、

一 御着ノ儀ハ御供ノ内渋谷四郎右衛門ヨリ諸所郷士年寄

中へ可申渡候、

一 御泊ノ寺々へ其郷士四五人ツ、上下致着用御番可相勤

候、

一 向田御船卸ノ所(トヤ)ヨリ伊集院迄、郷次郷士兩人ツ、御

案内可仕候、郷士年寄・組頭ハ上下着候テ御通ノ節可

罷出候、

一 御通筋ノ儀、一通掃除輕申付、道橋危所迄ヲ取繕、道作ニ不及候、左右草杯相払候ニモ不及候、御通筋下④之節

知人差置、猥ニ無之様可申付候、御遺髮守ノ人足六人、

御泊次ニ可申付候、尤、人柄吟味申付、兵次着可為致

候、右兵次ノ儀ハ前以向田迄可遣置候、

一 從江戸④之御供人数、御広敷番ノ頭一人・御広敷横目一

人・御広敷番三人・御広敷同心四人・御国人足六人ニ

テ候間、諸所宿又ハ人馬等ノ儀可申渡候、

右之通、御通筋ノ諸所地頭へ可申渡候、

天明八申七月

(喜入久福)
安房

一三三八

一 淨信院様 御髮、向田迄御着船、御泊其外ノ御手当左

之通、渋谷四郎右衛門へ久見崎迄可申越置候、

一 久見崎へ御着船候ハ、其段早々申渡、御通筋郷士年寄

中へモ可申渡候、

一 御着船、直ニ隈ノ城稱名寺へ御入御泊、伊集院雪窓院

へ御泊、直ニ福昌寺へ御入被遊候間、御刻限ノ儀可差

凶候条、伊集院へ御着ノ考久見崎ヨリ是又可申渡候、

一御宿寺ニテ御遣髪外家トモ高卓へ乗セ上置管候、

一御泊ノ寺ノ其所々①ノ郷士四五人ツ、上下致着用御番相勉

管候、向田御船御ノ所ヨリ伊集院迄、郷士兩行ツ、御

案内仕、郷士年寄并組頭ヨリ上下着候テ御通ノ節罷出、

一伊集院境迄御先扨同心二人遣置、福昌寺迄御先扨相勉

管候、

一御遣髪守ノ人足六人、兵次着御泊次申付置候、

一御当地 御通路筋、西田町、千石馬場升形ヨリ島津内

膳前、新橋ヨリ北郷宗次郎屋敷前、北郷宗次郎屋敷北

郷権五郎角ヨリ後醍院喜兵衛前、大龍寺馬場サヨミ坂

筋福昌寺へ御入、

一同心五人御中途御用トシテ市来畠④向田内へ遣置候条、勤

方見合ヲ以可申渡候、

一白張挑灯六張

但、中蠟拾二挺添、

右、御中途為用心向田稱名寺へ差越置候、

右之趣書付相調、四郎右衛門最寄ニテ久見崎御船奉行

へ差越置、御遣髪御船久見崎へ御入津候ハ、早速御

船奉行ヨリ四郎右衛門へ可相渡候間、無間違可申越候、

天明八申七月

安房

一三三九

一宝曆五年亥六月十六日 太守様於江戸御逝去、御遺体

様六月廿五日夜六ツ半時芝御屋敷御出棺、大円寺へ御

入、翌廿六日晝七ツ時御寺被遊候、御発棺、川崎御泊、

八月十四日出水麓専修寺へ被遊御入、十五日専修寺御

立、野田感應寺へ御休、七ツ時分阿久根蓮花寺へ被遊

御着御止宿、十六日蓮花寺御立、西方御休(休カ)、夜入時分

限ノ城稱名寺へ御着御止宿、同十七日稱名寺御立、市

来港潮音寺へ御休、夜入時分伊集院雪窓院へ被遊御着

御止宿、同十八日雪窓院御立、横井御休ニテ夜入五ツ

時分福昌寺へ御入寺被遊候、

一上下七人、江戸大円寺海印

一上下六人、同戒翁寺融道

一一身賦、伴僧御国僧六人

右、(重年)円徳院様御遺体御供被仰付、御国元へ被差越候、

(行間朱書)「一東海道美濃路・中国小倉⑧筋御通路

一七月十一日伏見御着、一日御滞在、七月十三日大坂

へ御着、兩日御滞在、同十六日御出立、尼ヶ崎迄御

船ニテ、西ノ宮御休、晚景兵庫へ御着御、⑨止宿八月四

日赤間関へ御行懸り、即日大里へ御渡被遊御止宿、

翌五日大里御立、」

御入寺御式

一三四〇

一(重年)円徳院様御遺体御入寺ノ御次第

一八月十八日夜

一張番所二ヶ所 龍門橋辺小門内

物頭一人・肝煎兩人・足輕十人

但、⑩黒羽織着、御滞棺中(空白、ママ)五人、御葬送ノ節初ノ

通、

小門内ハ足輕五人

但、黒羽織、

一涅槃門諸人通融門番所一ヶ所

足輕一人、門前⑪者ハ兩人、

一御紋付大丸挑灯九ヶ所

一箒火三ヶ所 大門下馬札辺

一御一門・大身分・御家老・詰前ノ御番頭、大門下迄被

為出候、

一寺社奉行・御用人・御近習、大門下迄罷出御先ニ参リ

客殿ノ庭差引、

一即夜ヨリ御番僧御所ノ間へ二十人ニテ拾人ツ、御滞

棺中、夜白御番、

一大衆、柵門外ヨリ地藏堂辺迄罷出 御先供、

一福昌寺住持大門前へ罷出、 御遺体様大門ヨリ御入、

山門ノ前御通、東廊下口ト山門ノ間御通、客殿正面ヨ

リ御入、八尺ノ間正面ヨリ御入、御所ノ間へ 御安置、

但、御乗物御(空白、ママ)首共其節ハ御側廻ヨリ奉守候、

一御前卓、御仏具・御鼻紙立等相備、四方御屏風、

一 御菓子・御茶湯・御靈膳上ル、住持大衆出席、諷經、御手長出世僧、御手長取次御側御小姓、

一 十九日六ツ時ヨリ五ツ半時迄ノ間、御行水・御入棺

ノ御式有之、御靈御茶・御茶湯差上、御手長右同断、

一 御入寺御夜ヨリ御滞棺中、昼夜御側廻御番十七人、

一 御持セ御道具、八尺ノ間正面ノシ立ノ涯請取、御步行

十人、

一 御入寺即夜ヨリ小番二十人ニテ昼二人ツ、大番二十

人ニテ昼夜三人ツ、御番、(以下衍文)二十人ニテ昼夜三人ツ、御

番、

一 火除、福昌寺火消ヨリ、

一 御入寺即夜ヨリ御滞棺中、御目付兩人・横目三人夜白

詰、

一 御一門・大身分ノ間一人、御家老一人、寺社奉行一人、

御用人一人、

右、御入寺ノ翌日ヨリ御滞棺中、毎日昼計詰、

一 御近習役一人

御入寺即夜ヨリ御滞棺中、昼夜詰、

一 御番頭兩人ツ、

昼夜詰、

但、御寺詰ノ御役々支度、不洗物麻上下、

一 御入棺ノ御式相濟候以後ヨリ御葬送ノ間、御手長御番

頭、御手長取次小番ニテ、御法事ノ節之通、

但、御番頭並小番支度、ノシメ・半上下、

一 御靈前調方

御包丁人①頭二人・御包丁人一人・御料理役五人・御行

器役五人・御膳配役四人・盛物役十四人

但、出家相濟②添、

右四行、御入寺晚ヨリ御滞棺中、

一 御入寺ニ付、御通筋へ寄合並以上月次御礼罷出候面々、

与中諸土罷出、福昌寺地藏堂辺ヨリ御供仕退去、

一 御一門

若党四人・草り取一人・挑灯持式人

一 御勘定奉行・与頭・御番頭・一所持・同格・寄合・御

近習役已上ノ御役人寄合並

小若党一人・草り取一人・挑灯持一人

一御留守様(居脱之)ヨリ納殿役人迄

若党一人・挑灯持一人

一其外御役人諸士

挑灯持一人

一寺内へ参候供廻リノ儀、右通可相心得候、

一右定外ノ惣供廻ノ儀、金藏脇堀端ヨリ肝付彈正・入来

院隼人裏門通へ扣、

一寺内勤ノ供廻ハ涅槃門・花舜軒辺へ扣、御入寺以後大

門外へ扣、

一大丸挑灯一对ツ、

客殿正面・同庭・東玄喚・西玄喚・山門・仏殿・大門・

小門

但、御滞棺中御普請方受込、

一白御挑灯四張二御小者
二足輕

一白高御挑灯二張足輕持

右、横井迄被差越、

御葬送御式

一三四一(の1)

(行間朱書)一礼記、問曰、並有喪如之何、何先何後、孔子曰、葬、

先輕而後重、其奠也、先重而後輕、礼也、云々、其奠

也、先重而後輕、礼也、

(一三四一の2)

(行間朱書)一円徳院様宝曆五年②八月十八日福昌寺へ御入寺、同

十九日ノ夜六ツ時ヨリ五ツ半時迄ノ間御入棺、同廿

一日夜五ツ半時ヨリ四ツ半時迄ノ間御葬送、同廿五

日ヨリ廿九日マテ御中陰御法事日数五日御執行、

一圓徳院様御葬送之御次第(重年)

一御門牌、大門ト小門トノ間へ奉掛、

一①張番所ニケ所御入寺之通、

一御門牌之前卓、以前之通調方被仰付、

一御門牌御出ニ付、玄喚ヨリ足輕上下着用ニテ奉守、御

歩行一人相付奉掛、御入之節モ同前ニテ、五堂莊嚴僧

奉請取御所之間へ御安置、尤、寺社方取次玄喚迄罷出、

一 御一門・大身分

若党一人、草り取一人、挟箱持一人、挑灯持一人

但、雨天長持持一人、

一 御家老・若御年寄・大御目附

付与力ノ外、若党一人、草り取・挑灯持・挟箱持一人

ツ、

但、雨天手笠、

一 御勘定奉行・与頭・御番頭・一所持・同格・寄合・同

並迄

若党・草り取・挑灯持一人ツ、

但、雨天手笠、

一 御用人・御近習番迄^{①役}

与力・若党ノ内一人、草り取一人、

挑灯持兼、

一直触之御役人

草り取一人

右之外諸御役人、草り取無用、

一 客殿ヨリ御葬場迄御供ノ御一門初又ハ召列候儀無用、

一 葬衣着用ノ人計挟箱、

一 惣人数供廻、岩山直次郎屋敷ヨリ永江伊右衛門屋敷若

宮辺へ左右ニ扣、

一支度、ノシメ着用格式ノ人ハ其通、

一 与中諸士先例通罷御葬場へ^{①被}差通、

但、下馬札辺へ小屋打、与所筆者御帳付、外城衆中

参合候者ハ何方衆中ト御帳ニ付、諸士同前御葬場へ

被差通、

但、地頭ヨリ申渡、

一 他国ヨリ御使者有之候ハ、御使番受込、

一 在番琉球人御葬場へ罷出候様被仰付候、

一 御葬場四方二重垣ノ外白木綿内白晒幕、^{①ニテ}

一 御葬式諸役者へ葬衣渡所、衆寮ノ外龍護院前ニ小屋打、

御目付一人・横目兩人・御細工所檢者兩人・諸足輕四

人ニテ渡之、御廟所へ御越以後、葬衣右小屋ニテ受取、

御持セ御道具兩人引渡^{①方}、首尾迄右役々受込、

一 御行列繰出中通御目付社方取次受込、

一 中紅三足

但、御厨屋柱巻用、

一 今織金入二本

但、右同水引用一幅、

一 四方門

但、門三ツハ杉丸太、北之方一ツ松木柱、イツレモ

丹塗、

一 客殿ヨリ御厨屋迄三縁垣荒茭敷、御厨屋ヨリ御廟所迄

危所迄垣荒茭敷、

一 御葬送ノ当日、仮御棺ヨリ本御棺へ御移替ニ付、御普

請奉行一人・惣大工一人・大工拾人御所之間廻⑧へ扣、

出家ヨリ引合次第取仕立、尤、御移方ノ儀ハ出家御側

廻⑨く、

一 御葬送ノ夜、御祭文被差上ニ付、御出棺前御祭文平供

台定敷⑩台ヨリ盛物役持出、小番へ渡、小番ヨリ 御牌

前へ備候テ御靈膳上ル、御手長御番頭兩人・御手長取

次小番兩人、何レモ支度熨斗目・半上下、左候テ侍衣

ヨリ 御名代へ御案内申上、 御牌前へ御焼香、畢テ

八尺ノ間上リ口疊一帖目正面ニ御座、御拝礼ノ節、住

持祭文ヲ取差上、御受取、読手之僧へ御渡読之、其間

御座、右畢テ御回向済、侍衣御案内ニテ憩月ノ間へ御

扣、右ニ付小番十人、盛物役大番十四人、

一 御祭礼ニ付テ、平供台御靈膳道具、其外平供台へ右付

ノ諸道具、調方被仰付、御腕箸銀ミカキ、御祭礼紙兩

面金磨、其外御道具都テ白木具、

一 御祭文ノ御式相済、又々御靈膳上ル、御手長並取次等

前条之通、

一 右御靈膳上ル、畢テ御女中方ヨリノ御代香被仰付、引

続御一門方御焼香拜礼、大身分並大御目付格已上ノ御

役々拜礼、

一 御葬送ノ夜前、客殿諸式相初候節、御一門・大身分並

大御目付格以上ノ御役々縁類へ被為詰、拜礼相済直ニ

退席御供、

一 御出棺之節、 御位牌龕者ノ僧ヨリ 御名代(島津貴徳)備中殿へ

奉渡、八尺ノ間ヨリ御葬場迄御持、三通被為奉聞、御

棺御厨屋へ御直被遊候節、龕者へ御渡、龕者 御前卓

へ奉安置、御名代発心門之右脇ニ伺候、

但、茅筵敷、

一 御散花・本松明・御燒籠・御幢⑧小、惣垣内菩提門之方

ヨリ涅槃門口迄一列ニ備、其外御道具役者一遍相廻、

涅槃門ヨリ垣ノ外へ披リ、

一 御荷附馬ヨリ御手笠・御杖迄ハ一通リ相廻、涅槃門ヨ

リ外へ出、御引導済迄扣、

一 惜綱へ被為済候面々並御家老・若御年寄・大御目付、

発心門ト涅槃門トノ間垣内へ伺、

一 御用人以上葬衣着用ニテ御供ノ面々、発心門外へ伺、

一 諸御役人 御厨屋外垣ノ涯へ扣、

一 御正統様御葬送ノ節、家筋ヲ以役者被仰付被下方有之、

但、御女中様ノ節、家筋ノ勤方ニテハ無之、月金

桂院様ノ節、御前卓納殿役人一人・奥大番兩人、其

外奥附足輕ヨリ勤之、淨岸院様之節、添御用達一

人・大番目付兩人、

一 御廟所迄御引導師不及御列、御側廻ヨリ 御輿御供被

仰付、白御挑灯三対、

一 御引導相済、御廟所御越ノ節、御用係ノ御家老・寺

社奉行・御用人並御側廻ノ内御供、御廟所見ケシメ

ノ儀ハ御近習役ノ内ヨリ相勤候、普請奉行附役召列相

勤、

一 白木綿幕一頭

一 頭綱二筋

但、芭蕉調、

一幕串竹

右、御葬送御引導相済、御棺ヨリ仮御棺ニ御乗移ノ

節、御厨屋へ引廻用、⑦御普請方請込、△

⑦一 御棺廻ニ先例之通焼捨、△御普請奉行・寺社方取次・

横目・御普請方檢者差引、御普請方大工人足門前者相

加手伝、

一 御廟所御番御側廻ノ外、御葬送ノ夜ヨリ御石塔建迄、

横目兩人・足輕二人・人足一人昼夜御番、

一 御葬送ノ節、御当地諸外城諸寺院・山伏、野諷經被仰

付、布施被下候、

但、下馬札辺木屋打、横目兩人・足輕四人・人足二

人相詰渡候、

一 錢五百文ツ、

門首 東堂 長老 能化 出世 越家 西堂 先達

単寮

一 同百三文ツ、

寺持ノ平僧 寺持ノ山伏 衆徒妻帯

一 同百文ツ、

平僧 平山伏 行者

右之通、布施被下候、

一 御近習役葬衣、二幅袖附、

但、御用人以上自分調ニテ、御物御取替ヲ以、調方

被仰付、御近習役以下、

一 御納戸奉行以下御行列ノ御供土ハ、一幅袖付、

一 御中間・御小者・足輕、上下葬衣、

一 御駕籠ノ節、御挾箱持其外人足葬衣上計、

一 錢三貫文 福昌寺

右、御引導相勤候間、布施、

一 錢三貫五百文

但、一人五百文ツ、

奠湯役 奠茶役 鎖龕役 [▽]起龕役 [△]維那役

御葬送場湯役 同奠茶役

右同断ノ節、役者相勤候間、布施、

一 同一貫四百文

但、一人百文ツ、

頭堂一人 典座一人 鑑司一人 浴司一人 知客一人

焼香侍者一人 大鼓一人 小鼓二人 大鈸一人

龕者一人

右同断ノ節、布施、

一 錢五百文 出世僧一人分

一 同三百文 寺社一人分

一 同百文 平僧一人分

右同断ノ節、福昌寺へ相付罷出候出家ノ内、東堂・長老・平僧へ右ノ通被下候、

一 銀二両 福昌寺

一 銀二両 福昌寺

一 錢三貫五百文 衆僧三十五人

右同断ノ節、右経書写ノ布施、

一 錢五百文 御手長僧一人

右、御滞棺中御手長相勉候テ被下候、

一 銀百七拾二匁 御番僧二十人

但、一人式兩ツ、

右同断御番相勤候付、右ノ僧へ被下候、

右四行、勤方ニ付、御布施物外二重ニ被下候、

一 錢八百文 門前者四人

右、御棺廻焼捨方へ相勤被下候、

以上、

(一三四一の3)

一 右三万程

右、淨国院様御葬礼ニ付右(空白)書調被仰渡御用ノ由、

寛陽院様 大玄院様御葬礼ノ節茂御船奉行ヨリ取調候

由先例候間、御普請方へ為持候様ニ、寺社奉行衆ヨリ

間合ノ上、定頭主取ニテ定水主並御船手中宿迄罷出(空)

調、卯十月廿二日ノ朝ニ掛、御普請方へ定水主ヲ以為

持候事、

延享四年卯十月

(一三四一の4)

一

新納四郎(久保)

右ハ、御正統様御葬送ノ節、前御棺守先々ヨリ佐多

家被勤来候付、圓徳院様前御棺守島津(久保)全殿被相勤等

候処、病氣有之難被相勉、家内名代可相勉人無之、庶

流ニ者寄合以上ノ人無之候ニ付、全殿名代被仰付候、

明後廿一日夜、葬衣着用ニテ可被相勉候、福昌寺へ被

罷出候刻限ノ儀ハ御法事方へ可被承合候、此節ハ全殿

へ差支候訳ヲ以名代被仰付、家筋ニ相掛儀無之候、

右申渡、寺社奉行へモ可申渡候、

宝曆五年亥八月十九日

(島津久徳) 主殿

一三四二

一 圓徳院様御葬送ノ節、祭文献納ノ人数左ノ通、

島津備中殿 島津周防殿 島津出雲 島津大学(久重)

島津図書 島津筑後 島津主殿殿 島津将監殿

島津全殿 種子島藏人 島津淡路守殿 佐土原大 安寺来

中山王(尚徳王)

以上、

一 御葬送ノ節、剃髪・葬衣ニテ勉方被仰付候人数左ノ通、

椎原平兵衛(景隆) 梶原助右衛門(景隆) 梶原傳内(景隆)

木藤休之進(成興) 木藤彦左衛門(成昌) 木藤四郎兵衛(貞高)

中村左十郎(種昌) 中村勘左衛門(勘右衛門カ、有隣) 長野平助(朱書)

長野市右衛門(末吉) 長野三左衛門(朱書) 長野寛左衛門(高岡)

長野幸左衛門(清水) 梶原清左衛門(蒲生) 中村龍存坊(兼徳)

長野筑右衛門(祐精) 猿渡新右衛門(実賢) 中村孫右衛門(申良)

以上、

一 本田六右衛門(親次)

右、御葬送ノ節、御太刀持役被仰付候、前髪有之、

不及剃髪、

一 圓徳院様御遺体、宝曆五年八月十八日福昌寺へ御入寺、

一 八月十九日夜六ツ時ヨリ五ツ半時迄ノ間、御入棺、

一 八月廿一日夜五ツ半時ヨリ四ツ半時迄ノ間、御葬送、

一 八月廿五日ヨリ同廿九日迄、日数五日、御中陰御法事、

中日之夜頓写執行有之、右ニ付テハ硯水沢 御名代御

勉有之、島津備中殿、

右ノ節、道島檢校・荒川勾当平家ヲ語ル、

一 御葬送之節 太守様ヨリノ御祭文、御名代島津備中殿、

御代香且又御出棺之節尊牌(御被)ヲ為奉守、

一 島津淡路守殿御名代使者酒匂源左衛門、同加賀守殿御

名代使者能勢源助、

右者、圓徳院様御葬送之場、御中陰ノ節、御香奠並

御祭文被献候、

一 圓徳院様御ウフカミ・御元服ノ節ノ御髪サキ納リ方、

納殿役人、被仰付候、

一 子八月十六日中山王ヨリ祭文献納被仰付、御悔ノ使者

豊見城按司、以弔僧圓覚寺蘿山、御一周忌御香奠使者

糸例親雲上、御機嫌伺ノ使者西平親雲上、御祭文僧

對祝、

一 中山王御祭文献納ニ付、当日五ツ時御位牌客殿へ奉安

置候、中山王献納物御牌前へ進物番ヨリ相備候節、使

者罷出拜礼、侍衣披露有之、使者引下り候、

一 松平大膳(重就)大夫様ヨリ為御代香御使者番頭大和登被差越、

御番地(当カ)へ御中陰御法事内致着、亥八月廿六日福昌寺御

牌前ニテ御代香被仰付候、

一 河野安(通カ)之右衛門 木脇伊左衛門(祐絶)

右ハ、御葬送ノ節、高野御登山ノ 御鬢髪守被仰付候、

客殿ヨリ 御棺御先ニ奉守、御棺御同前於御葬場三篇

御廻リ、 御棺御厨屋へ御直リ被遊候節、 御鬢髪齋

者之僧奉請取、 御棺御右高欄ノ内ニ奉安置、御引導

相濟、最前ノ僧ヨリ右兩人奉受取、客殿正面ヨリ御入、

御所之間へ御直リ被遊筈候、右ノ節不及葬衣、

一 御香奠銀三枚 近衛相府様ヨリ

右ハ、御寺へ被為備由ニテ、御屋敷へ御使者被遣候、